

TAT

<http://tuat-dousoukai.jpn.org/>

農工通信

NO. 80

Tokyo University of Agriculture and Technology



フィールドミュージアム唐沢山

■ 寄稿文随時募集中

目次	■ 新旧同窓会長の挨拶 3	同窓会で旅行の計画は如何なものか 鹿熊 俊明 (登志) (獣医S 34) 30
	■ 理事長挨拶 4	ノーベル賞とボリアセチレンのこと 京谷 陸征 (織工S 38) 31
	■ 同窓会第46回通常総会・理事会開催さる 5	木材のJ A S 格付検査業務に携わって 白井 久 (林学S 44) 32
	■ 同窓会創立50周年記念事業の募金活動推進のお願い及び部会別寄附者一覧 10	松本での100年の蚕糸研究を終えて 高林 千幸 (製糸S 48) 33
	■ 同窓会支部長及び支部連絡員 13	環境科学と私 上本 道久 (環保院S 57) 34
	■ 叙勲者からの寄稿 14	鳥取県における健康食品並びにバイオ産業への取り組み 野口 誠 (工化院S 54) 34
	桔梗ヶ原の思い出	落研から自立し優勝 横田 堯 (林産S 44) 35
	町田 暢 (農学S 17) 14	和牛と巡り会っての大動物臨床20年 堀 俊明 (獣医S 52) 36
	教師の道を	「大きな問題も毎日の一歩から」と子どもに話すわたしは 福澤 徳穂 (植防S 55) 37
	古澤 實 (製糸S 30) 15	■ 木版画 恩田秋夫 (紡織S 22) 38
	叙勲の栄に浴して	■ 本学“広報大使”白石昌則さんからからの寄稿 39
	貝塚 一郎 (獣医S 34) 16	東京農工大学のオリジナルクラッチバッグが欲しい
	あれから半世紀弱	■ 退職のご挨拶 40
	藤巻 宏 (農学S 36) 17	有馬 泰紘 (生物生産学科) 40
	受章に際して	多田 全宏 (農化S 43) (応用生物科学科) 40
	杉山 俊宏 (林学S 36) 18	加藤 誠 (農工院S 46) (地域生態システム学科) 40
	耕す仲間たちが与えてくれた私の叙勲	久保田 稔 (地域生態システム学科) 40
	廻谷 義治 (農学S 38) 19	生原 喜久雄 (林学院S 43) (地域生態システム学科) 41
	■ 同窓生からの寄稿 20	山根 義久 (獣医学科) 41
	今に恩ぶ師の恩	黒岩 紘一 (電気電子工学科) 41
飯田 辰夫 (獣畜S 19) 20	山本 隆司 (機械システム工学科) 41	
「贈右大臣大久保利通公碑」顕彰文を書写する	■ 平成20年度同窓会学生援助事業報告 42	
吉田 富雄 (農学S 34) 22	■ 同窓会役員等体制 48	
国枝栄調教師の調教馬(マイネルキッツ号)が第139回春の天皇賞で優勝	■ 平成20年度卒業生・修了生 49	
田谷 一善 (獣医S 46) 23	■ 部会・支部・クラス会だより 56	
小田 嶽夫先生	■ 掲示板 60	
鈴木 成美 (林S 29) 24	■ 事務局だより 63	
随 想	■ 編集後記	
新井 正彰 (機械S 42) 24		
農工大の思い出		
前田 芳宏 (林学S 56) 25		
農学部と工学部をむすぶもの		
松尾 義之 (応物S 50) 25		
非農家出身者の農業遍歴		
今井 昭仁 (農学H 5) 26		
天敵昆虫オオメカメムシとの出会い		
大井田 寛 (生産H 10) 27		
ソムリエと農業にかける情熱		
平川 敦雄 (生産H 11) 28		
フィリピンの一断面		
谷井 宏邦 (織化S 38) 29		
同窓生の皆さんへ		
山本 明 (農工院S 50) 29		
同窓会雑感		
山本 陽次 (農工H 2) 30		

同窓会長就任のご挨拶

新同窓会長 藤森 明彦 (工化S42)



去る5月30日の総会において同窓会長に選任されました。前任の畑中会長は、大学の独立法人化という大きな変化の中で、同窓会活動をより一層価値あるものとし、活性化させることに大きな成果をあげてられました。更には東京農工大学創基140周年・同窓会創立50周年合同記念事業に向けてのしっかりとした方向付けと基盤を構築していただきました。ご退任にあたり、深く敬意を表する次第です。本来ならば、畑中前会長のもとで同窓会創立50周年記念事業の完成を願っておりました。後を継ぐ私にとっては甚だ荷が重いのですが、皆様方のご指導、ご協力をいただきながら、務めを果たしてまいりたいと存じます。

私共が在学していたころの東京農工大学に関しては、学外ではその名前を聞くことが少なかったように記憶していますが、今日朝日、読売、日経等の主要紙に目を通してますと、毎週と言ってよいほど頻繁に本学に関する記事を目にすることができます。学内での研究成果に関する記事はもちろんのこと、ミニチュアホースの誕生のニュースや、生協の白石さ

んの話題まで、誠に多岐にわたる農工大学の有様が広く報道されるということは、大学が大きく発展しているということでもあり、我々OBにとってまことに喜ばしいことです。

今年3月現在で見えますと、同窓会会員数は正会員で4万名を超えるに至りました。中でも工学関係部に属する会員数が全体の半数を超える状況にあります。同じく3月末時点での準会員数(在校生)は4千名を超え、その御父兄など本会の趣旨に賛同し、賛助会費を納入していただいている賛助会員数が3千名を超えているということを改めて考えてみる必要があります。

同窓会の目的は、会員相互の親睦を深めることは当然のこととして、さらには在學生(準会員、将来の正会員)に対して、また大学自体に対して魅力的な機会とサービスを提供することがより一層求められているように思えます。同窓会創立50周年を迎えるこの時期に、皆様方のお知恵をいただきながら議論を深めることができればと存ずる次第です。会員の皆様のご協力を重ねてお願いし、就任のご挨拶といたします。

退任のご挨拶

前同窓会長 畑中 孝晴 (農S31)



平成15年5月、西尾邑次会長の後を受けて同窓会長に就任して以来、有能な役職員はじめ会員の方々に支えられ、大学側の大変なご理解とご協力のもとに何とか任務を全うすることが出来ました。在任中、支部活動の強化、学生援助、会報の雑誌化、ホームページの充実などを心掛けて参りましたが、若い同窓生を捉えきれないなど、あまり大したことも出来ず申し訳ない気持ちで一杯です。

後任の藤森会長は、応用分子化学部会の部会長として同窓会活動に尽力されるとともに、経営協議会委員として大学の様々な問題の解決のために活躍されており、大学側の信頼も厚く、会長として相応しい方をえたと喜んでおります。さらに、藤森さんは伝統のある会社の現職社長さんですから、役人上がりの私とは違った発想で新しい時代に対応した同窓会に発展させて頂けるものと期待しております。

東京農工大学は規模は大きくありませんが、研究水準の高さ、外部資金の獲得、活発な産学官交流など関係業界から高く評価されており、我々同窓生はこれを誇りにしております。特に法人化してからは新しい試みに果敢にチャレンジしておられますが、同窓会がこれに十分応えることができなかったと反省しております。

去るに当たり、私の最大の心残りは同窓会創立50周年記念事業の寄附金集めが、不況の折とはいえ当初計画を大幅に下回っていることです。退任後も名誉会長という立派な肩書きを頂いてしまいましたので、今後とも、記念事業をはじめ同窓会の活動に協力して参りたいと思っております。長い間ご支援を頂き有難うございました。

これからの東京農工大学並びに同窓会の一層の発展と同窓会の方々のご活躍を心から願っております。

理 事 長 挨 拶

同窓会活動と記念事業へのご協力を

理事長 亀山 秀雄 (化工S48)

同窓生の皆様にはお元気でご活躍のことと存じ上げます。

さて、この1年ぐらいを見てもみますと、農工大学関連の新聞記事は、毎日何処かの新聞に掲載されるような件数になってきています。これにより母校の知名度も上昇してきていると期待しております。

同窓会は、平成24年に創立50周年を迎えます。母校の発展とともに卒業された同窓生の皆様の社会における貢献度も各方面で大きくなってきていると思います。

これからの時代、環境と安全に配慮した「気づき」と「地域の活性化」が重要視されてきています。農学と工学を学んだ皆様が連携されて活動されることを期待しております。そのためにも、各支部での農工の連携した同窓会活動ならびに各部会での専門性を生かした活発な同窓会活動が求められています。

現在、農工大学創基140周年と同窓会創立50周年を記念した事業が行われております。これを機会に、各支部ならびに部会での募金活動をいっそう活発に行って頂きたく、同窓生のご協力をよろしくお願い申し上げます。支部総会や部会総会の際に、同窓会事務局に派遣要請をいただければ常務理事が伺って、事業の説明や大学の近況、専門的なニュースの紹介などを行えるようにスタンバイしております。総会の話題としてご利用ください。

同窓会第46回通常総会・理事会開催される

■日時：平成21年5月30日（土）13：30～15：15 ■場所：小金井キャンパス工学部講義棟 ■出席者：172名（内委任状67名）



第46回通常総会・理事会は、5月30日（土）、母校小金井キャンパス工学部講義棟にて開催された。通常総会に先だって理事会が開催され、畑中会長を議長として会長・副会長の推挙、特別会員の推薦、通常総会の議案が承認された。

高橋副理事長から、出席者が成立定数を超過通常総会が成立した旨の報告があった。畑中会長から、「同窓会創立50周年記念事業の募金の協力要請等」の挨拶があった。続いて、ご出席いただいた小畑学長をはじめ、来賓（竹本副学長、額額工学府長、國見農学府長、千賀連合農学研究科長、梶井東京農工大学教育研究振興財団理事長）の紹介があった後、小畑学長から同窓会からの支援に対する謝意があり、大学の現状（科学技術振興調整費が2件採択、環境リーダープロジェクト採択）の紹介とともに合同記念事業の募金の協力要請があった。引き続き、高橋副理事長から、通常総会の議長については会則第9条に基づき畑中会長が務める旨の説明があった後、議事録署名人に淵野雄二郎理事、滝山博志理事を選出し議事に入った。

議事

1. 平成20年度事業報告及び決算報告並びに監査報告

堀総務部長より、資料に基づき平成20年度の事業報告〔別記1〕、多羅尾経理部長より、平成20年度決算報告〔別記2〕があった。続いて深水監事より、決算報告書・帳簿・伝票等の精査をした結果、何れも適正に処理されており、事業・業務執行状況も適正であること、また、個人情報の保護に関する取扱いも適正に行われている旨の報告があり、何れの報告も異議なく了承された。

2. 平成21年度事業計画及び収支予算

堀総務部長より、資料に基づき平成21年度事業計画〔別記3〕多羅尾経理部長より、平成21年度の収支予算〔別記4〕の提案と説明があり、審議の結果、異議なく承認された。

3. 会長・副会長の選任

亀山理事長より、平成21～22年度会長・副会長（20名）の選任について理事会で推挙された者の提案がなされ、審議の結果、原案どおり承認された。〔別記5〕

4. 特別会員の推薦

亀山理事長より、理事会で推薦された特別会員の紹介があった。

5. 同窓会創立50周年記念事業の募金活動

昨年の通常総会で承認され、募金活動を開始してから1年目を迎えるようとしておりますが、最低目標額の24%と低い水準に止まっているため、高橋副理事長より通常総会に先立って開催された第2回同窓会創立50周年記念事業会の討議内容及び資料「別記6」に基づき募金の協力要請を行った。

6. 同窓会50年史発行の進捗状況及び原稿依頼

大石同窓会50年史編纂委員長から、同窓会50年史発行の進捗状況の報告及び各部会長・支部長に部会・支部の創立の経緯、活動の記録等についての執筆依頼を行った。

7. 「農工通信80号」の発行時期の変更

畑中会長より、例年の8月下旬の発行時期を11月下旬に変更したい旨の提

案があり、承認された。

8. 同窓会室に通じる木道改修計画

畑中会長より、木道の改修計画について提案があり、承認された。

9. その他

- 1) 新旧会長の新任・退任の挨拶があった。
- 2) 畑中会長が、名誉会長に推挙され、満場一致で承認された。

通常総会終了後、総合会館において懇談会が開催された。

〔別記1〕

平成20年度事業報告

1 第45回通常総会・理事会の開催

平成20年5月24日（土）、府中キャンパスにて第45回通常総会・理事会を開催した。議事内容は、1)会則・細則の改正（案）、2)平成19年度事業報告（案）、収支決算報告（案）、監査報告、3)平成20年度事業計画（案）、予算（案）、4)平成20～21年度常務理事指名（案）、5)平成20～21年度理事・代議員の選任（案）、6)平成20～21年度監事の選出（案）、7)特別会員の推薦（案）、8)同窓会創立50周年記念事業の募金活動開始、9)同窓会50年史発行、10)会員名簿発行延期について諮られ承認された。

2 同窓会組織の強化、活性化および財務体質の健全化

部会・支部・職域組織の活動を支援するとともに、本年度から募金活動が開始されたため各組織との連携を強め、例年に増して常務理事の積極的派遣を行った。生物システム応用科学府に部会を設置した。前年度に引き続き、入会金、賛助会費等の大幅な収入増をはかるための対策を推進した。また、ペイオフ対策及び更に利息による増収入をはかるため、定期預金を国債に切替えた。

3 同窓会創立50周年記念事業の推進

同窓会創立50周年記念事業会を開催して、1)小金井記念ホールの設置、2)大学50周年記念ホール（府中）の増改修、3)同窓会50年史の刊行（同窓会予算より負担）、4)学生援助の実施、5)祝賀会の挙行（同窓会予算より負担）等の募金活動を開始した。同窓各位には「農工通信79号」に案内文、趣意書、要項、振込用紙を同封し、協力依頼をするとともに各部会・支部、各クラスに協力を要請した。

4 同窓会会員名簿の発行延期

個人情報保護法の施行以来、同窓各位からの苦情が頻繁にあること、動静調査による非掲載希望者が54%に達していること、部会・支部へのアンケート調査結果では78%が延期に賛成していること等を斟酌するとともに、代替サービスを従来どおり実施しつつ、名簿発行の在り方について検討するため、名簿発行を延期することを総会に上程し承認された。

5 「農工通信79号」の発行

従来の会報を大幅に刷新した「農工通信77～78号」が、会員からの評価が大変好評であったので、「農工通信79号」も前号の編集方針を基本的に踏襲するとともに、新規に「退職のごあいさつ」のコラム欄を設置した。

6 同窓会PR活動の実施

同窓会紹介パンフレット及びHPの更なる充実を図り、PR活動に努めた。

7 会員の動静整理の継続実施

農工通信の未着信会員について常時追跡調査を行うとともに、年度末に更に全会員に対して動静調査を行った。

8 (財)東京農工大学教育研究振興財団への協力

本財団の事務に対する実質的支援を従来どおり継続して行った。

9 母校に対する援助、新入正会員歓迎行事の継続実施

学生の勉学・学生生活に関して、学会発表、コンテスト・コンクール等発表・入賞祝い、優秀卒論副賞等の援助、学園祭・課外活動の援助、同窓会推薦キャリア・アドバイザー支援等の予算を更に増額して行った。また、卒業・修了証書カバーの贈呈を継続して行った。

10 会員の慶弔

祝電、弔電を打電した。

[別記2]

平成20年度収支決算報告 (平成20年4月1日～平成21年3月31日)

1 基本金決算

(1) 収入

(単位:円)

款 項 目	(A) 平成20年度予算額	(B) 平成20年度決算額	(A) - (B) 増減	備 考
前年度繰越金	325,116,691	325,116,691	0	
終身会費	1,470,000	2,045,000	-575,000	納付者70名
賛助会費	27,420,000	28,070,000	-650,000	〃 939名
その他	0	0	0	
合 計	354,006,691	355,231,691	-1,225,000	

(2) 支出

(単位:円)

特別会計繰出	12,135,000	12,135,000	0	基本金より
一般会計通常繰出	13,710,000	13,710,000	0	賛助会費の2分の1
一般会計特別繰出	1,445,561	1,445,561	0	一般会計支出予算の不足分繰出し
合 計	27,290,561	27,290,561	0	

(3) 残高

(単位:円)

収入 - 支出	326,716,130	327,941,130	-1,225,000	
---------	-------------	-------------	------------	--

2 一般会計決算

(1) 収入

(単位:円)

款 項 目	(A) 平成20年度予算額	(B) 平成20年度決算額	(A) - (B) 増減	備 考
前年度繰越金	6,035,439	6,035,439	0	
入会金	4,715,000	4,805,000	-90,000	納付者961名
年会費	1,290,000	1,059,500	230,500	〃 704名
10年前納会費	0	15,000	-15,000	〃 1名
利子	1,540,000	1,601,343	-61,343	国債・定期・普通
基本金より繰入	15,155,561	15,155,561	0	
その他(雑収入)	364,000	300,331	63,669	国債購入剰余金・広告料
合 計	29,100,000	28,972,174	127,826	

(2) 支出

(単位:円)

款 項 目	(A) 平成20年度予算額	(B) 平成20年度決算額	(A) - (B) 増減	備 考	
事業費	17,190,000	17,228,257	-38,257		
内 訳	会員名簿管理費	3,150,000	2,828,736	321,264	人件費の節約、動静調査の安価契約
	会報発行費	5,950,000	6,034,746	-84,746	寄稿文等の掲載記事増加のため
	HP管理作成費	270,000	435,505	-165,505	新規掲載事項増加のため
	部会・支部活動費	3,570,000	3,481,985	88,015	7部会・5支部未申請
	新入正会員歓迎費	1,000,000	864,630	135,370	安価契約
	母校援助費	2,900,000	3,445,000	-545,000	申請件数が大幅に増加
	分収林管理費	50,000	0	50,000	管理費等の支出がなかった
資料整備費	300,000	137,655	162,345	予定していた原簿カードを作成しなかった	
会議費	1,990,000	1,946,306	43,694		
内 訳	総会会議費	1,820,000	1,811,525	8,475	
	副会長懇談会	60,000	60,097	-97	
	常務理事会議費	110,000	74,684	35,316	
事務費	8,770,000	7,146,788	1,623,212		
内 訳	雑給	3,860,000	3,732,772	127,228	人件費の節約
	備品費	100,000	0	100,000	物品購入をしなかった
	消耗品費	900,000	770,871	129,129	節約
	通信費	900,000	791,655	108,345	〃
	旅費	2,200,000	1,134,300	1,065,700	常務理事の支部等への派遣が予定より少なかった
	事務用品印刷費	230,000	86,310	143,690	節約
	慶弔費	80,000	76,955	3,045	
	光熱水費	100,000	109,371	-9,371	
	雑費	200,000	188,139	11,861	
	その他	200,000	256,415	-56,415	賛助会費の返付が予定より多かった
職員厚生積立金	200,000	200,000	0		
予備費	950,000	0	950,000		
支出合計	29,100,000	26,521,351	2,578,649		

3 特別会計決算

(1) 収入

(単位:円)

款 項 目	(A) 会員名簿発行資金	(B) 職員厚生資金	(C) 50周年記念事業資金	(A)+(B)+(C) 合 計
前年度繰越金	9,721,764	221,395	0	9,943,159
繰入金	5,000,000	200,000	7,135,000	12,335,000
利息	9,960	456	10,627	21,043
合 計	14,731,724	421,851	7,145,627	22,299,202

(2) 支出

(単位:円)

款 項 目	(A) 会員名簿発行資金	(B) 職員厚生資金	(C) 50周年記念事業資金	(A)+(B)+(C) 合 計
支出合計	61,196	70,900	1,553,002	1,685,098

(3) 残高

(単位:円)

款 項 目	(A) 会員名簿発行資金	(B) 職員厚生資金	(C) 50周年記念事業資金	(A)+(B)+(C) 合 計
収入 - 支出	14,670,528	350,951	5,592,625	20,614,104



〔別記3〕

平成21年度事業計画

1 第46回通常総会・理事会の開催

平成21年5月30日(土)、小金井キャンパスにて第46回通常総会・理事会を開催する。議事内容は、1)平成20年度事業報告(案)、収支決算報告(案)、監査報告、2)平成21年度事業計画(案)、予算(案)、3)平成21~22年度会長・副会長の選任(案)、新会長による挨拶、4)特別会員の推薦(案)、5)同窓会創立50周年記念事業の募金活動、6)同窓会50年史の発行の進捗状況及び原稿依頼、7)「農工通信80号」の発行時期の変更(案)、8)同窓会室に通じる木道改修計画(案)、9)その他を予定する。

2 同窓会組織の強化、活性化および財務体質の健全化

部会・支部・職域組織の活動を更に強化して支援する。同窓会創立50周年記念事業募金活動のため各組織との連携を強める必要がある。そのため昨年度に引き続き常務理事の積極的な派遣を行う。平成19~20年度に引き続き、入会金、賛助会費等の大幅な収入増を図るための対策を推進する。また、本年はペイオフ対策として始めた国債購入計画最終年となる。しかし、ペイオフ対策の充実と利息の増収を計って、国債の追加購入と普通預金の定期預金への切替えを計画している。

3 同窓会創立50周年記念事業の募金活動

平成20年度第45回通常総会において承認され、募金活動(2ヶ年計画)がスタートした。しかし、平成21年4月末日現在で最低目標額(80,000千円)の24%の募金額に止っている。そのため、第2回同窓会創立50周年記念事業会及び第46回通常総会において部会・支部に対して再度の協力の要請を行う。

4 同窓会50年史の発行の進捗状況及び原稿依頼

平成21年度第46回通常総会において、同窓会50年史発行の進捗状況の説明及び各部長・各支部長宛に各部会・各支部の「創立の経緯、活動の記録等」について原稿の執筆依頼を行う。

5 「農工通信80号」の発行時期の変更

例年「農工通信」は8月下旬に発行し各会員宛に発送しているが、募金目標額の達成率を向上させるために、振込用紙等を「農工通信」に同封して再度の協力要請を行う。よって、発行時期を11月下旬に変更する。

6 同窓会室に通じる木道改修計画

平成15年度に同窓会室と同時に竣工した木道は、腐食が甚だしく通行等に支障をきたしている。そのため、平成21年度の予算に計上し、承認後に簡易舗装道路に改修する。

7 同窓会PR活動の実施

同窓会紹介パンフレット及びHPの更なる充実を図り、PR活動に努める。

8 会員の動静整理の継続実施

農工通信の未着信会員について常時追跡の動静調査を行う。

9 (財)東京農工大学教育研究振興財団への協力

本財団の事務に対する実質的支援を従来どおり継続して行う。

10 母校に対する援助、新入正会員歓迎行事の継続実施

学生の勉学・学生生活に関して、学会発表・コンテスト・コンクール等発表・入賞祝い・優秀卒業論賞等の援助・学園祭・課外活動の援助・同窓会推薦キャリア・アドバイザー支援等の予算を前年度と比べて更に増額して行う。また、卒業・修了証書カバーの贈呈を継続して行う。

11 会員の慶弔

祝電・弔電を打電する。

〔別記4〕

平成21年度収支予算

(平成21年4月1日~22年3月31日)

1 基本金予算

(1) 収入

(単位:円)

款 項 目	(A) 平成21年度予算額	(B) 平成20年度予算額	(A) - (B) 増 減	備 考
前年度繰越金	327,941,130	325,116,691	2,824,439	
終身会費	1,980,000	1,470,000	510,000	前年度実績人数(70名)×0.95=66名相当分、66名×30,000円=1,980,000円
賛助会費	26,760,000	27,420,000	-660,000	前年度実績人数(939名)×0.95=892名相当分、892名×30,000円=26,760,000円
その他	0	0	0	
合 計	356,681,130	354,006,691	2,674,439	



(2) 支出

(単位:円)

特別会計繰出	5,000,000	5,000,000	0	名簿発行積立資金
〃	5,000,000	7,135,000	-2,135,000	創立50周年記念事業50年史発行積立資金
〃	3,000,000	0	3,000,000	木道の舗装道路への改修資金
一般会計通常繰出	13,380,000	13,710,000	-330,000	賛助会費の1/2
一般会計特別繰出分	4,807,677	1,445,561	3,362,116	一般会計支出予算の不足分を繰出す
合 計	31,187,677	27,290,561	3,897,116	

(3) 残高

(単位:円)

収入-支出	325,493,453	326,716,130	-1,222,677	
-------	-------------	-------------	------------	--

2 一般会計予算

(1) 収入

(単位:円)

款 項 目	(A) 平成21年度予算額	(B) 平成20年度予算額	(A) - (B) 増 減	備 考
前年度繰越金	2,450,823	6,035,439	-3,584,616	
入 会 金	4,565,000	4,715,000	-150,000	前年度実績人数(961名)×0.95=913名、913名×5,000円=4,565,000円
年 会 費	1,006,500	1,290,000	-283,500	前年度実績人数(706名)×0.95=671名、671名×1,500円=1,006,500円
利 子	1,720,000	1,540,000	180,000	前年度実績額(1,600,000円)+国債の追加購入(120,000円)=1,720,000円
基本金より繰入	18,187,677	15,155,561	3,032,116	
そ の 他	300,000	364,000	-64,000	農工通信の広告料及び国債購入剰余金を前年度実績額と同額と見込み300,000円を計上する
合 計	28,230,000	29,100,000	-870,000	

(2) 支出

(単位:円)

款 項 目	(A) 平成21年度予算額	(B) 平成20年度予算額	(A) - (B) 増 減	備 考	
事 業 費	16,490,000	17,190,000	-700,000		
内 訳	会員名簿管理費	1,500,000	3,150,000	-1,650,000	名簿データメンテナンス人件費(1,300,000円)+諸雑費(200,000円)=1,500,000円、動静調査は農工通信と同時実施
	会報発行費	6,100,000	5,950,000	150,000	前年度実績額を計上
	HP管理作成費	420,000	270,000	150,000	前年度実績額を計上
	部会・支部活動費	3,570,000	3,570,000	0	前年度予算額を計上
	新入正会員歓迎費	1,000,000	1,000,000	0	前年度予算額を計上
	母校援助費	3,500,000	2,900,000	600,000	前年度実績額を計上
分 取 材 理 費	50,000	50,000	0	前年度予算額を計上	
	資料整備費	350,000	300,000	50,000	入学生関係印刷物(200,000円)+卒業生関係印刷物(50,000円)+原簿カード作成(100,000円)
会 議 費	1,970,000	1,990,000	-20,000		

内 訳	総会会議費	1,820,000	1,820,000	0	前年度予算額を計上
	副会長懇談会	70,000	60,000	10,000	弁当代(40名×1,500円=60,000円)+お茶代等(10,000円)
	常務理事会費	80,000	110,000	-30,000	前年度実績額を計上
事 務 費	8,570,000	8,770,000	-200,000		
雑 給	雑 給	4,390,000	3,860,000	530,000	常勤職員(680,000円)+パート職員(1,300,000円×27名=3,510,000円)+アルバイト料(200,000円)=4,390,000円
	備 品 費	100,000	100,000	0	前年度予算額を計上
	消 耗 品 費	800,000	900,000	-100,000	前年度実績額を計上
	通 信 費	800,000	900,000	-100,000	前年度実績額を計上
	旅 費	1,700,000	2,200,000	-500,000	常務理事の支部等への派遣(1,500,000円)+通常分(200,000円)
	事務用品印刷費	50,000	230,000	-180,000	純粋な事務用印刷費(50,000円)のみを計上して、卒業生関係の印刷物は資料整備費に移動した。
	慶 弔 費	80,000	80,000	0	前年度予算額を計上
	光 熱 水 費	110,000	100,000	10,000	前年度実績額を計上
	雑 費	200,000	200,000	0	前年度予算額を計上
	そ の 他	340,000	200,000	140,000	賛助会費返付(150,000円)+労災・火災保険料(40,000円)+古名簿添付料・サッシ窓清掃料(90,000円)+ネットワーク処理等工事料(60,000円)
職員厚生積立金	200,000	200,000	0	職員人間ドック補助金(100,000円)、退職積立金(100,000円)	
予 備 費	1,000,000	950,000	50,000		
支 出 合 計	28,230,000	29,100,000	-870,000		

3 特別会計予算

(1) 収入

(単位:円)

款 項 目	(A) 会員名簿発行資金	(B) 職員厚生資金	(C) 50周年記念事業資金	(D) 木道改修資金	(A)+(B)+(C)+(D) 合 計
前年度繰越金	14,670,528	350,951	5,592,625	0	20,614,104
繰 入 金	5,000,000	200,000	5,000,000	3,000,000	13,200,000
立替払い返付金	—	—	1,370,982	—	1,370,982
利 息	12,000	500	10,000	0	22,500
合 計	19,682,528	551,451	11,973,607	3,000,000	35,207,586

[別記6]

同窓会創立50周年記念事業 部会別募金集計表

(平成21年4月30日現在)

部会名	月												合計	目標額	達成率
	H20.7	8	9	10	11	12	H21.1	2	3	4					
農学・生物生産学	0	0	1,600,000	355,000	105,000	400,000	60,000	70,000	215,000	295,000	3,100,000	6,400,000	0.48		
蚕糸生物学	0	0	508,000	120,000	120,000	96,500	20,000	20,000	100,000	20,000	1,004,500	4,160,000	0.24		
植防・応用生物学	0	0	150,000	30,000	55,000	40,000	10,000	20,000	30,000	0	335,000	2,720,000	0.12		
農芸化学・応用生命化学	10,000	10,000	750,000	280,000	235,000	235,000	100,000	70,000	270,000	122,000	2,082,000	4,320,000	0.48		
林産・生物資源工学	0	0	125,000	25,000	40,000	75,000	0	20,000	10,000	40,000	335,000	2,960,000	0.11		
環境科学	0	0	65,000	190,000	10,000	25,000	25,000	0	22,205	10,000	347,205	3,040,000	0.11		
林学	0	0	813,000	180,000	75,000	235,000	40,000	75,000	170,000	235,000	1,823,000	3,760,000	0.48		
生産環境工学	0	0	505,000	165,000	20,000	75,000	45,000	0	70,000	20,000	900,000	2,640,000	0.34		
地域生態システム学	0	0	20,000	0	0	0	0	0	6,500	0	26,500	1,520,000	0.02		
獣医学	0	10,000	1,970,000	360,000	185,000	183,000	10,000	70,000	150,000	60,000	2,998,000	4,240,000	0.71		
製糸・高分子・生命工学	0	0	575,000	80,000	170,000	105,000	20,000	20,000	105,000	5,000	1,080,000	5,520,000	0.20		
繊維・有機材料	0	0	345,000	115,000	0	25,000	190,000	50,000	40,000	70,000	835,000	4,480,000	0.19		
化学工学	0	0	245,000	70,000	60,000	135,000	10,000	210,000	50,000	25,000	805,000	3,680,000	0.22		
応用分子化学	0	0	435,000	145,000	30,000	70,000	10,000	5,000	130,000	80,000	905,000	6,320,000	0.14		
機械システム工学	0	0	405,000	175,000	110,000	225,000	30,000	20,000	55,000	0	1,020,000	9,360,000	0.11		
電気電子工学	0	0	345,000	160,000	60,000	70,000	10,000	10,000	40,000	10,000	705,000	7,760,000	0.09		
応用物理学	0	0	55,000	25,000	55,000	30,000	0	5,000	20,000	30,000	220,000	3,440,000	0.06		
情報工学	0	0	60,000	35,000	10,000	0	10,000	10,000	30,000	0	155,000	3,120,000	0.05		
製糸部会女子部	0	0	40,000	30,000	0	20,000	10,000	0	10,000	0	110,000	480,000	0.23		
MOT	0	0	0	0	60,000	0	0	0	0	0	60,000	80,000	0.75		
BASE	0	0	0	10,000	0	0	0	0	10,000	0	20,000				
その他	0	0	20,000	100,000	30,000	0	30,000	100,000	60,000	55,000	395,000				
合 計	10,000	20,000	9,031,000	2,650,000	1,430,000	2,044,500	630,000	775,000	1,593,705	1,077,000	19,261,205	80,000,000	0.24		

(2) 支出

(単位:円)

款 項 目	(A) 会員名簿発行資金	(B) 職員厚生資金	(C) 50周年記念事業資金	(D) 木道改修資金	(A)+(B)+(C)+(D) 合 計
支 出 合 計	300,000	100,000	500,000	3,000,000	3,900,000

(3) 残高

(単位:円)

款 項 目	(A) 会員名簿発行資金	(B) 職員厚生資金	(C) 50周年記念事業資金	(D) 木道改修資金	(A)+(B)+(C)+(D) 合 計
収入一支出	19,382,528	451,451	11,473,607	0	31,307,586

[別記5]

同窓会会長及び副会長

(平成21・22年度)

役職名	氏 名	卒年度	推薦母体
会 長	藤森 明彦	工化42	常 務 理 事 会
副会長	藤巻 宏	農 36	農 学 ・ 生 物 生 産 学 部 会
〃	草野 洋一	養蚕47	蚕 糸 生 物 学 部 会
〃	安藤 哲	植防47	植 防 ・ 応 用 生 物 学 部 会
〃	竹内 道雄	農化院50	農 芸 化 学 ・ 応 用 生 命 化 学 部 会
〃	佐渡 篤	林産38	林 産 ・ 生 物 資 源 工 学 部 会
〃	星野 義延	環保53	環 境 科 学 部 会
〃	松井 英輔	林 38	林 学 部 会
〃	田内 堯	農工35	生 産 環 境 工 学 部 会
〃	本間 秀和	地生H12	地 域 生 態 シ ス テ ム 学 部 会
〃	田谷 一善	獣医46	獣 医 学 部 会
〃	西出 照雄	製糸41	製 糸 ・ 高 分 子 ・ 生 命 工 学 部 会
〃	壁矢 久良	織工35	織 維 ・ 有 機 材 料 部 会
〃	町山 紀郎	工化39	化 学 工 学 部 会
〃	遠藤 幸一	工化46	応 用 分 子 化 学 部 会
〃	尾崎 幸信	機械52	機 械 シ ス テ ム 工 学 部 会
〃	宇野 亨	電気55	電 気 電 子 工 学 部 会
〃	大野 直次	応物47	応 用 物 理 学 部 会
〃	大島 浩太	電情H13	情 報 工 学 部 会
〃	渡邊 俊夫	獣医49	M O T 部 会
〃	齋藤 隆	生シ院H11	B A S E 部 会

同窓会創立50周年記念事業

部会別募金者数集計表

(平成21年4月30日現在)

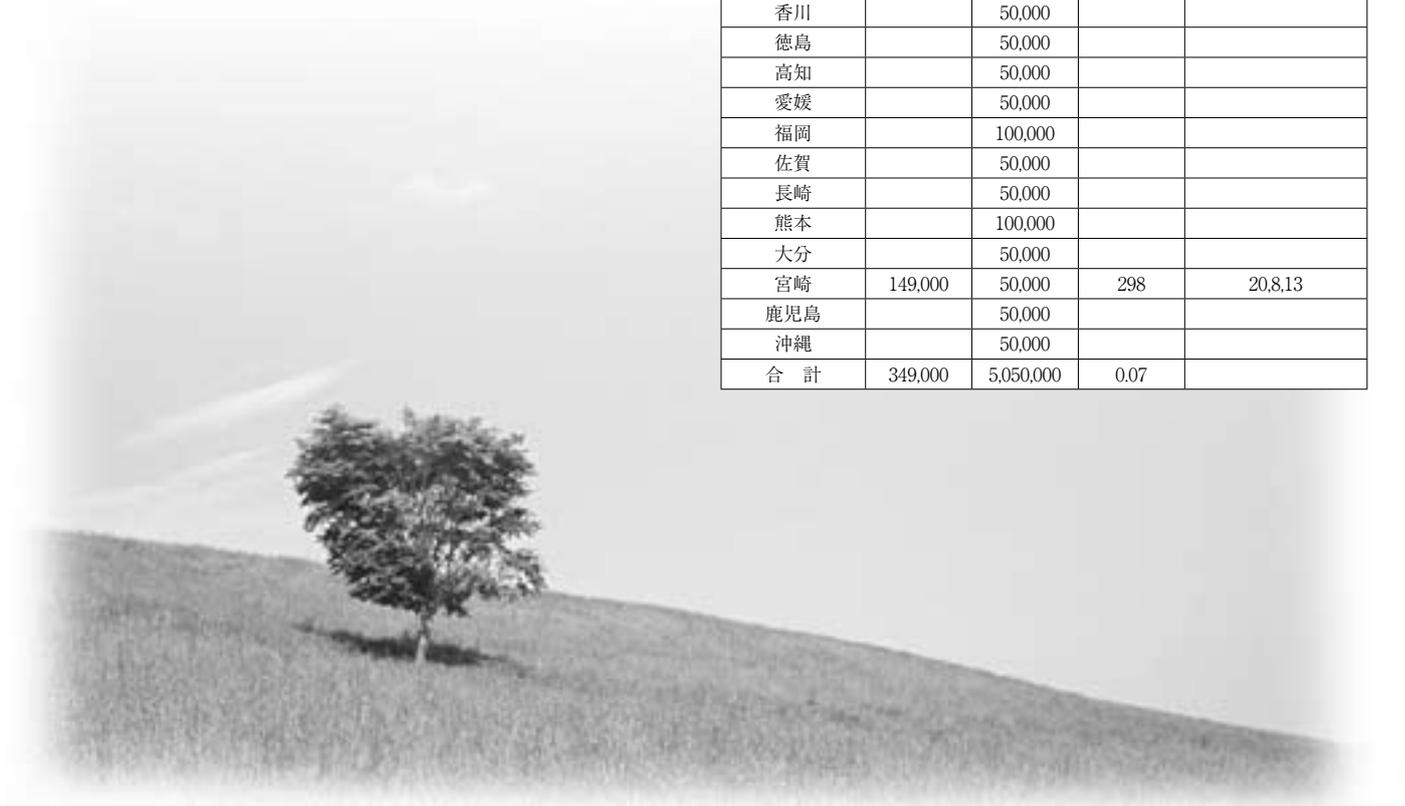
部会名	月				H21.1				合計		
	H20.7	8	9	10	11	12	2	3		4	
農学・生物生産学	0	0	101	20	11	20	6	3	13	17	191
蚕糸生物学	0	0	49	11	12	9	3	2	9	2	97
植防・応用生物学	0	0	14	3	4	4	1	2	1	0	29
農芸化学・応用生命化学	1	1	54	22	11	15	6	5	12	7	134
林産・生物資源工学	0	0	12	4	4	6	0	2	1	4	33
環境科学	0	0	6	6	1	3	3	0	2	1	22
林学	0	0	74	20	7	11	4	4	11	9	140
生産環境工学	0	0	40	16	3	7	4	0	5	1	76
地域生態システム学	0	0	4	0	0	0	0	0	2	0	6
獣医学	0	1	83	22	9	12	1	3	6	2	139
製糸・高分子・生命工学	0	0	44	9	11	12	2	2	8	1	89
繊維・有機材料	0	0	37	7	0	3	4	3	4	3	61
化学工学	0	0	17	4	3	5	1	5	1	2	38
応用分子化学	0	0	36	10	3	7	1	1	12	8	78
機械システム工学	0	0	33	15	2	8	3	2	5	0	68
電気電子工学	0	0	31	12	4	8	1	1	2	1	60
応用物理学	0	0	6	3	5	2	0	1	1	1	19
情報工学	0	0	5	4	1	0	1	1	3	0	15
製糸部会女子部	0	0	2	1	0	2	1	0	1	0	7
MOT	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	2
BASE	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	2
その他	0	0	1	1	1	0	2	1	2	4	12
合計	1	2	649	191	94	134	44	38	102	63	1,318

同窓会創立50周年記念事業

支部別募金集計表

(平成21年4月30日現在)

支部名	募金額	目標額	達成率	備考(振込日等)
北海道	100,000	150,000	0.67	21.2.25
青森		50,000		
秋田		50,000		
岩手		50,000		
山形		50,000		
宮城		100,000		
福島		150,000		
茨城		200,000		
栃木	100,000	200,000	0.5	21.2.13
群馬		200,000		
埼玉		200,000		
千葉		200,000		
東京		250,000		
神奈川		200,000		
新潟		100,000		
富山		100,000		
石川		50,000		
福井		50,000		
山梨		150,000		
長野		200,000		
岐阜		100,000		
静岡		200,000		
愛知		200,000		
三重		100,000		
大阪		200,000		
京都		100,000		
滋賀		50,000		
奈良		50,000		
和歌山		50,000		
兵庫		200,000		
岡山		100,000		
広島		100,000		
山口		50,000		
鳥取		100,000		21.5月末までに100,000振込予定
島根		50,000		
香川		50,000		
徳島		50,000		
高知		50,000		
愛媛		50,000		
福岡		100,000		
佐賀		50,000		
長崎		50,000		
熊本		100,000		
大分		50,000		
宮崎	149,000	50,000	298	20.8.13
鹿児島		50,000		
沖縄		50,000		
合計	349,000	5,050,000	0.07	





同窓会創立50周年記念事業の 募金活動推進のお願い 及び部会別寄附者一覧

拝啓 時下益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

東京農工大学創基140年・同窓会創立50周年合同記念事業も発足してから1年が経過いたしました。この間に募金に協力していただいた会員の皆様には厚くお礼申し上げますとともに、ご芳名を掲載させていただきます。

さて、平成21年5月の同窓会通常総会においてご報告申し上げましたとおり、募金の集計状況は最低目標額の20%台と低い水準にあり、目標額の達成には程遠い状況にあります。

諸般厳しい時期ではございますが、一人でも多くの会員の皆様からのご寄附を願っております。今後とも募金活動の推進にご支援いただきますようよろしくお願い申し上げます。

部会別寄附者一覧

- 1、平成21年6月末現在。
- 2、掲載順は50音順。
- 3、() は非掲載希望者を内数で示す。
- 4、詳細は同窓会HPをご参照ください。
(<http://tuat-dousoukai.jp.org/>)
- 5、敬称略。

農学・生物生産学部会 195名(9名)

青木 誠
浅井 雅美
浅野 一郎
芦川孝三郎
阿部宇一郎
天野 昭一
荒井 榮造
新井 孝
荒田 久
飯田 一良
池田 他人
石川 昇
石倉 皓哉
板橋 久雄
稻葉 友則
井上 隆
井上 誠司
今井 達郎
今市 忠志
岩崎 徹
岩本 隼人
上井 和彦
植原 貞範
臼井 千秋
宇田 太郎
内田 成信
榎戸 彩子
遠藤 和海
大川泰一郎
大澤 良
大島 隆治
太田 勝彦
太田 舜三
大伴 秀郎

大野 智史・あゆみ

大橋 統州
小川 忠司
小野 敏忠
小原 嘉明
甲斐 志郎
景山登喜雄
加地 昇
柏崎 清作
柏俣 和夫
粕川 成一
門屋 一臣
釜江 正巳
鎌田 徳
神谷 充
加茂 正三
川島 長治
菊地 茂
菊地 正己
北野 誠
木下 隆雄
栗原 幸一
栗原美智子
黒田 栄喜
小泉 豊
越田 丞治
小島 喜三
小杉 正
斎藤 一治
佐久間成浩
佐藤 暁子
佐藤 栄一
下 弘明
渋谷 成美
志村 勲
下田 博之
下間 博明

白城 克己
菅澤 彦一
杉田 孝雄
菅生 義雄
鈴木慎二郎
鈴木 隆
鈴木 秀人
鈴木 秀行
須田峻一郎
須田 廣勝
関塚 昭明
善林 六朗
傍島 英雄
高橋 正士
高橋 啓暢
高橋 衛
高畑 滋
高間 英俊
多川 閃
田川 英久
瀧川 佳秀
竹下 悦男
武富 功
田崎 崇代
田嶋 統樹
多治見一行
田中 一夫
谷 信輝
谷口 理潮
田部 英一
玉井 浩
樽見 眞治
千年 英吾
塚田 浩徳
寺西 雅弘
樋田 英一
戸井田 豊

当津 隆
堂本 晶子
土志田武彦
栩野 裕久
富田 改
長岡 由生
中崎長三郎
仲澤 泰
中田 猛
中坪 弘一
中村 幸夫
西尾 呂次
西崎 敏
西嶋 宏文
西田 和彦
野地 喜徳
野田 太
橋渡 良知
長谷川祐一
畑中 孝晴
馬場 仁
原 英二
原 忠雄
原田 勉
東山 春紀
日高 睦朗
平野 正史
深田健一郎
福本 久雄
藤本 重喜
藤卷 宏
藤村 勲
藤村 忠彦
布施 正久
淵野雄二郎

細野 久雄
堀越 英雄
牧 輝彦
増田 国八
増田 博幸
松岡 義浩
松島勝之助
松丸 勝二
松村 昭治
松村 仁栄
満重 勝信
水野銑一郎
道玄 哲康
美濃又哲男
宮下 顕智
宮田 紀夫
向山万里子
武藤軍一郎
村上 司郎
廻谷 義治
望月 正巳
森 午夫
森蘭幸二郎
森山 真久
諸川 勝徳
矢藤 貞雄
山内 恒男
山崎 眞一
山本 誠
横田 茂永
横林 和徳
横山 嶽
吉岡 親一
吉田 富雄
吉野正太郎
鷲尾 義人
和田 喜造

渡辺 敏雅
渡辺 實
藁谷 宏
藁科 雅夫

畜系生物学部会 104名(4名)

青木 義篤
赤木 昭治
阿久津浄巳
浅川 秀哉
阿部 将
有賀 孝
飯島 忠彦
石井 了
石川 達郎
石塚 貞夫
市川 保
糸井 博則
井上 広治
井上善治郎
猪口 正三
宇都宮 昇
海野 保
遠藤 富夫
大河原清一
大澤 慶幸
大槻 昭
大槻 誠
丘野 亨
小沢 民治
越智 照久
小野 秀記
加々美憲雄
角和善三郎

柏川 孝
金子 五郎
金田 惠喜
苅込 穰
河村 尚徳
川本 洋
久保田耕司
黒田 秋
小池 晃
小武山弘之
小林 千秀
小林 達雄
小林 行塚
後久 達雄
斎藤 貞治
齋藤 慶喜
齋藤 是
佐野 光徳
塩崎 正臣
篠原 隆美
島田 俊弘
新保 博
杉浦 秀穂
杉田 英夫
杉山 一成
鈴木 育良
関口 政雄
曾根 正澄
高野 稔
田口 俊孝
武井 輝雄
竹内 典子
竹原 重尾
田嶋 定雄
月田 嘉辰
筒井 厚
勅使河原司郎

農芸化学・応用生命化学部会
139名(6名)

47期会
(久米賢次他16名)

- 東 雅幸
- 天野 洋司
- 荒木 惠美子
- 池田 博一
- 石井 泰博
- 石阪 英男
- 石田 精一
- 石山 なおり
- 一蝶 彬
- 伊藤 功
- 伊藤 和子
- 伊藤 泰夫
- 猪貝 豊一
- 牛山 浩一
- 薄田 亘
- 内田 欣哉
- 尾井 良男
- 大賀 溪生
- 太田 徳也
- 太田 雅文
- 大谷 忠夫
- 大谷 東洋
- 大野 邦彦
- 岡崎 龍介
- 小笠原 敏行
- 萩野 雅人・知美
- 小高 要
- 加藤 孝
- 加藤 元也
- 金井 直子
- 亀川 義示
- 川岸 利征
- 河内 弘宜
- 河野 浩之
- 衣山 陽三
- 木下 劫三
- 久保田 肇
- 久米 賢次
- 黒田 勝士
- 郡司 昌彦
- 後藤 宗玄
- 坂内 敬
- 坂田 秀俊
- 坂野 雅敏
- 塚口 好幸
- 櫻井 邦雄
- 佐藤 巖
- 佐藤 匡
- 佐藤 敬子
- 佐野 佳之
- 沢野 勉
- 渋市 郁雄
- 清水 克己
- 白井 邦郎
- 白城 聡
- 杉山 敦男
- 鈴木 清
- 鈴木 敏明
- 鈴木 保之
- 須藤 政彦
- 関 登世彦
- 泉水 昇
- 高橋 幸資

- 高橋 健生
- 米寿 祝一同
- 竹内 鐸也
- 竹野 恒之
- 多田 全宏
- 立花 忠治
- 田中 治夫
- 田中 宏治
- 田中 宏征
- 谷口 準
- 團野 眞紀
- 千葉 郷子
- 手嶋 久
- 寺本 賢一郎
- 友岡 元
- 豊田 仁
- 永井 昌史
- 長尾 英二
- 中村 典郎
- 中村 秀子
- 仲谷 虎之助
- 鍋島 由可子
- 西納 啓吾
- 西久 保美彰
- 西田 博嗣
- 西村 弘行
- 能勢 昭英
- 野田 功
- 廿日岩 朔朗
- 服部 次男
- 羽石 達生
- 林 勇男
- 林 久純
- 原田 和夫
- 日鼻 宏一
- 平野 正
- 藤木 俊子
- 船引 龍平
- 堀 暢子
- 堀川 弘海
- 増田 光輝
- 松島 康之
- 松本 光人
- 丸重 靖三
- 丸山 晴
- 三上 泰夫
- 水谷 宣史
- 水野 正浩
- 水野 文人
- 皆川 哲
- 宮城 稔
- 村椿 定男
- 茂田 井 宏
- 本松 成和
- 安井 一
- 柳本 知子
- 矢藤 梅夫
- 山岸 裕司
- 山口 宗男
- 大和 公人
- 山分 信
- 山田 悦司
- 吉木 健
- 吉澤 康弘
- 吉田 文男
- 若月 靖俊
- 和田 敬三
- 和田 義明

林産・生物資源工学部会
38名(1名)

- 石井 忠
- 石井 宏
- 石原 俊夫
- 稲葉 政満
- 今井 勘二
- 上坂 修一
- 大浦 進
- 岡部 敏弘
- 小澤 勇生
- 小浜 晃一
- 笠井 良雄
- 川嶋 直久
- 川邊 陽子
- 空閑 博久
- 熊谷 浩次
- 栗原 三郎
- 栗原 努
- 劍持 潔
- 佐々木 剛
- 白渡 篤
- 白井 光雄
- 杉本 健一
- 鈴木 勝利
- 鈴木 正宏
- 高柳 寛司
- 谷内 博規
- 谷端 省三
- 藤間 勝也
- 奈良 謙司
- 野崎 雄行
- 葉石 猛夫
- 林 英一
- 前田 辰雄
- 村田 光司
- 吉武 彰文
- 渡辺 しのぶ
- 渡辺 昭三

環境科学部会
22名(4名)

7期生中心クラス会
(代表 大谷 勝己)

- 石井 梨香
- 井上 仁
- 岡本 竜太
- 小野崎 研郎
- 菅野 昭
- 小林 信春
- 米谷 和晃
- 三枝 俊哉
- 斎藤 香織
- 佐藤 公織
- 塩見 裕亮
- 菅原 淳
- 鈴木 寛之
- 竹山 春子
- 多羅尾 光徳
- 角田 弘之

林学部会
158名(6名)

- 相澤 孝夫
- 相場 芳憲
- 青木 邦政
- 赤坂 猛
- 阿部 哲朗
- 天野 典英
- 飯田 千徳
- 石井 正一
- 石井 晴雄・恵利子
- 石門 純治
- 磯貝 平八
- 市川 平治
- 伊藤 俊輔
- 伊藤 道男
- 稲岡 豊
- 井上 富雄
- 岩崎 克己
- 牛山 元雄
- 内田 稔
- 浦田 恒彦
- 遠藤 裕紀
- 大崎 智文
- 大島 和久
- 大平 克彦
- 岡 正
- 岡田 幸助
- 岡部 廣二
- 小口 聡
- 小沢 修
- 小澤 幸四郎
- 小野塚 利雄
- 小野寺 秋男
- 小原 繁男
- 春日 一雄
- 片岡 辰幸
- 加藤 公朗
- 金箱 利夫
- 木川 明
- 岸 一衛
- 北村 禎造
- 木村 英佳
- 工藤 高裕
- 栗田 貞治
- 栗原 正朗
- 栗原 勝彦
- 栗山 俊雄
- 暮石 裕
- 河野 桃一
- 小池 泰正
- 小嶋 和彦
- 小林 彰
- 小林 茂範
- 小林 政広
- 小松 恭雄
- 小柳 信宏
- 小柳 好弘
- 酒井 淳行
- 坂内 富男
- 笹邊 巖
- 佐藤 重孝
- 塩崎 實
- 四方 徹

- 志村 聖一
- 篠原 元司
- 篠原 育四郎
- 篠原 康之
- 白石 進
- 新藤 謙一
- 杉山 俊宏
- 鈴木 清
- 鈴木 輝征
- 鈴木 宏
- 高崎 康隆
- 高田 秀穂
- 高田 宏臣
- 高梨 和行
- 高西 次男
- 高橋 是清
- 宝方 亨伴
- 竹腰 正保
- 立川 史郎
- 田中 元
- 田中 明
- 田中 師雄
- 田中 征人
- 田中 尚夫
- 田原 義之
- 玉川 佐久良
- 田村 毅
- 田村 淳
- 千原 賢次
- 塚原 道夫
- 土屋 公作
- 寺嶋 嘉春
- 土井 功
- 戸田 浩人
- 中川 健三郎
- 中田 勝司
- 中西 賢
- 長久 安佳音
- 中洞 好博
- 中村 一夫
- 中村 圭一
- 中村 浩之
- 中矢 弘明
- 西原 明
- 西村 興司
- 野上 寛五郎
- 能勢 秀樹
- 野中 亮
- 野原 喜久雄
- 橋本 章
- 畠山 晃
- 秦野 武雄
- 馬場 繁幸
- 馬場 信行
- 林 和則
- 林 健二
- 原 興吉
- 半田 孝俊
- 平山 仁
- 深山 英成
- 藤本 吉幸
- 藤崎 謙次郎
- 藤元 良一
- 古畑 巧
- 堀内 周二
- 真柴 孝司
- 松井 英輔
- 松井 琢郎

- 松岡 稔
- 峰松 浩彦
- 宮岡 文雄
- 宮田 博
- 本宮 大江
- 本山 芳裕
- 森部 紀晴
- 矢崎 潤一
- 安井 隆彌
- 安田 祥
- 柳澤 義孝
- 矢作 一雄
- 山口 健史
- 山口 正三
- 山崎 浩
- 山本 敏夫
- 山本 湧蔵
- 弓野 敬
- 湯本 敏夫
- 米山 俊博
- 若本 健輔
- 渡邊 直人

生産環境工学部会
79名(6名)

- 青木 健
- 浅野 正充
- 天野 常雄
- 安養寺 久男
- 伊藤 信二
- 上野 徳也
- 内野 隆康
- 宇野 沢正美
- 梅田 武
- 大亀 哲郎
- 仰木 文男
- 大久保 允文
- 大槻 繁
- 大坪 義昭
- 小野 沢一夫
- 風間 政美
- 柏倉 義幸
- 勝俣 昇
- 川合 亨
- 冠 秀昭
- 北川 康一
- 北爪 弥平
- 北原 敬悟
- 衣山 元雄
- 日下 康彦
- 久保 七郎
- 久保田 昭彦
- 齋藤 道雄
- 坂上 成永
- 佐久間 利夫
- 柴原 壽一
- 菅原 直一
- 田内 堯
- 高橋 貞三
- 田口 正文
- 武井 厚治
- 竹本 政弘
- 中尾 清治
- 中川 三男
- 中里 徹哉
- 中村 滋

- 中井 行雄
- 奈須 尚武
- 名取 五郎
- 西村 浩
- 二宮 星
- 橋本 康
- 橋本 竜寿
- 畑島 剛
- 久松 敏郎
- 平松 清志
- 藤代 久郎
- 古性 和典
- 古谷 司
- 逸見 玄吾
- 細梅 満
- 眞浦 正徳
- 前田 文男
- 増井 伸一
- 増田 弘
- 松久 房義
- 丸山 菁
- 丸山 学
- 光恒 洋道
- 村松 秋清
- 茂木 廣次
- 森山 久二
- 柳沼 泰衛
- 矢口 宣明
- 矢野 義治
- 矢作 敏郎
- 山下 健市
- 山田 実
- 山本 方文
- 吉井 信夫
- 吉野 治男

植防・応用生物学部会
29名(4名)

- 五十嵐 丕
- 伊藤 元
- 大熊 暁美
- 大嶋 博之
- 川本 章
- 岸本 道明
- 瀧戸 裕一
- 田中 賢二
- 田中 良典
- 塚口 英二
- 土屋 直之
- 中澤 健雄
- 西村 美彦
- 野々下 和義
- 濱川 陽
- 林 敦子
- 原 登志
- 福澤 徳穂
- 古屋 敷桂資
- 松井 正信
- 毛利 岳人
- 山口 国夫
- 山口 由木
- 鷺見 義則
- 和田 早苗

中村 弘
成田総一郎
西 元孝
西山 伸茂
野村 昌志
萩原 泰朗
長谷川五郎
長谷川正勝
畑井 良典
服部 武弘
濱田 清人
早坂 和夫
速水 洋志
原田 静男
日浦 克彦
日置健治郎
平野 孝志
藤井 裕三
藤枝 洋
藤木 信秀
本田恭二郎
松浦 三喜
松田 誠祐
松村康二郎
宮本 訓正
官野 盛雄
官原 数雄
向後 雄二
盛山 桂一
柳澤 秀夫
山木 益
渡辺 正文

内山健太郎
圓藤 陽子
及川 洋司
太田 孝
大塚 米次
大橋 泰弘
小川 諄
小川 益男
小澤 浩
貝塚 一郎
春日井達造
片岡 弘毅
金窪 悠
兼松 伸枝
荻田 愉美
河村 隆
管 慶一郎
神田 尚俊
菊池 正夫
木村 一雄
吉良 幹男
久野 幸三
慶留間智厚
小杉 光雄
小寺 主司
小林 茂雄
小林 則勝
五明 峻
西郷 宏治
斎藤 利雄
酒井 道子
酒井 讓
佐々木毅夫
笹崎 龍雄
佐藤多津雄
澤野照之助
清水 敬一
清水 実嗣
清水多佳子
小久江栄一
鈴木 一哉
鈴木 嘉尚
関 令二
関 正太郎
関 稔
曾我 昭新
大門 重信
高岡 寛
高橋喜久男
高橋 正
高松 勝憲
田川 雅代
瀧上 周
竹内 邦夫
立花 史朗
立石 洋見
田中 巖
田附 寿一
田谷 一善
富樫 久
鳥飼 孝二
新藤 照章
永井 仁
中井 千恵
中阪 昌敬
長澤 洋二
中島 巖
中島 英男

中野 秀治
長野 武彦
永松 直義
中村 幸男
西貝 正彦
西松 静三
野口 純子
橋田 勝明
早川 研一
原 亜知
原子 重男
日下 晴雄
廣井みどり
星 欽彌
前田 稔
増田 隆
真瀬 昌司
松井 光蘭
松浦 健二
松澤 武
松永 正彦
松永 佳昭
松本 幸雄
真山真由美
水口 衛
三森 都子
三森 信行
村松梅太郎
室作 昭
名須川 厚
森田 晴夫
森谷 哲夫
八重樫弘信
八木 恒文
柳田 晴美
山家 又祐
山岸建太郎
山口 聡子
山口 成夫
山崎 輝清
山下 千恵
山田 實
山中 良
吉田 和雄
吉田 讓
依田 明
米平 勉
米倉 久雄
若狭 芳男
和田 聡志
渡辺 元
渡部昭一郎

製糸・高分子・生命工学会
90名 (9名)

饗場 正隆
青木 利吉
足立 憲一
阿部 和弘
新垣 篤史
石野 卓由
石原啓四郎
伊藤 暢
伊藤 澄夫
今井 仁
今井 史郎

岩波 勝
岩間 丈男
植村 公夫
内田 勝彦
瓜田 章二
瓜生 虔二
奥山 善英
小澤 政彦
小濱精八郎
笠川 昇
勝野 盛夫
金木 久喜夫
北村 愛夫
江東 新
小嶋 桂吾
児玉 満男
後藤 文次
小林 玉枝
齊藤 遼
佐々木隆之・智子

吉井 幸三
渡辺 安朗

製糸部会女子部
7名

井川 房代
坂根 政子
那須 静江
野村眞佐子
福永むつい
藤野 トシ
村尾 綾子

繊維・有機材料部会
66名 (4名)

浅沼 寛
浅原 義久
石川 顕次
石沢 弘衛
井芹 純
市村 光由
稲勝 寛
岩島 寛
薄井 洋介
宇野加津美
遠藤 佑治
大越 健介
岡田 邦男
加瀬 俊男
川崎 巖
河村 吾郎
桐谷 久恵
小池 一三
小島 正喜
近藤 秀男
齊藤 一夫
笹木 剛
塩原 弘三
志田 雄造
杉瀬 博司
鈴木 大介
高井 英雄
高木 利之
武井 勇
武田 迪昭
田中 康國
丹下 昇
千田 武
長 榮一
續葛 修一
鶴岡 建二
嶋田 利夫
中井 健一
永池 幸夫
仁保 文雄
野口 武男
橋本 定勝
畑 泰之
伴 菊夫
東 功
深水 智明
古田 陽美
増田 敏男
松尾 彩子

松本 祥和
松本まさみ
美多賀鼻一成
峯岸 俊夫
森田 哲夫
安野 充
矢作 信幸
山崎 正澄
山本 康哲
山本 理
横尾 栄三
横溝 清
吉田 了三

化学工学会
39名 (2名)

池田 誠
伊藤紀一郎
伊藤真一郎
井上 豊
岩田 昇
加藤 之貴
金子 隆
兼松 博史
亀山 秀雄
川口 行一
木村 雅俊
黒羽 輝男
越島 陽子
小平 紀肇
駒形真名美
齊藤 彩
下山 敏昭
須賀 創平
菅原 翔
菅原 将之
鈴木 英俊
手塚 宣之
永井 義久
中川 紳好
中川 泰一
長澤 裕
馬場 大輔
半田 清久
東 若芳
深水 成
町山 紀郎
松岡 正邦
宮本 秀勝
吉田 聡
若月 満
和田 文夫
渡辺 正敏

応用分子化学部会
81名 (5名)

阿部 哲
安藤 一男
飯田 次郎
伊王野耕二
石井 泰司
石毛 和夫
石田 文治
石原 友子

稲葉 尚弘
岩本 秀雄
内本 岩宏
江里口健一
近江 恭夫
大須賀 弘
大竹 陽介
大山 拓正
岡崎 隆
萩原 茲夫
小沢 紀一
小野弥太郎
柏俣 操
勝田 謙次
亀谷 雅哉
北村 一郎
櫛田 靖彦
小林 生男
小松 賢作
小室 一允
小屋原壯三
坂本 光江
佐々木勝臣
貞森 昭宏
重田征三郎
清水 康次
白川 栄治
新館 浩
菅原 靖
杉田 眞幸
高木 誠一
田中 壯
田中 哲夫
田中 利男
谷内 暉
長崎 健
富樫 理恵
戸塚 育甫
殿塚 美子
永野 俊二
中村榮太郎
成瀬 勝夫
野澤 哲男
野島 正一
野村 和弘
林 勝彦
平澤 猛男
平野 正雄
益田 久和
松元和二郎
丸山 昭洋
三重野通啓
村上 尚
齋 秀磨
望月 文信
森 健
安村 皐
柳田 明男
山川 芳男
山田 隆
大和 瑞枝
山西 昇
山本 保
吉田 朗
吉村 敬治
和久田真理子
和田 啓

地域生態システム学部会
7名 (1名)

石井 大樹
石井 崇
石坂 晃美
片岡 史子
高多 康弘
平山加奈子

獣医学部会
145名 (5名)

鮎川 英司
荒川 研二
五十嵐忠良
池田 澄雄
池田 裕一
石井美樹子
石坂 英夫
泉川 大海
市原 晴穂
伊藤 純吉
伊東 良郎
伊奈 達雄
稲葉 穰
稲葉和氣子
伊原三重子
井料 堅治
岩崎 利郎
上家 哲
白井 玲子
内田 節也

機械システム工学会
72名 (1名)

- 青戸 憲一
- 新井 秀雄
- 栗賀 宏介
- 石山 達郎
- 市川 裕之
- 市橋 丈夫
- 井戸 清智
- 稲葉 隆史
- 今井三 千雄
- 今泉 正規
- 今成 昌文
- 上原 敏光
- 宇山 俊之
- 江口 和壽
- 大崎 雅之
- 大島 茂男
- 大谷 幸利
- 大塚 謙一
- 大野 泰弘
- 小笠原 健二
- 岡添 弘
- 岡本 修二
- 柿内 隆夫
- 勝部 能民
- 金平 克之
- 神野 豊
- 木内 徹夫
- 清田 厚治
- 幸地 生好
- 小園 久光
- 近藤 景人
- 佐藤 公平
- 四宮 節三
- 渋木 洋一
- 末木 健之
- 鈴木 宣毅
- 鈴木 昌弘
- 須田 和義
- 高岡 伸明
- 瀧口 佳隆
- 田中 明良
- 田中 好一
- 塚原 輝雄
- 辻 平吾
- 中川 純也
- 中島規 久雄
- 鳴海 順夫
- 南原 慶孝
- 乃村 善正
- 八藤後 四郎
- 原 幸一
- 堀 三計
- 堀江 福男
- 堀之内 将耶
- 本多 円成
- 本間 憲一
- 正木 仁
- 松永 宏
- 丸岡 哲雄
- 宮本 知三
- 武藤 篤生
- 村上 修
- 村上 秀人
- 森 亮洋
- 森田 勇

- 柳下 英明
- 山崎 和也
- 依田 義人
- 和田 光章
- 渡辺 晋也
- 渡部 健一

電気電子工学会
60名 (5名)

- 秋田 正憲
- 浅海 博圭
- 安藤 雅生
- 安澤 恭之
- 井川 健二
- 石ヶ森 久悦
- 稲田 久
- 大井喜 久夫
- 大川 儀郎
- 大窪 肇
- 大塚 淳
- 大西 登
- 小木曾 亨
- 加賀屋 信二
- 金澤 健一
- 木村 宗弘
- 栗原 大輔
- 黒木 裕昭
- 小林 喜一
- 五味 勝
- 笹谷 洋一
- 佐藤 真
- 猿渡 靖博
- 澤田 誠一
- 篠原 信一郎
- 鳥影 久太郎
- 下道 晶久
- 白石 秀雄
- 相山 尚和
- 鈴木 喜之
- 滝澤 恒明
- 竹内 章
- 土屋 知大
- 富田 博
- 長島 健二
- 長谷川 正人
- 羽太 嘉昭
- 馬場 敏
- 平地 康剛
- 福田 玲一
- 古屋 一雄
- 前田 幸一
- 松川 洋
- 松本 聡
- 宮下 晴信
- 宮永 長七
- 向山 篤
- 武川 満
- 村松 康雄
- 茂永 修司
- 毛利 敏
- 本山 基彰
- 初山 真
- 吉田 満
- 渡部 幸一

応用物理学部会
18名

- 荒井 芳文
- 伊東 浩
- 柏村 圭治
- 勝城 啓之
- 桂川 則之
- 桑田 昌之
- 佐伯 尚文
- 佐々木 隆幸
- 佐藤 哲也
- 佐藤 豊
- 庄司 冨美
- 高橋 孝文
- 永田 亨治
- 中村 信一
- 橋本 祐也
- 松浦 宣行
- 松尾 義之
- 水城 俊幸

情報工学会
15名 (1名)

- 安達 政彦
- 五十嵐 道弘
- 伊藤 丈朗
- 香川 新
- 金子 隆宏
- 小林 貞夫
- 鈴木 岳大
- 高木 久
- 高橋 正博
- 武内 茂雄
- 外川 良太郎
- 根本 秀政
- 山口 陽三
- 和田 裕一

MOT部会 3名

- 新井 信昭
- 井口 一世
- 渡邊 俊夫

BASE部会 2名

- 小宮 直城
- 佐藤 隆太

その他15名(4名)

- 木村 園子
- 桑田 大
- 清水 本裕
- 鈴木 健之
- 千賀 裕太郎
- 塚本 良則
- 福永 保介
- 村田 房子
- 山崎美 代造
- 山田 昭一
- 好田 正

支部からの寄附 13支部
(平成21年6月末現在)

- 北海道支部
- 岩手県支部
- 栃木県支部
- 千葉県支部
- 新潟県支部

- 富山県支部
- 岐阜県支部
- 岡山県支部
- 広島県支部

- 鳥取県支部
- 島根県支部
- 熊本県支部
- 宮崎県支部

同窓会支部長及び支部連絡員
(平成21年8月28日現在)

都道府県	支部長名	連絡員名
北海道	西村 弘行 (農化42)	宇野沢 正美 (農工46)
青森	原子 重男 (獣医28)	大橋 統州 (農 54)
秋田	加藤 公朗 (林 30)	舩谷 雅広 (農工61)
岩手	小野寺 秋男 (林 47)	深澤 光 (林 56)
山形	石井 正市 (養蚕44)	近野 広行 (農 63)
宮城	真木 伸治 (養蚕48)	佐藤 大輔 (林H4)
福島	柳沼 泰衛 (蚕 31)	本馬 昌直 (農H2)
茨城	松丸 勝二 (農 37)	鈴木 要至 (製糸56)
栃木	村松梅 太郎 (獣医39)	南木 好樹 (農工58)
群馬	大河原 清一 (養蚕24)	岡野 幸治 (林 62)
埼玉	内田 稔 (林 37)	永井久 美子 (地生H16)
千葉	中村 圭一 (林 39)	豊田 祐輔 (蚕糸H3)
東京	馬場 信行 (林 35)	山本 賢 (農工43)
神奈川	則武 宏一 (農工41)	北見 丘 (環保58)
新潟	中村 幸夫 (農 32)	高橋 紀男 (農工60)
富山	青木 誠 (農 37)	高多 康弘 (地生H12)
石川		武内 昭也 (環保H3)
福井	島田 昭男 (林 38)	新海 隆介 (環・資H12)
山梨	後藤 文次 (製糸30)	依田 健人 (製糸57)
長野	小池 洋男 (農 42)	平林 孝保 (農工61)
岐阜	武野 明義 (織高60)	河村 尚徳 (養蚕42)
静岡	水口 衛 (獣医29)	山本 陽次 (農工H2)
愛知	山川 芳男 (織化26)	水野 銈一郎 (農 42)
三重	吉田 譲 (獣医45)	古野 優 (獣医60)
大阪	暮石 裕 (林 35)	松山 将壮 (林産43)
京都		西村 寿 (農工50)
滋賀	地平 寛治 (農 32)	南井 隆 (林H1)
奈良	武田 博之 (織化38)	武田 博之 (織化38)
和歌山	山本 湧蔵 (林 23)	中村 純子 (環・資H6)
兵庫	橋田 勝明 (獣医46)	安徳 剛志 (林59)
岡山	内藤 照章 (獣医34)	佐々木 真也 (獣医H9)
広島	市村 光由 (織工34)	三宅 信行 (環保55)
山口	赤木 道博 (獣医49)	岡本 賢一 (植防H4)
鳥取	西尾 邑次 (農17・9)	小林 寿 (製糸24)
島根	中尾 清治 (農工34)	松浦 史瑞 (林産H1)
香川	岡崎 進 (獣医38)	河野 幸彦 (林 63)
徳島	岡田 幸助 (林 28)	小杉 純一郎 (林 63)
高知	松田 誠祐 (農工39)	寺峰 孜 (養蚕45)
愛媛	門屋 一臣 (農 33)	金子 隆 (工化40)
福岡	藤木 重喜 (拓殖18)	西田 晴二 (獣医41)
佐賀	貞松 光男 (農 34)	御厨 秀樹 (植防56)
長崎	本多 正二 (製糸32)	片岡 正登 (製糸48)
熊本	足立 憲一 (製糸35)	猿渡 真司 (農工61)
大分	原田 順二 (養蚕44)	岡本 潤 (植防H1)
宮崎	小崎 宏 (農 45)	井上新 三郎 (農工54)
鹿児島		遠矢 栄久 (林産50)
沖縄	宮城 稔 (農化38)	河口 哲也 (応生H6)
横浜会	児玉 満男 (製糸34)	加藤 裕二郎 (製糸44)

叙勲者からの寄稿

桔梗ヶ原の思い出

町田 暢 (農学S17)

私は昭和18年7月長野県に採用され県農試桔梗ヶ原試験地に赴任した。

桔梗ヶ原試験地は昭和12年農林省の畑作振興の施策に伴ない農林省指定のトウモロコシ育種試験と県単の畑作指導所が併設された試験場であって、私はトウモロコシ担当を命ぜられた。

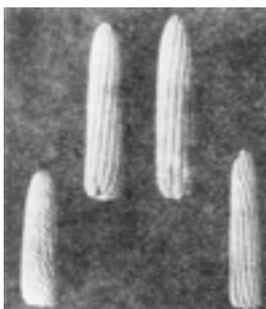
1 一代雑種の育成

初代試験地主任は斯界の権威山崎義人氏で私の赴任当時既に内外から収集したトウモロコシ品種の検討を終り長野1号、全7号などを選抜して普及に移していた。一方トウモロコシは雑種強勢を顕著に発現する作物でアメリカでは早くから一代雑種利用の研究がすすめられていた。主任はこの試験についても十分に準備し、その組合せ数は230にのぼり、4haの圃場を使って実に壮大な規模の試験を着々と展開していた。

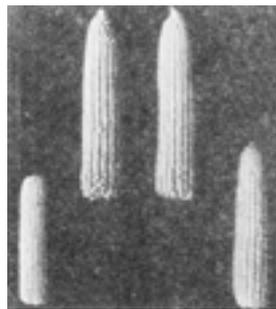
その頃アメリカでは、デント×デント、デント×フリント、フリント×フリントの組合せではデント×デントにすぐれた組合せが多いと云われていた。しかし桔梗ヶ原では国内各地から集めた在来種をこの計画に組み入れていたが、これらの品種は天正の昔ポルトガル人により伝えられたというフリントで長い期間、四国、九州の山間部、あるいは富士山麓などで小規模、隔離同様に栽培されてきたのでその風土に適した独特の特性を見えるに至ったものと考えられる。これとアメリカで分化したデントの間ではかなり遠縁になる結果、雑種強勢が強く発現し優良な一代雑種(以下F₁という)を輩出してきた。

この事実は実に重要な発見であって以後のF₁利用試験の基本方針として長く守られてきたのである。

かくてこれらの中から累年成績で2割増収の長交161号、全202号を奨励品種に採用し、昭和24年よりF₁の採種をすることになった。



第一図 トウモロコシ
長交161号の子実



第二図 トウモロコシ
長交202号の子実

2 採種組織

トウモロコシF₁採種の条件としては…

- 1) トウモロコシは風媒花でその花粉は500mぐらいいまで飛ぶので他品種の花粉が入らぬよう少なくとも400mぐらいいは隔離しなければならない。



第三図 トウモロコシ採取圃の遠望
(周囲が完全に林で隔離されている)

- 2) 種子親の絹糸抽出期と花粉親の雄穂抽出期を合致させなければならない。
- 3) 種子親の雄穂は抽出したら花粉を散らすことなく直ちに抜きとらなければならない。

特にトウモロコシの出穂期は年次変動が2週間以上もあるので花粉親の雄穂抽出期と種子親の絹糸抽出期を合わせることは極めて難しい。手段としては両親の播種期を調節する外はない。

私は当時の浦野主任から両親の播種期の立案を指示された。しかしよるべき資料は何もない。たまたま主要品種については毎年品種保存をしていたので、その記録から検討して原案をつくり、ある日の夕暮主任に提出した。

主任はしばらくの間、原案と調査資料を見くらべていたが、やがて「これしかないだろうなあ……、しかし若し失敗したら……、これだ」と握った拳を腹にあてグイッと横に引き、私の目を見据えて、「その時は君も覚悟しておいてくれ」と言われた。その真剣な表情は今も私の脳裏に焼きついている。私はこの計画に対する主任の生命がけの熱意と決断に心から感動し、その夜のうちに辞表を書いて机の底にしるばせたのであった。その後さらに検討して花粉親の播種期は念に念を入れて2回にした。

第一表 トウモロコシ品種の両親の播種期

品種名	両親品種名	播種期							摘要
		5月5日	15~20	22~25	30	6月5日	10~15	20	
長交161号	♀レイド・アーリー・エロー ♂在来種	●		●					5月22日 ①5月5日、 ②5月20日
長交202号	♀ウイスコンシン690 ♂愛媛大玉蜀黍1号	●		●					5月20日 ①5月5日、 ②5月15日

私は若くしてこうした大事業に参画し、責任をもてたことは、その後の人世にとって何物にも替えがたい貴重な経験であった。

かくて予備試験もなしに試験地のある東筑摩郡と隣りの上伊那郡に1町8ヶ村、長交161号15ha、長交202号20haのF₁採種に一举に突入したのであった。それだけにわれわれ職員も必死であった。採種農家にしても初めてのことで何かと聞いてくる。まさに夜討、朝駆の1年であった。

とくに心配なのは出穂期である。天に祈りながらその時期を迎えるとボツボツ情報が入ってくる。まずは8分通り成功である。しかし出穂は天候により微妙にずれる。ある日の午後種子親の絹糸が異常にのびておかしい。すぐ来てほしいと電話が入った。それと私は古自転車にとびのって急行した。見るとトウモロコシの絹糸は生氣にあふれてのびるが受精するとチリチリに枯れあがる。それが40cmものびて風にゆれている。花粉親を調べると90%は散って最後の枝梗にわずかに残っていた。これを活用する外はないのでがっかりしている農家をはげまし組合長と私の3人で花粉親の稈をできる限り種子親にかたむけてゆさぶることにした。間もなく暮れて月が昇った。月あかりを便りに広い畑を一まわりして終った。一息ついて深夜の1時頃帰路ついたが何やら爽快な気分であった。

また両親を間違えて播いたり、除雄をしているうちに花粉親の除雄をしてしまったり、いろいろ思いがけないミスもあったが、こうしたミスは見逃すことはできないので不合格にせざるを得なかった。このように一喜一憂の1年ではあったが、結果は85%以上の出来で先ずは成功したのである。

かくてその翌年からF₁採種は逐次全国に広まり最盛期には本州、四国九州で464haに達したのであった。

一般の叙勲の榮譽は何を評価されたのか知る由もないが省みればこんなところであろうか。

教師の道を

古澤 實 (製糸S30)

昨年春の叙勲で因らずも瑞宝小綬章を拝受しました。

私は昭和30年の製糸科卒業であるのに、叙勲の対象は全くの畑違いである「教育」であり、農工通信への報告としては不向きかも知れませんが、教師生活の一端を紹介して報告とさせていただきます。

卒業後、農林省蚕糸試験場岡谷製糸試験所に赴任した。新しく開発したカイコの繭質を、製糸工程、および生糸・絹製品の品質という観点から試験することを主な業務とする試験所であった。研究職として採用されたのだが、各分野の実務を一通り体験させてもらった。上司との研究成果を当時製造業現場に導入され始めていた数理統計の手法を使って、蚕糸学会で

2回発表した。

ところが、父親の急死という事情により、僅か3年間で退職し、高校の教員として郷里の栃木県に戻らざるを得なかった。

昭和33年、最初に真岡農業高校定時制に赴任した。畑違いの仕事であり少々落ち込んだけれども、同じ高校に獣医科卒の先輩が、別の農業高校には農科卒の先輩が居られることが判り元気を取り戻すことが出来た。

定時制高校の生徒は、週に3日登校し、後の4日は家業（主として農業）に従事するという生活なので、教師は学習指導の外、生活指導、家庭訪問指導など広い範囲に目を配らねばならなかった。でも、このことは私にとっては教育の原点を身体で学ぶ絶好の機会であった。製糸試験所や定時制教育の体験を通して、私は人間教育に重点を置き少し幅の広い教師（一味違う教師と言われた）となることが出来、後日校長や教育長を務めることになるのだが、当時の様々な体験が、教育者としての私を育てる貴重な元肥であったと感謝している。

昭和35年、二校目の小山高校（農業科、農村家庭科、商業科）勤務を経て、昭和38年、三校目の喜連川高校（農業科、家庭科、普通科）に異動した。

最初の2年間は進学指導係を担当した。大学進学を目指す生徒の中から30名ほどの希望者を募り学習合宿という試みを始めた。合宿体験者の学習に対する心構えが変わり、その影響で一般の生徒や教師の意識も徐々に変化してきた。

この試みの指導が栃木県教育委員会に認められ、生活指導室の名目で学習合宿舎の建築に予算がつけられ、他の高校にも普及するようになった。

昭和40年、東京教育大学に1年間の内地留学を命じられ、数学教育の研究の他に、学校教育相談の講義なども聴講した。

翌年、現場に戻って「数学に興味をもたせるための指導上の工夫」というテーマで実験学校の研究主任に任じられ、習熟度別指導の試行、遅進生徒の指導法の工夫、教材開発などについて実践的な研究を推進し、その結果を文部省関係の研究集会等で発表した。

昭和50年、四校目の大田原高校に異動した。伝統ある男子進学校であり、進学指導の実績を重ね、地域社会から大きな期待を寄せられていた。

しかし、精神面で弱い生徒が増えてきたことが学校の課題になっていた。

強靱な心身の育成のために何か手を打たなければなるまい、という意見がまとまり、関東地区の伝統校の事情を視察するなどして、一昼夜かけて学校周辺を歩き通す「85キロ強歩」という行事が立案された。たまたま私が特別活動部長という立場にあったので実行委員長を命じられた。事故発生を心配する県教育委員会を説得し、同窓会、PTA、地元医師会の力強い協力に支えられて、昭和61年に第1回強歩会を断行した。「狂歩」か「強歩」かなどの批判もあったが、無事に終了することが出来、大田原高校の新しい伝統として今日まで継続されている。

生徒たちに大きな自信と誇りを持たせる行事となり、県北地

方の名物行事として報道機関の絶好の取材対象となっている。

昭和63年、五校目の大田原女子高校（普通科、家庭科、看護科、夜間定時制）に異動して教頭、平成3年に同校校長に任じられ平成5年に定年退職した。

退職後、自宅で畑いじりなどをしていたが、平成7年10月に請われて地元小川町の教育委員会教育長に就任し、平成17年9月まで10年間務めた。

人口1万程の小さな町で町職員の数は少なく、教育長が先頭に立って行動しなければならず、学校教育、生涯学習、古代文化財保護の三領域にわたり、土曜、日曜、夜間でも、何らかの事に携わっていた10年間であった。

平成の大合併を機に教育長を退職し、いまは悠々自適の生活を送っている。

最初の勤務地岡谷で地元の方々に教わった短歌と詩吟、それだけが現在でも私の趣味である。歌集を二冊発行し時々詩吟のコンクールなどに出場している。

わずか3年間であったが、生涯忘れることの出来ない勤務地であった。

第一歌集「善勝川」より

山峡の集荷所にきて繭量るわれに故郷問う集落の人あり
繭積みシトラックの到着告げるベル激しく鳴りて工女走り来
生繭の発蛾期迫り男らの声荒びくる繭乾燥場
汗と湯に濡れし作業衣の裾はしよる工女に混じる幼き顔も
製糸機の回転速度速めたるわれに工女らの視線鋭し
諏訪湖の水門に立ち八ツ岳を望めばいまも胸は高鳴る
諏訪倉庫黒く巨大なるその陰にわが青春の三年ありき

第二歌集「古蔵」より

工女哀史に義憤もありて田舎出のわれは選びき繊維工学
惜しむ声に耳塞ぎつつ稚拙なる筆にて書きし退職願
傍系の二文字につね苛まれ抗いてきしわれの教職
校長に民間人を充てる世になりて「傍系」死語となりたり
吹雪く夜は初給与にて購いし「未完成」聴き耐えていたりき
帰らんか留まるべきか諏訪湖の波に問いたることの幾度
「チチタオル」の電報を手へ遠き日のわれ飛び乗りし岡谷駅ここ
叙勲受け席に戻りしわれの身に昂ぶりはなくこころ整う
亡き人の遺影に瑞宝小綬章奉じてしばし黙し佇む

れば、功労の概要は農林水産行政事務功労、主な経歴は動物医薬品検査所長ということでありました。何はさておき、私を指導して下さった諸先輩、また私を推薦して下さった関係者の方々に深く感謝申し上げます。

ご承知のとおり、行政職国家公務員は、退官するまで様々な職場を勤め上げるのが普通で、私もその例外ではありませんでした。しかし、主として家畜衛生行政、特に動物用医薬品（以下「動薬」）の検査・検定及び検定基準改善に係る研究等を所掌する動物医薬品検査所（以下「動薬検」）の勤務が全体の約2/3という若干偏った経歴でありました。そこで、動薬検における業務に対する心構え等をご披露して、叙勲にあたっての感想とさせていただきます。

動薬の検査・検定は、動薬の製造・輸入業者の扱う製品について、薬事法に基づき公権力をもって検査・検定基準に従い評価をするものであります。換言すれば、日の丸を背負って他人の財産を評価するものとも云えましょう。もし、検定において不合格の評価を受けると、その製品（ロット）は廃棄処分となり市販できません。業者にとって経済的損失は極めて大きいものであります。

この仕組みが円滑に機能するためには、公平、公正な態度が必須であることは当然ですが、試験管を握って仕事をする動薬検査員の技術力に十分な信頼が寄せられてはじめて成立するものであります。大相撲の新弟子検査のように、身長・体重を計測して合否を決定する（と思われる）ようなものとは本質的に差異があるものです。

私自身、動薬検の新人として修業中には、先輩から精神面として権力を持つものの心構えと同時に技術面について厳しく指導を受けました。どういうことかと云えば、誤解をおそれずにご披露するならば、業者さんは若いお前に「先生」といって頭を下げるが、それはお前に対してではなくお前の机や椅子に頭を下げていることを忘れてはいけない、そしてお前の行った実験結果には無条件で納得する、不服は申し立てないと云われるような存在になれといったものでした。

私自身の経験をご紹介しましょう。ある輸入品の予防液に不合格の結果を出したことがありました。この結果は組織として決裁され、その旨動薬の輸入業者に伝えられました。ところが、相手方は納得せず立合試験を要求してきました。輸入元の会社から世界的に名の知れた研究者が来日し立合試験ということになりました。しかし、結果は変わらず、相手方の研究者は君が行った試験によって出された結論については、今後一切不服申立てはしないと云って帰国しました。若輩といえども辞表懐で臨んだ立合試験でしたが、ホッとすると同時に当時の複数の上司が立合試験を許したということは、私の技術を信頼して下さっていたものと涙の出る思いをしたこともありました。

順送りといったら語弊があるかもしれませんが、私もまた後輩諸君に同様な指導をしたつもりです。

検査員としての技術を動薬業界の方々から信頼されるためには、長年に渉る実績と業務に打ち込む真摯な態度は勿論で

叙勲の栄に浴して

貝塚 一郎（獣医S34）

私は、平成20年秋の叙勲に際し、図らずも瑞宝小綬章を受章致しました。

その理由は明らかではありませんが、30有余年に渉る農林水産省での業務に対するものと思われれます。受章者名簿によ

すが、その技術を第三者の評価に耐え得るものとして位置づける手段として学会での研究発表があります。すなわち、新しい事象の発見を裏づける実験成績を自信をもって第三者の追試に耐え得るものにするという技術面でのトレーニングは、検査・検定の信頼性を高めるためのものに他ならないのです。

動薬検で優秀な研究業績が多々あるのは、このことと無関係ではありません。これまで動薬検から日本獣医学会賞を複数名の職員が受賞しています。昭和43年獣医学科卒の中村政幸博士（現北里大）はその1人です。

このようなことが先輩から後輩へと受けつがれ、動薬検の組織としての信頼性を高めることに役立っています。

動薬検所長という立場で受章したということは、このような組織の責任者としての心掛けを認めて頂いたものと大変嬉しく思っている次第です。

なお、動薬検所長として同様に叙勲を受けられた方の一人に、昭和28年卒の沢田實博士が居られることをご紹介します筆を置くことと致します。



あれから半世紀弱

藤巻 宏（農学S36）

卒業以来、大学にはすっかりご無沙汰しておりました。数年前からはからずも農学・生物生産学会会長を仰せつかり、年に1,2回大学に顔をだすようになりました。半世紀の歳月は、府中と小金井の構内の景観を一変させたばかりでなく、学生気質も変化し教職員の先生方の研究活動も大きく発展した様子です。

思い起こせば、安保闘争の最中で学園生活を送り、学園封

鎖をして連日デモ行進に参加していました。国家公務員試験を受験し役人になることを躊躇していた矢先に、当時「資本論」をテキストにして農業経済学を講じておられた著名な先生に、「農林省に入って技術者になるのに、思想信条にとられる必要はない」と諭され受験を決意しました。そして、人事院の面接試験でデモに参加したか否かを問われたら、どう応えるべきかを友人と議論し、デモには参加しましたと正直に回答すべしとの結論に達しました。そして成績はともかく、思いもかけず国家公務員試験には合格することができました。

後に分かったことですが、試験成績が良好であったにもかかわらず、「デモには参加しなかった」と応えて不合格とされた人が少なからずいたと聞ききました。デモに参加しなかったとすれば、当時の内閣が倒れるほどの国家の重大事に無関心では、あるいは、デモに参加したのに嘘をつくようでも国家公務員としてふさわしくないと判断されたのではないのでしょうか。

農林技官としての最初の赴任先は、当時の農業技術研究所の遺伝科（平塚市）でした。旧日本軍の火薬庫跡には、園芸部（後の園芸試験場）と農業土木部（後の農業土木試験場）とともに、生理遺伝部の遺伝科が所在していました。私の配属された遺伝第6研究室では、イネのいもち病抵抗性遺伝子を外国品種から導入する研究が行われていました。この研究では、外国品種と日本品種を交配したあと、日本品種を繰り返し交配して外国品種のいもち病抵抗性遺伝子だけを日本品種に取り込む「戻し交雑法」という育種法が用いられていました。この育種法の改良が私のライフワークの一つとなりました。

この育種法では、最初の交配に1回だけ用いる親（一回親）の有用遺伝子（いもち病抵抗性遺伝子など）を反復して交配に用いる親（反復親）のゲノムに取り込むことができます。現在では、組換えDNA技術により一回親のもつ特定の有用遺伝子を単離し、戻し交雑を繰り返すことなく直接反復親のゲノムに組み込むことが技術的には可能になりました。しかし、組換えDNAには高いコストと高度な技術が必要であるばかりでなく、GM（組換え）作物品種に対する公衆認知（PA）の問題などもあり、一筋縄には行かないのが現状です。

農業技術研究所で12年間研究した後、農事試験場（鴻巣市）に転勤し6年、さらに北陸農業試験場（上越市）で6年を過ごしました。この間、戻し交雑法を改良するために雄性不稔遺伝子を人為的に誘発し、これを活用して効率のよい戻し交雑法を開発しました。さらに、人為的に誘発した雄性不稔遺伝子を用いてイネの雑種集団内で相互交配を行い、遺伝的組換えを高める育種法を開発しました。

その後、農林水産省の農林水産技術会議事務局に転任となり、研究管理官や研究開発官として約6年間技術行政に携わり、最後の6年間は、つくば研究学園都市にある農業生物研究所と農業研究センターの所長として研究管理にたずさわりました。農林水産省を退職後、東京農業大学で教鞭をとる機会をえて、学生諸君とともに発展途上地域の農業開発に関する教

育と研究に10年間にわたり従事することができました。

この度、本年の春の叙勲にあたり農林水産事務貢献により瑞宝中綬章の榮譽をいただくことができました。これは、ひとえに先輩のご指導と同後輩のご支援のおかげと深く感謝しております。

末筆ながら東京農工大学同窓会の50周年記念事業が成功裡に進むことを祈念いたします。

(農業技術協会会長)



勲章伝達式のあと皇居にて（成瀬氏の提供による）

受章に際して

杉山 俊宏（林学S36）



「砂防」という言葉、初めて聞かれる方も多いと思います。まだまだ一般の方々になじみのないようで、まず「砂防」について少しお話ししたいと思います。

わが国土は急峻な地形をなし、不安定な地質構造や火山活動により形成された脆弱な地質条件のところが多く、加

えて台風常習地帯、地震多発地帯に位置するため、自然災害を受けやすく、しかも、国土の三分の二が山地であり平地に乏しく、経済社会活動を行う上で、土地利用の高度化、多様化を余儀なくされています。

こうした条件のもと、荒廃した山々から大量の土砂が流

出し下流の河川の河床を上昇させ、洪水による災害の発生を増大させています。大規模な崩壊地としては立山の大鳶崩れ、安倍川上流の大谷崩れ、富士山の大沢崩れなどがあり、その状況は幸田文先生の著書「崩れ」にのっています。

そのため土砂の流出を防ぐため植栽などの山腹工や土砂の貯留や調節を行うため河道に砂防堰堤を築造することや扇状地の河道を固定し土砂の流出を防ぐ流路工などの砂防工事が利根川、富士川、常願寺川、天竜川などをはじめ全国の河川で古くから行われています。日光市いろは坂から見えます男体山の山腹工、その下流の砂防堰堤と大谷川流路工や兵庫県逆瀬川上流の山腹工や逆瀬川流路工などが一例としてあげられます。

また、高度経済成長期に都市部に人口が集中し、土地需要が増大することに伴い従来利用されなかった自然条件の上で不利な地形の場所も利用対象となっていました。さらに気象変動の影響からか梅雨前線などによる局地的な集中豪雨により土石流やがけ崩れによる災害が多く発生しています。昭和42年の神戸市を中心とする表六甲の災害、昭和57年の長崎市を中心とする長崎災害では多くの方々が亡くなっています。また、火山噴火によっても土石流（火山泥流、火砕流）災害が発生します。昭和52年の北海道有珠山の災害、平成3年の長崎雲仙普賢岳の災害などがあります。地すべりによる災害は地形、地質的要因から新潟、長野、長崎、徳島に多く、主として融雪や豪雨によるものですが、地震によっても発生します。先般の岩手・宮城内陸地震による宮城県栗原市湯の倉温泉地区や新潟県山古志村の地すべり災害はその例です。

これら土石流、地すべり、がけ崩れなどの土砂災害は毎年のように発生しており、災害防止のための施設の整備が行われていますが、災害危険箇所に対する整備率はまだまだ低いところにあります。このため地域住民の方々の生命を守るため土砂災害の警戒区域を設定し情報の伝達や避難が早くできるような警戒避難体制の整備も進められています。

また、砂防関係の海外技術協力も盛んに行われています。火山国であるインドネシア、フィリピンやネパールなどです。私も短期ですが、数回にわたりフィリピンを訪れマヨン火山周辺の砂防計画調査に携わりました。

今から50年ほど前、農場の一角にある水利実験施設を使って卒論のご指導をいただくことなど、故伏谷伊一教授から砂防工学を学びこの道に進みました。建設省に入りまして、日光、越後湯沢、青森、兵庫、東京などで砂防関係の仕事に従事しましたが、それ以外に、千葉県の野田や茨城県の下館で河川関係、東京で地方中核都市整備に係わる道路、河川、下水道等の関連公共施設の整備や全国の災害に関する総合調整など、秋田では県の土木行政全般に係わる業務に携わりました。

この度の受章は、永く砂防に携わったものの一員に対す

るもので、先輩や後輩の方々をはじめ関係の方々のご指導とご支援のよるものであり、あらためて感謝を申し上げます。

最後になりましたが、今後とも益々砂防が発展することと現在この事業に携わっているの方々のご健闘とご健勝をこころから願うものです。

(元秋田県土木部長、〃建設省河川局砂防傾斜地保全課長)

耕す仲間たちが与えてくれた私の叙勲

廻谷 義治 (農学S38)



私は、平成20年の春に瑞宝双光章を受け、同窓会千葉県支部にお祝いをしていただきました。農工大学を卒業とともに千葉県庁に就職した私は、農業行政の技術吏員一筋で過ごしてきましたが、これだけでは生涯このような栄誉に浴することは無かったと今でも思っております。この叙勲は、30年間続けてきた保護司活動に対するものでした。

私が保護司の道を歩み始めたきっかけは、昭和44年に新たに都市計画法が制定され、都市農業の概念が生まれ、その担当になった頃でした。市街地の中の優良農地を保全するため市民農園に取り組みましたが、その生活の場での実践として、居住する団地の人々と市民農園サークルを組織し、近くの農家と協働で市民農園を作りました。この活動は、全国的に先駆的な事例として発展しますが、都市を耕し野菜等を育てることを介した都市住民と農家の交流は、良きコミュニティに育っていきました。その仲間たちの中に、保護司と法務省保護観察所の職員の方がおり、その方たちに説得されて昭和54年に保護司になりました。

保護司は、最近ではテレビドラマの中に登場したりして世間に知られるようになりましたが、あまり知られていない存在だと思います。その仕事は、民間人の立場から、犯罪を犯した人々の更正をはかり、犯罪の予防に努める活動で

す。それらの人々の家や保護司の自宅で面接しながら更正に取り組みますので、法務大臣から委嘱されて非常勤無給国家公務員扱いという身分で仕事をします。その対象事件は、交通違反事件から傷害、窃盗、そして殺人事件まで、様々な刑事事件です。そこでは、多様な人々の人生模様と出会い、悔やみ、悲しみ、怒り、諦め、反省、それらの後の喜び、失望と希望など、様々な心の葛藤と出会います。交通事件などでは無事に立ち直り社会や大学に進んだり、面接の時に一緒に勉強して復学していった若者達や、何度も刑務所通いをした人、無期刑で毎年刑務所から年賀状を送ってくる人などに会い別れてきました。見事に立ち直った少年の結婚式に出たことも、暴力員からの脅しに怖さを感じたこともあります。

このような人々とともに夢中で走り、いつの間にか30年が過ぎていたという感じがしますが、その私の周りには大変多くの“耕す仲間たち”が存在し、市民農園で過ごすひと時に私をリフレッシュしてくれました。時には、更正の対象者を親戚や知人ということにして行事に参加させたりしましたが、仲間達は何の違和感も無く受け入れてくれました。市民農園には豊かな人間愛があり、私を保護司の世界に送り込んだ市民農園は、30年以上も保護司活動を続ける私を支えてくれています。

農政の公務に就いていると、各地の優れた農業者や海外の農業関係者と出会うことがありますが、EC (EUの前) 農業新聞の編集長が千葉県を視察された時には、彼も同種のボランティアに就いているということで、保護司仲間だった養鶏組合長の農場を視察しながら、大変大きな交流成果をあげました。

この叙勲を機に、私は“耕すこと”が全ての人にとって共通の大事な要素なのだな、と実感し続けています。



同窓生からの寄稿

今に偲ぶ師の恩

飯田 辰夫（獣畜S19）

私は疾うに傘寿を過ぎ世に云う老耄の一人ですが、幸運にも日々平穏な余生を送っております。それと申しますのも以下述べますとおり、少青年期を通じて何人もの心豊かな恩師に巡り会えた御蔭と今もってつくづく感謝しております。ついでには年寄りの繰言も時には多少とも若い方々の人生の御参考になろうかと敢てペンをとった次第です。

少年時代

私が少年期を過ぎた昭和10年代は満州事変に続いて日中戦争と文字通りの軍国時代で、県立榛原中学は校長さんの姓に因んだ所謂「小田原イズム」の最盛期でありました。校内の清掃は何と朝・昼・放課後と日に3回、朝は室内のみならず毎日全校庭の隅々まで。

そんな或る日、私は教頭の武末先生御自身が生徒便所のタイルを何か薬品で磨いておられる姿を見たのです。先生は東大の農芸化学御出身で数学と化学の担当でした。その教頭先生があらう事か生徒便所のタイルを磨いておられたのですから驚きでした。私はこれを機に先生の御名前の知一が実は陽明学の「知行合一」に因んだ命名と知ったのです。

これをきっかけに陽明学に関心を持ち続けた私は、後年、我が国における陽明学の祖、近江聖人こと中江藤樹を祀る滋賀県安曇川町の藤樹神社を訪ねたり、またその実践者として知られた備中松山藩の家老、山田方谷の遺蹟を尋ねてJR伯備線の方谷駅周辺も訪ね歩きました。更にはこの陽明学と教義の良く似た土佐南学の地、高知県宿毛市までも訪ね廻った程ですが、これらはいずれもこの武末先生の無言の教えを慕っての事で、70年を経た今でもその節の先生のお姿が目には浮かびます。

4～5年時のクラス担任は東京外語出身の永田竜雄先生でした。ところが私は国漢や数学には多少の自信もありましたが、生憎と英語は誠に不得手でした。従って先生の質問に挙手できたのは1学期中に何回か数える程でありました。でも私の挙手を認めると先生は真っ先に指名されたうえ「うん、タッチャン良く出来たじゃあないか」と褒めてくれました。漢字は竜雄と辰夫と違って呼び名は同じ「タツオ」だった為か折に觸れて私を「タッチャン、タッチャン」と呼んでくれました。英語の不出来の私も永田先生は大好きでした。

5年生の時、陸軍士官学校を受験したものの怠け者の私は当然不合格。ところが発表の数日後、顔を会わせた数学の小長谷準一先生が、「おい飯田、お前落ちたってな、良かったなあ」と仰しやる。普通だったら「落ちて残念だったな」と云われる筈なのに「落ちて良かったなあ」と云われて途惑っている私に先生はこう続けられました。「何も死に急ぐ事はない。それにお前は一人息子だったな。俺が良い進路を教え

てやる。来年東京高等農林（現農工大）の獣医科を受けよ。そして合格したら1年間は真剣に勉強し、2年生で陸軍の依託学生試験を受けるんだぞ」と。

先生の助言に従って1年遅れで志望どおり進学。更に運良く陸軍依託学生にも採用され僅かな実役乍ら陸軍獣医中尉として無事終戦を迎える事ができました。私の小学校（旧川崎町細江小）の同組男子は60名中何と13名戦死。榛中同級で勇躍陸士に進んだA君は比島で戦死。I君は特攻隊員として鹿児島島の知覧基地を飛び立ったまま彼も返らぬ人となりました。そんなわけで私が80半で今なお余生を楽しんで居れるのは偏に小長谷先生の御指導のおかげと感謝しております。

青年時代

さて私が青年前期を過ぎた東京高等農林学校は最初帝国大学農科大学乙科と称されていたのが明治31年に実科（通称駒場の実科）と改称され、更に昭和13年に分離独立した学校で、大戦末期には東京農林専門学校、今では東京農工大学と称しております。そんな経緯から現在大学本部や農学部のある府中市の地籍は元は東大の林学科の演習林だった所です。従って寄宿舎は昔も今も相変わらず駒場寮と称しているわけです。

さて、その駒場寮は当時軍国主義最盛期と云うのに何と自由自治を標榜し、舎監も居なければ門限もない完全な学生自治寮でした。闇売の安酒に酔ったストーム参加の学生達は「駒場良い所な。雲とまた自由の棲む所」と校歌高吟して憚りませんでした。

ところが戦局の窮迫につれ食料事情は急速に悪化。国民1人1日2合3勺の配給米も何時しか高粱から更に大豆粕、特に黒斑病すら混じった苦い芋粉にまで劣化。街の食堂でも1日3枚宛の外食券なしでは雑炊すら食べられなくなり、一般市民の栄養失調症や若い女性の月経閉止も続発するようになりました。駒場寮の給食とてあれこれと工夫・努力をされても二十前後の活力旺盛な若者達の食慾を満たせる筈はありません。されば農学科の実習農場では芋類はもとより大根・茄子・胡瓜まで所謂夜間実習（窃取）の対象にならない筈がありません。

実際の飢餓体験のない今時の若者達には所詮理解できませんまいが、当時野戦の軍隊では「人、1日食わざれば嘘をつき、2日食わざれば物を盗り、3日食わざれば人を殺し、4日食わざれば人、人を食う」とさえ言われていた程でした。

想像するに恰も飢餓に悩む北朝鮮人民の現状に酷似した食糧事情の中で迎えた収穫期の秋のことでした。実習農場で甘藷の収穫作業をしたところ、何と平年作の2割にも満たない反当50貫（約200疋）そこそこだったと云います。そこで農場長の加茂教授は校長室に出向き「私の監督不行届のためにこの様な不作で、誠に申し訳ございません」と陳謝の報告をしたところ、小出満二校長は「最近他所の学校では栄養失調の学生がふえて心配だと聞くが、うちにはそんな学生は一人もおらんだろう。加茂君それで良いんだよ」

と。不作の原因を一言も学生の夜間学習の為とせず、自らの監督不行届の為と報告された農場長は立派。またそれを学生の健康保持の為に当然と容認された小出校長の寛容さには皆々敬服しきりでありました。

しかし一方、当時日本一の稲（米）研究の権威者として知られていた教頭の永井威三郎教授は勅任官でしたので、私ども学生は先生方の試験農場は総括して勅任官農場と呼称しておりました。そこで学生達は夜間実習に際し「勅任官農場へは絶対に立ち入らない」と云う不文律は全員自覚をもって終始厳格に守っていた事も明記して置きましょう。

陽春の或る日のことです。偶然廊下で校長先生にお逢いしましたら私の顔を覚えておられ「飯田君、お花見に行ってきたかね」と話しかけられました。私は「盲腸炎で20日も休みましたので、それが気になってお花見に行くゆとりがありません」と正直に答えました。それというのも当時本校では180時間以上欠講すると進級失格の内規があったからです。すると「校長の私が行っておいでと云うんだから行ってき給え。しかしね、行くと決めたからには明朝雨が降ってたって止めちゃあ駄目だよ。雨が降っていたら高下駄を履いて傘さして行っておいで」と申されました。実はこの時の御教示こそが以来終生私の処世訓となったのです。科学の進んだ今日でさえ人智・人力で天候は変えられません。しかし雨天でも確かにお花見は不可能ではありません。以来私は「自力では明らかに克服不能の事態に無駄な愚痴や心配はすまい。しかし反面对応でき得るものには最大限の努力をしよう」と自覚しました。

昭和18年、代々木練兵場で出陣学徒を見送った数日後の事でした。夜分官舎に伺った私共学生数名を前に、小出校長は東条総理大臣の壮行の辞に言及され「学園に残る者は働きつつ学べなんて、あんな学問を知らん者の言を信じちゃあ駄目だよ。学問研究は男が一生を賭けてもなかなか進歩し難いものだ。学術研究は仕事の片手間で出来るもんじゃあない。長期戦になれば日米の科学の隔差は一層拡がるに違いない。学園に残った諸君は勉学にこそ専念すべきで、働きつつ学べなんて子供に言う言葉だよ」と。この時私は、明治維新の際に上野の彰義隊を攻める官軍の砲声にぞわめく塾生達に「学生の本分は勉強する事だ」と諭し、ウェーランドの経済書の講義を続けたという福沢諭吉の故事を思い浮かべたものでした。

それから約2年後、昭和20年3月9日夜の東京大空襲。乙種学生乍ら陸軍少尉の私はたまたま当夜世田谷の陸軍獣医学校の当直将校でしたので、100名程の下士官候補隊の兵隊さんを預かって分校警備に当りました。続々侵襲するB29に向って探照燈（サーチライト）が挟照され、程なく高射砲発射、防衛戦闘機も邀撃に飛び出しました。夜空に交差する帯状の青白い探照燈の光、友軍戦闘機の青色の曳光弾、交錯する反撃のB29のピンクの曳光弾、時々チカチカと光る高射砲弾炸裂の閃光。しばらくすると東の空は夕焼空のように茜色に染まり、恰も仕掛花火大会そのままでした。幸いにも本校には被害が無かったものの本所・深川など下町では一夜に何と10万人もの市民の命が失われたのです。

ところが侵襲したB29は殆ど全機無傷で悠々と退去しました。現実にかかる彼我の較差を見せつけられれば誰でもその原因を考えさせられます。その時私が気付いた直接原因の一つは友軍の高射砲弾は7～8千メートルしか届かぬ事を知っ

て彼等は約1万メートルの上空を飛翔した事です。更に友軍は標的観測を光学器機に頼っていたのに彼等はすでに暗夜の戦闘には電波探知機（レーダー）を活用していたからでしょう。これでは市民の燈火管制も殆ど無効です。私はこうした実体験によって小出校長が心配された科学技術の較差の重大性を身をもって実感させられました。

高等農林2年の後期、私は退寮し、繰上げ卒業された先輩の後を追って小金井の下宿に移りました。するとたまたま近所に農学科の福田教授のお宅があり、臆面もなく幾夜かお邪魔させて戴きました。先生は心情誠に豊かで、厚さ1cm程に輪切りにした薩摩芋を御自身で電気コンロで焼いて下さり乍らあれこれとお話されました。「人間って意地汚いもんでね、恥ずかしいけど僕も昼の会食の際着席すると自席の御飯やお肴と、隣席の物と無意識のうちに見較べているんだよね」と。当時昼に教授達が本館3階で会食された際の事までこんな調子で淡々と話されました。日頃尊敬していただけにその正直さには更に感じ入りました。また私の発言を興奮気味とお感じの節は「飯田君、学年休みまでにはまだ大分間があるから次の週末には一度帰省すると良いね」と。若者の心の安定には家族団欒こそ最良とお考えの様でした。

奥様もごく家庭的でしたので先生宅に伺っていると自宅で両親とでも話し合っている様な親密ささえ感じたものです。

次にお世話になった恩師は陸軍獣医学校での化兵（化学兵器＝毒ガス）の教官小長谷喜一少佐でした。この教官殿はたまたま先述の中学の恩師小長谷先生の家分家の御出身で、然も母校である駒場の実科最後の先輩だった事は如何にも幸運でした。但し軍隊では兵隊さんと違って将校は営外居住が原則ですので当時の私は同じ世田谷区内の広瀬家で起居しておりました。御主人は宮内省勤務で空襲警報発令と同時に登庁され、後には奥様と幼少の二児が残されるので私は体の良い玄關番として置いて貰えたのです。隣組の人々も近所に軍刀を持った将校さんが居てくれると空襲や防犯にも心強いと歓迎してくれました。しかし学校は土曜日さえも7時始業、18時終業。休日は隔週の日曜日のみという徹底的な詰込教育でした。

そんな或る日、校庭で汚れた作業衣のままの私の姿を見咎めた小長谷教官が寄って来られ「おい飯田、不精はいかん、偶には洗濯もしろ」と注意されたうえ、何と目前に洗濯石鹸を突き出されました。広瀬家へ帰って奥様に経緯を話し遠慮しつつ石鹸と作業服を出したところ、「あら今時石鹸とは珍しいわね、良いわよ、明日洗ってあげましょう」と快諾してくれました。当時は石鹸も一般市民にとっては貴重品だったので。

戦後は故郷焼津市で産業動物の診療に従事されつつ市議会議員や県獣医師会副会長をも勤められたこの小長谷教官とは御逝去直前まで親交させて戴きました。そんなわけで宴席などで時に「飯田君は臍曲りだ。しかしその曲りっ振りが面白い。くにかくにゃ曲らんで直角に曲っている所が良いんだな」と評された事を今でも懐かしく思い出します。確かに雨の中を傘をさし下駄履きでお花見に行こうなんて奴は臍曲りでしょうね。

戦後時代

私は幸いにも終戦復員後程なく一旦農林省に採用されました。普通の兵隊さんは復員すれば入隊前の職場に復帰できますが、職業軍人は元職がありませんから一時期多くの職業軍人が路頭に迷ったのです。こうした中で運良く私が拾われた

のは陸士ならぬ国立高専出身の獣医師だったからでしょう。

ところがこれは束の間の安心で、翌年には元職業軍人の故に連合軍最高司令部（GHQ）から追放（パージ）の指定を受け、止むなく帰郷致しました。しかし家では農地改革で私有の田畑でも小作人から一枚も返して貰えず、さりとて遊んでも居れず、ようやく県農業会に職を求めました。しかし此処さえ不幸にもGHQによって戦争協力団体として解散させられてしまいました。こうして私は何等個人的失態は無いのに軍人、公務員、団体職員と理不尽にも連続三度も職を追われたのです。今考えても良くぞ自暴自棄にならなかったと当時の自分を褒めてやりたい程です。

そこで私は意を決してGHQに個人で異議申立を行ったのです。文書の提出先がGHQのため書類は英文5部と和文5部ずつ、しかも英文と和文に齟齬が有る場合は英文優先と決められていました。とは言っても高等農林獣医学科の外国語はドイツ語のみでしたから英語は中学での学習以来5、6年ぶりの事です。文字通りの辞書と首っ引きで英文の異議申立書を書きました。しかも当時はワープロもコピーもありませんでしたから英文も和文も5部ずつ総て手書きしました。

ところが幸いにもこれが採択され、昭和23年には非該当の確認書を入手。こうして程なく静岡県に職を得たのです。私のように個人でGHQに異議を申し立てた例はごく希でしょうが、これも前述の小出校長の教訓の賜で、公職追放という豪雨も異議申立という傘でようやく凌ぐ事ができたわけで、高下駄を履いてでもやって見る事です。なお同時に中学の英語の永田先生にも改めて感謝の心一杯でした。

更にこの件につきましては望外の余得もありました。私のそれ迄の鬼畜米英という偏った意識が一挙に消滅した事です。日本のお役所のようにやれ法規、前例、書式、関係書類等々の面倒は一切なし。要点が理解されれば異国の中学卒程度の英文でもOKだったことです。この一件で私はアメリカ人の国民性や官僚風を再認識できたという思いです。

おわりに

以上は老耄となった80代半の私でさえも今なお忘れ難い何人かの恩師追憶の一端を記したわけですが、私にはこの先生方は夫々の学識や地位にかかわらず共通の品格をお持ちだったように思われます。それは素朴さの中に深く籠る仁愛の情でありましょう。

東京高農の小出校長は当時公務員最高位の高等官一等一級の親任官でしたし、福田教授はその後岡崎師範学校長、更に愛知県立芸大学長までなされた方々ですが、お二人とも談話中には恰も実の親爺のような親愛感を与えて下さいました。また中学の武末教頭はその後中国の北京大学教授。小長谷先生は戦後市民に推されて市議数期。一族の小長谷教官は陸軍獣医学校甲種学生（陸大相当）を恩賜の銀時計で卒業された文字通りの俊英でした。この様に各先生方は夫々に抜群の智力や職歴を持たれ乍らおしなべて外見を飾る事なく、その生活態度も至極地味でした。中でも御年配の方々は一見村夫子然とした風貌でありました。

2500年もの昔から東洋における道徳の軌範とされてきた論語の中で孔子様は「質、文に勝てば則ち野。文、質に勝てば則ち央。文質彬彬として然る後に君子なり」と記しておりますから、私は前述しました何人もの君子からお教えを戴いた

本当の仕合せ者だったと云うべきでしょう。

ところで近年世間では若者達の非行が問題視されておりすが、同じく論語の中には「吾十有五にして学に志す」とあります。愚考するに孔子様は15才から学問勉強に志されてもあれ程の業績をお残しになれたのですから、昨今の日本の社会風潮のように子供達が幼少のうちからやれ塾だテストだ文（学問勉強）を強いるより質（素朴）則ち躰こそもっと重視さるべきではないでしょうか。学は十有五であろうと十有七になろうと決して遅くはありません。それどころか私には精神的発育が未熟で自覚の乏しい幼時から無理失理に勉強を押しつける事こそむしろ苛の第一歩と思えます。

今にして立派な恩師達の風貌を追憶するにつけ、更めて文質彬彬の君子達から夢を戴き得た事に感謝しきりであります。

「贈右大臣大久保利通公碑」顕彰文を写す

吉田 富雄（農学S34）

農学府本館に向かって左手前の木立の中に石碑「贈右大臣大久保利通公碑」が建っている。黒ゴマ入り白御影石の台座に埋め込まれた碑身は6m・幅1.5m・厚さ25cmほどの黒灰色の粘板岩かとみられる巨大な平板の自然石である。在学中からこの石碑があるのを知ってはいたが、碑陰に刻まれている顕彰文は今まで熟読玩味したことがなかった。

山形県職員を経てイランイスラム共和国の稲作指導者養成の手助けを最後に公務を離れてからは晴耕雨読、読書は歴史小説を中心に数多くを楽しく読んでいる。そのなかで大久保利通は明治新政の基調を建設した元勳であることを再認識した。

重ねて大久保利通を顕彰するこの石碑の碑陰の撰文は、近代言論史の一角に屹立したジャーナリストとして健筆を揮った歴史家・評論家の徳富蘇峰の筆によるもの。これで興味がわかない筈はない。撰文は当然大学百年史に書写されていると思って探したが残念ながらなかった。それで自らこれを書写することにした。また学友にも知らせる価値があると思った。

碑陰の撰文は11行・473文字の楷書で書かれており、石板への刻みもよいので字体が極めて明瞭である。従って手書きでの書写は楽であった。しかし情報機器での書写となると簡単ではない。旧漢字と常用漢字に字体の違いがあり、また漢字の読みが分からず苦勞した。私の学力のなさも感じた。しかしこの度書写と読みを完結することができて肩の荷が下りた。

また大久保利通の曾孫にあたります大久保利泰氏が19年末に農学府を訪問されたとのことであるが、私も一緒に石碑の前に立ったような気分である。書写した撰文は別紙のとおり。

徳富蘇峰没後52年、評価は夫々あるが、撰文は蘇峰が77歳の時、70年余に亘る執筆活動の中で最も充実している時期に綴られたものである。稀にみる勉強家・努力家といわれ言論界の最長老であった蘇峰がさらに心血を注いで綴った撰文は理路整然、味わい深くして力強く読む者をしてその気にさせる流石の名文である。書家・加藤玉淵の出自や経歴については明らかでないが、碑表は極太の雄壮な筆勢で巨大な石碑に整合し、碑陰の書体は端正で力強くもあり爽やかで読みやすい丁寧な書かれた楷書である。石勝の刻みは書法・筆運・筆

圧をよく表している。碑表の刻みは深いところで7cm、碑陰の刻みも5mmほどあって筆の運びに順応して確實明瞭に刻まれており、今もって欠けたところがない。刻みが深いので石碑から離れて見ても字体の判別が容易である。石刻みの技術水準の高さに感服する。

撰文の「足ル」は「足ル」と書写したが、解釈に間違いがないか。また「庶幾シ」は「ちかシ」と読めるが、読みの不確かな漢字もある。あわせて同窓諸兄の教を賜りたい。

徳富蘇峰に関する文献・資料は極めて数多い。和田守著『近代日本と徳富蘇峰』はやや難解であるが、蘇峰の言論内容の思想史的分析などについて解析している。また口述書『徳富蘇峰終戦後日記～頑蘇夢物語』も見逃すことができない。大久保利通については佐々木克著『大久保利通と明治維新』が詳しい。その中で三条実臣と岩倉具視は大久保利通を評して「私情や利害で動いたり妥協したりする人物ではない信頼できる国家を任せられる人物である」といっている。現今の政治家とは雲泥の差である。さらに著者は「政治に私情を入れることができない国家のためと決意したら確固として動かない人間である。主君への忠義や西郷への友情に引きずられていたらおそらく明治政府は崩壊していたに違いないだろう」と結んでいる。

大久保利通は、明治6年初代内務卿に就任して事実上の首相となり「国内安寧・人民保護」を2大スローガンに掲げて将来の富国強国の実現のために殖産農業政策を果敢に遂行した、我が母校の創始者である。石碑「贈右大臣大久保利通公碑」が木立に見え隠れし乍も高く大きく建っている姿は、「為政清明」の大久保利通自身にも似て気高く毅然として清々しささえ覚えるのは私だけだろうか。私は母校の原点であり何よりも優るお宝を再発見した気分である。

〈大久保利通公顕彰碑について〉

贈右大臣大久保利通公碑

駒場校友会建
東京青山石勝刻

贈右大臣大久保利通公ハ維新回天ノ偉業ヲ翊賛シ明治新政ノ基調ヲ建設シタル元勳ナリ其ノ善謀善断恒ニ自ラ進ンテ内外ノ重責ニ任シ堅志力行身ヲ挺シテ君国ニ殉セントスル精忠大節ニ至リテハ当時風雲ニ際シタル英傑ノ士少カラサリシト雖モ未タ公ニ若クモノヲ見ス古人ノ所謂ル天下ノ大事ヲ辨スル者ハ天下ノ大節アルモノ公ニ於テ之ニ庶幾シ公平生意ヲ農政ニ用ユ而シテ農ハ農家ノ基本タル第一義ヲ把握シ以テ農ヲ尊ヒ以テ農ヲ興シ以テ農ヲ勸メ以テ農ヲ教ヘ国民ヲシテ其ノ嚮ウ所ヲ知ラシメント欲ス即チ公カ賞典禄ヲ献シテ勸農ノ資ニ供シタルカ如キ其志ノ一端ヲ知ルニ足ル若夫レ明治十一年駒場農学校開校式ニ際シ 明治天皇車駕親臨シ給ヒ農ハ国ノ本ナリトノ詔勅ヲ賜ヒタルカ如キ亦職トシテ公ノ輔弼ニ是レ繇ラスンハアラス我等此ノ大詔ヲ奉體シ菊桐帽章ヲ戴キ尊農報告ヲ以テ本来ノ目的トスルモノ蚤ニ公ノ威風ニ感孚シ其ノ高德ヲ景仰スルヤ久シ今ヤ爰ニ碑ヲ樹テ以テ公ノ英靈ヲ奉斎スルニ際シ特ニ大久保侯爵家ニ請ヒ公ノ遺愛ノ短刀ヲ拝受シ永ク碑底ニ鎮安シ以テ崇敬ノ徴象ト為ス希クハ善ク公ノ志趣ヲ拳拳服膺シ永ク矢テ護ルル莫レ

蘇峰 徳富正敬撰
玉淵 加藤豊壽書

〈顕彰碑の案内板について〉

大久保利通公記念碑

明治の元勳大久保利通公は国力を強めるためには産業の開発が急務であると説き特に農業の振興には人材の養成が必要であるとして農学校の設置を計画した。明治7年当時の内藤新宿に農事修学場を置き、さらに明治11年駒場野に移して駒場農学校として開校した。これが現在の東京農工大学農学部前身である。東京農工大学農学部は東京帝国大学農学部実科を前身とし昭和10年4月この地に東京高等農林学校として独立した。

大久保公は駒場農学校の設立に大きく貢献したばかりでなく公が幾多の功績により下賜された賞典禄2カ年分を寄贈して奨学寄附金に充て、その恩恵にあずかった本学卒業生は数多いといわれている。

昭和15年建物群が完成して落成式典が行なわれたのを機に卒業生が大久保公の高徳を後世に伝えるため同年11月この記念碑を建立した。その際大久保家より公の遺愛の短刀を請い受け碑底に埋めて久しく公の遺徳を偲ぶことにした。

碑陰に刻まれている顕彰文には「蘇峰 徳富正敬撰 玉淵 加藤豊壽書」とある。

平成6年8月 東京農工大学農学部

(文責 吉田富雄 20年書写)

国枝栄調教師の調教馬(マイネルキッツ号)が第139回春の天皇賞で優勝

田谷 一善 (獣医S46)



左：国枝氏(ご本人より提供)

2009年5月3日(日)、日本中央競馬会京都競馬場で行われたG1レース第139回春の天皇賞において、12番人気のマイネルキッツ号(松岡正海騎手)が優勝しました。このマイネルキッツ号の調教師は、本学獣医学科昭和53年卒業の国枝栄さんです。国枝さんの活躍については、農工通信第79号で紹介しましたが、これで国枝さんが調教した馬がG1レースで5回優勝したことになります。

特に、2007年5月6日のNHKマイルカップで優勝した「ピンクカメオ号」は17番人気、2007年12月23日の有馬記念で優勝した「マツリダゴッホ号」は9番人気、そして今回の春の天皇賞で優勝した「マイネルキッツ号」は12番人気と競馬ファンの予想を覆す形での快挙を成し遂げています。国枝さんのコメントによりますと「当初は、マツリダゴッホで挑戦

のつもりが大阪杯で惨敗したことから代わりにマイネルキッツで挑戦しました。万事塞翁が馬で良かったです」とのことでした。その後も国枝さんの活躍はめざましく、9月27日中山競馬場で開催された「第55回産経賞オールカマー」(GⅡ)では、マツリダゴッホ号が優勝し、同レース3連覇の偉業を達成しました。これで、現在国枝厩舎には、3頭のG1優勝馬が繋留されていることとなります。この3頭以外にも若い有力馬がおりますので、今後も国枝さんの一層の活躍を期待しています。

小田 嶽夫先生

鈴木 成美 (林S29)

小田先生の文学の講座は、四年次の半年間だったと思う。一般教養の「哲学」が、いきなりヤスパースの実存哲学であったのも驚きであったが、農工大で「文学」の講義が聴けるのも驚きに近かった。私としては珍しく、ほとんど欠席せずに受講したが、教室にはいつも熱心に講義を聴いている小野塚君の姿があったのを覚えている。

小田先生は和服姿で教壇に立たれ、いかにも作家らしい雰囲気を持たせていた。私は、先生のお名前も作品も全く知らなかったが、写真でみる芥川も太宰もみんな和服姿だったので、小田先生も偉い文士なのだろうと思った。

先生は井の頭近くにお住まいで、吉祥寺から中央線で来校されとうかがった。武蔵野の面影を色濃く残した井の頭周辺は、いかにも作家の住まいにふさわしく思え、そんな先生の講義を聴けることが嬉しかった。そのくせ今振りかえると、先生の講義内容の片鱗すら覚えていない。テストはなく、自分の好きな文学作品についてのレポート提出が課題であった。

どの程度先生がレポートをご覧になったかは怪しいが、堀 辰雄小論を書いた私のレポートにAをくださった。あるいは、出席して課題を出せば誰でもAだったのかも知れない。

今どき、あの清冽で美しい文体の堀 辰雄を読む人はごく少数だろうし、「風立ちぬ」も風化してしまった。

それまで文学作品をほとんど読んでない私に「風立ちぬ」を読ませたのは、入寮して同室の先輩、大石さんの感化だった。大石さんの机上には沢山の文庫本がいつも載っていて「風立ちぬ」もその一冊であった。文庫本の中でも、ページ数が少ないので本書を手にしたか、大石さんのおすすめがあったのかは覚えていない。

しかし、その繊細で美しい文体と、どこか西欧風な物語にすっかりとりこになって、次々に堀 辰雄の作品を読みあさった。やがて彼と深いかかわりのある室生 犀星や立原 道造へと関心が広がっていった。

だから、私の小論は即席ものではなく、私なりのものだったと自分で思っている。

もっとも、当時は堀 辰雄の作品が、新潮社や角川から盛んに文庫本となって刊行になり、若い人にとって人気作家の時代でもあった。そして、昭和28年には50歳までに数年を残して生涯の病であった結核で亡くなっている。

小田先生以外に、作家の方にお目にかかる機会はないであろうと学生時代には思っていた。ところが、私が長いこと勤

務した高校の校長が早大文科の出身で、井伏 鱒二先生に師事したかつての芥川賞候補作家であった。

そのご縁で井伏先生が三浦 哲郎氏や河盛 好藏氏を伴われ来校され、お話をうかがう機会に恵まれた。そんな時、ふと小田先生を思い出すこともあった。

それから長い年月が経って、平成3、4年頃、東京恵比寿にオープンしたばかりの東京都写真美術館を訪れる機会があった。催しものは土門 拳氏の著名人を写した人物像であった。さすがに、それぞれの人たちが持つキャラクターと時代的背景を彷彿とさせる見事な作品だったが、その一枚に「作家・小田 嶽夫」があった。昔と同じように瘠身で、和服を着て木立を背景に立っておられる先生の雰囲気はまさに純文学の作家であった。

既に、先生は亡くなっておられたと思うが、思いがけない先生との再会に、私は一瞬胸が熱くなる気がした。そして、やっぱり偉い先生だったと思った。

(2007/01/13)

(1900~1979)

小田 嶽夫：東京外国語大学中国語科卒、外務省勤務後に作家生活に入る。昭和13年 芥川賞「杭州城図絵」。中国を題材にした作品が多い（日本現代文学大事典）。

随 想

新井 正彰 (機械S42)

私は昭和1967年に本学機械工学科を卒業しました。3年ほど民間で電磁弁の開発、設計に従事してまいりましたが、その後、縁あって本学の機械工学科に奉職することになり、現在に至っております。学生時代を含めると実に45年すなわち約半世紀ほど東京農工大学に関わって参りました。

学生時代の頃、現在の櫛寮周辺は一面桑畑でしかも近辺にはお蚕さんの蚕室まであり、のどかなキャンパス風景でした。20歳前後の食欲旺盛な頃で真赤な桑の実を口の回りを赤くしながら、頬張ったものでした。

いつの間にか、桑畑や木造の蚕室も無くなり、すべてが鉄筋コンクリートの建物へと変わり、研究環境も大変良くなりました。また、学生の数も次第に多くなりましたが、同じクラスの中で、一度も話したことが無い人がいると学生から聞いてびっくりしました。私が学生のときの定員数は40名でしたが、退学する人が何人かいて毎年、大体35名程になります。このくらい的人数になりますと、毎日顔を合わせているうちに自然と会話をするようになり、絆も強くなります。今でも毎年正月に学生時代の友達が集まるのもその頃の絆であると思っています。

今、部屋を片付けていますが、卒論や修論で面倒を見てきた学生の論文がダンボール一箱半ほどになり、我ながら長年良くやってきたと驚いています。私は40歳の頃、流体関連振動で有名な早稲田大学の田島教授の研究室に内地留学しました。まず、教授から卒論の面倒を見るように言われ、学生を指導しましたが、氣質が農工大とは異なっており、最初のう

ちは戸惑うことが多かったのです。早稲田の学生は総じて自己主張が強く、私の研究方針に反発されることも多々ありました。しかし、その学生のおかげで学位も取ることができ、今では感謝しております。

約半世紀にわたる農工大学での生活、色々なことが数多くありましたが、健康で無事に定年を迎えることができたことは東京農工大学教職員皆様のお陰であると深く感謝致しております。

農工大の思い出

前田 芳宏 (林学S56)

人生50年が過ぎ、先輩諸兄や後輩の方々に何か伝えるべきことの一つや二つはあるはずですが、語るべき事柄は思い浮かばず、余白を埋める私の学生時代の思い出話に少しお付き合いください。

私の故郷は、佐藤春夫が「空青し、山青し、海青し」と歌った南国紀州です。しかし、高校時代は、人並みに青春の憂鬱を抱え、光輝く風景は目に入らず、蒸し暑い大気で満ち満ちた故郷を早く出たいと思っていました。家業の関わりで大した思慮もなく林学科を志望し、演習林の広さと偏差値だけで農工大を受験し、運良く自分の受験番号36番を農学部の掲示板に見つけ、ほっとした次第です。

我が子も大学を受験する年頃になり、「何のために大学へ行くのか、よく考えなさい」との私の子供達に対する繰言にも「行ってみなければ分からない」との本音が透けているようです。

入学したときに目を引いたものに「歓迎、小役人組合&中堅技術者組合」という立て看板がありました。先輩達が自分達の将来を揶揄したものでしょうが、なるほど上手いこと言うな〜と思っているうちに、いつの間にか自分も小役人組合に入り、残すところ10年となりました。

「勉強はしない、剣道をする」と心に決めて入学し、早速、剣道部へ入部。「剣道をする」理由は、「自分を変えるため、心身ともに鍛え直す」という殊勝なものでした。「馬鹿になれ」という師範(伊藤金得先生)、先輩の高尚な教を素直に受け取り、新歓、夏、秋、寒、春と年5回の合宿に追われるなか、授業に出ては先生の目の前でも平気で眠っていました。お陰で、勉学は身に付きませんでした、「しんどい」ことに耐える精神力、心肺能力は鍛えられました。社会人になり、熊野をはじめ三重県の山々を駆け巡った際には、剣道で蓄えた心身の貯金に随分、助けられました。

鍛えられたといえば、納豆を食べることもその一つです。今は、関西でも納豆は珍しくなくなりましたが、当時は、納豆を食べたことが一度もありませんでした。合宿では朝食を自炊しており、ご飯+味噌汁+卵若しくは納豆という定番メニューです。しかし、卵を食べたい者にいつも卵が行渡るはずもなく、腹を空かした若者は、納豆を泣く泣く食べているうちに、納豆好きになってしまいました。

約10年前に厳しく指導してくれた当時主将だった先輩が亡くなり、それをきっかけに同期の者が集まるようになりました。今も毎年、場所を変えながら一泊二日の楽しい同期会を

催しています。

3年生になり、森林経理学の研究室に入りました。担当教授(岡和夫先生)の講義を拝聴したものの、馬の耳に念仏、ゼミが終わってからの鍋コンパの賑わいだけを覚えていません。研究室でベーゴマを始め、階下の研究室からウルサイと叱られたこともありました。

卒論を控え、先生から故郷でテーマを探せ、という指示があり、三重大学に行って「熊野川流域におけるナスビ伐り施業」を選定。「ナスビ伐り」とは利用できる一定の大きさになったものから順次、伐っていくというもので、皆伐・一斉更新が一般的になっていた当時としては、珍しい森林施業方法でした。夏休みに三重県の熊野林業事務所へ資料をもらいに行きましたが、9ヵ月後に同じ席で資料を配る側になるとは夢にも思いませんでした。また、「ナスビ伐り」については10年後、県林業技術センターに異動になった際、「複層林」の調査研究を担当することになり、再び同じテーマでお世話になることになりました。

林学科では、演習林での合宿実習などもあり、同じ釜の飯を食った仲間が約30人います。現在も、現役時代同様、良さ取りまとめ役がいて、メーリングリストや5年に一度のクラス会を催し、旧交を温めています。

当時は振り返っていると、まだまだ様々な思い出が蘇ります。しかし、与えられた余白も僅かとなりました。

いつのまにか「人生50年」が過ぎ、天命を知る年齢のようですが、18歳のときの学問への志が低かったためか、未だ悪い、未だ天命を探し続ける羽目となっています。幸い、農工大とは、三重県同窓会(万年幹事を押し付けているF君には、いつもお世話になっています)、クラス会、クラブの同期会と3つのつながりを持っています。これからも農工大同窓生の活躍に触発されながら、また、同じ記憶を持ち、同じ空気を吸った仲間と語りながら、「人生100年」を目指し、残りの50年を生き抜いていきたいと思えます。

農学部と工学部をむすぶもの

松尾 義之 (応物S50)

「親父が原稿を書いたんだけど、本にしたいというので相談にのってくれないか」。日本経済新聞社に昭和50年に同期入社した登坂和洋君から、久しぶりに電話が入った。彼はすでに日経を退社して故郷群馬県渋川市に帰り、そこで上毛新聞の論説委員に就いていた。

私の方も、日経サイエンス編集部で23年間を過ごし、2年間出版局編集委員を務めたあと退社、2000年から現在の零細出版社を引き継いでいた。キラキラ光る書籍を出しつつづけたい、と志だけは高く出版活動をつづけている。

「君が質の高い本を出していることは、ホームページでよく知っている。親父は実は、君の先輩でもあるんだ」。ここから、登坂君との再交流、そして登坂秀(とさか・しげる)さんとの交流が始まった。

登坂秀さんは1943年(昭和18年)に旧制東京農林学校(現

在の農学部)の農学科を卒業された。出兵されながらも無事に帰国、戦後は農林省に勤務された。1973年(昭和48年)に渋川市の収入役になられ、1981年から2001年まで、実に20年にもわたって渋川市長を務められたという。

原稿を見せられてびっくりした。市長といえば政治家の仲間であり、生臭い話を想像していたのであるが、そうではなかった。赤城山、榛名山、妙義山を眺める風光明媚な渋川に生まれ育ち、その愛する郷土を20年かけてどう磨き上げてきたか、ある意味で市長の「哲学」を記した内容だったからだ。

キーワードは「美」だった。緑豊かな街を守り育てるため、「緑被率」という考え方を発明し無謀なゴルフ場開発に規制を加えた。街路樹を植え、市の花をアジサイに決めた。一方で美術館を作ったり誘致し、それらを結ぶ芸術の散歩道を作った。それだけではない。優れた彫刻家の作品を購入し、市民が手に触れるところに多数設置した。

すばらしいアイデアマンでもある。例えば渋川市美術館は、銀行の建物の一面を家賃借りして運営しているし、「日本のまんなか緑の渋川」という標語も登坂秀さんによる。

最終的に完成した『美のまち 人を潤す』(白社社刊、2002年9月)で、登坂さんは、市民の人格、品格、風格が集まって、まちとしての格、つまり「市格」が醸し出されてくるのだと説いた。ベストセラー『国家の品格』が出る何年も前のことである。

私と登坂さんは30歳近く離れているし、私は工学部の出身である。しかし、生意気なことを言わせていただくと、どこかに農工大精神みたいな共通のものを感ずるのである。大学歌に「真理の光に羽ばたきて、技術の炎に身をつつめ」とある。登坂さんは渋川市政、私は出版の中に、真理と現実(技術)の融合した理想を追いかけてきたのかもしれない。

その後、もう一冊『鳥の目 虫の目』という著書を刊行させていただいた(白社社刊、2006年10月、市販せず)。その個人史を拝見し、農学部内の「駒場寮」での生活、時には新宿ムーランージュまで出かけたオフ生活、農業経済学の内容など、戦前の府中キャンパスの一端が垣間見えて非常におもしろかった。

農学部と工学部だけの大学というのは、世界を見わたしても珍しい。私たちの時代はまだ教養部が府中にあり、そこで農学部の人たちと触れ合ったことが、ものの見方を広いものにしてくれた気がする。

私自身、2000年から工学部で「技術者倫理」という総合科目を受け持っているが(非常勤講師)、年に数人、農学部の学生が授業を聞きに来てくれる。農学部生のレポートは、ちょっと違う視点があってもおもしろい。

授業でする脱線話の一つは、いまや本当に美しく育った小金井キャンパスの櫟並木のことだ。学生のころ、当時はまだ貧弱だった櫟たちを指して、「これは農学部の立派な先生が植えてくれたもので、何十年かすると美しい並木になるそうだと語ってくれた先生がいた。この先人の話をまず傳承する。

そして私の話。工学部の研究は、いまやフェムト(10⁻¹²)秒より短い時間の世界を追いかけている。研究としても数年で片が付くような場合が多い。しかし農学、さらに林学のような学問は、何十年も先にならないと結果が出ないことがある。あるいは何世代も先に託さなければならない研究もある。せっかく農工大に入ったのだから、そんな学問の違いについて想いをめぐらせてみたらどうか・・・と。

非農家出身者の農業遍歴

今井 昭仁(農学H5)

私は平成5年に農学部農学科を卒業後、非農家出身の身でありながら農家になるべくスイス・新潟での4年間の研修を終えて、平成9年から現在の居住地、新潟県上越市柿崎区(旧柿崎町)で稲作を中心とした農業を営んでいます。現在の場所でも農業ができたのも農工大での多くの人との出会いの結晶です。

府中の広大な農場と農業にあこがれて入学したものの、当初は実践の農作業になかなか触れる機会がありませんでした。そこで校舎裏の付属農場で畑仕事をしていた先輩(4年生)の後を継ぎ、同級の仲間と「耕地の会」と言う名のサークルを立ち上げました。鋤の使い方もわからない都会生まれの学生ばかりだったので管理も十分にできず、担当の先生や技官の方には大変お世話になりました。

農場管理棟内に新設された農業技術学研究室に所属していましたが、実際の農家の実情を知りたい思いから、経済系研究室の「農家調査実習」に度々参加させてもらいました。そして「農家のことがもっと知りたい。」と思っていた矢先、研究室の塩谷先生の紹介で現在の居住地である柿崎町の農家に1週間泊まり込みで実習をさせていただきました。これが転機となりました。

4年生になっていたにもかかわらず、春から秋にかけて柿崎町に5・6回通い詰め、ますます「農家」という職業の魅力にはまっていきました。ろくに就職活動もせず進路を悩んでいた私に、またも塩谷先生の助言がありました。「海外農業研修があるよ」と新聞の切り抜きを頂きました。農家師弟を対象とした物で行政(都道府県)の推薦がないと選考試験も受けさせてもらえないという、非農家コネ無しの私には非常にハードルが高い物でした。当時できたての新都庁に通い、何とか担当者の方から推薦を頂き試験に挑み、第2希望のスイスへ1年間の研修が決まりました。

スイスでの研修は自分への課題でした。「農家」という職業に自分が向いているのかを試すためです。落第点であったドイツ語での生活と1日12時間に及ぶ労働時間のなかで夏が過ぎた頃には自信が付き、日本に帰ったら農家になろうと決意しました。しかし日本の実情に詳しくないため、学生時代に通い詰めた柿崎町の農家に研修先の相談をしたところ、「柿崎で農業研修をしないか？」とお誘いを受けました。特別悩むこともなく、これも縁と思い帰国後は柿崎町での研修が始まりました。

私の年代から始まった農工大生と柿崎町農家との交流は続いていました。在学中に属していた「耕地の会」の学生も合宿と称して私の住まい(茅葺きの農家)を拠点に柿崎の農家に実習に向向っていました。農業研修といいつつも、たまに友人や後輩が遊びに来てくれるので楽しい3年間となりました。そんな中、後輩の一人の女性が私の妻として一緒に暮らしています。

平成9年に独立後は一農家として農工大生の研修を受け入れ始めました。毎年、夏休み中に20人ほどの学生が柿崎の農



家で泊まり込みの実習をします。受け入れ当初は年も近いので学生と一緒に騒いだりしていましたが、最近では学生の親御さんの年に近いのでお酒も程々にしています。

柿崎区には農工大卒業の新規就農者が私を含めて3人います。年も近く仕事でも良く顔を合わせるので、飲み会は常にプチ

同窓会です。また、指導を頂いている新潟県農業改良普及員の方々も農工大出身の方が多く、常日頃から農工大卒業生というのを意識させられます。

今回は同窓会新潟支部から寄稿の機会を頂き、農工大との縁は卒業してから益々深くなっているなどと思う日々です。

天敵昆虫オオメカメムシとの出会い

大井田 寛 (生産H10)

近年、「食の安全・安心」に対する社会の関心の高まりを受け、農作物の生産現場では減農薬が進んでいます。このような状況下、化学合成農薬に代わる害虫防除法の一つとして天敵利用が注目されており、すでに生物農薬として流通している天敵だけでなく、野外に土着する未利用の種を活用しようとする動きも活発化しています。千葉県でも、土着天敵のオオメカメムシを生物農薬として実用化し、害虫防除に利用するための研究を行っています。

私は農工大在学中、サツマイモなどの害虫として知られるエビガラスズメという大型のガの栄養生理をテーマに卒論をまとめました。その後就職した千葉県では、希望通り農業試験場の病害虫部門に配属され、大変幸運なことに、11年経った現在も引き続き農作物の害虫防除の研究に携わっています。入庁後、私は主に、施設園芸で問題となるアザミウマなどの微小な害虫の防除に関する課題を担当してきました。大型のエビガラスズメから一転して大変小さなアザミウマを扱うことになり最初は戸惑いましたが、この課題が、その後オオメカメムシを中心とする天敵利用の研究に深く関わるきっかけとなりました。

私がアザミウマの仕事を担当した当初から、その天敵であるヒメハナカメムシ類の利用が脚光を浴びており、すでに多くの方が様々な研究に取り組んでいましたが、本県でもその利用技術の確立について課題化することになり、私も扱うことになりました。念願かなって天敵利用の仕事に携わることができ非常に嬉しかったのですが、反面、研究職初心者の私には、ヒメハナカメムシ類はすでにかなり研究され尽くしていると感じられ、どのように進めればオリジナリティーを出せるのだろうかと思ひました。

そんな折、野外の土着ヒメハナカメムシ類の発生実態を把握するため、圃場で作物をたたき落とし調査したところ、見慣れない小さなカメムシと出会いました。室内に持ち帰って調べたところ、この虫はヒメオオメカメムシという雑食性の種であることがわかりました。文献等を見ながら自分でも予備調査を進めるうち、本種は肉食性が強いということがわかり、新しい生物農薬の候補として有望ではないかとの期待が持てました。ほどなく、近縁でひとまわり大型のオオメカメムシも捕獲でき、他県の方のご親切な勧めもあって、生物農薬化を目標とした2種オオメカメムシ類の飼育と研究を始めることになりました。

オオメカメムシ類については、欧米の種では色々な研究事例がありましたが、日本の在来種に関しては詳しい生理生態がほとんど知られていませんでした。そこで、生物農薬として短期間に実用化するため、本県を中核とした他機関との共同研究を行うことになりました。折しもこの年に農水省の委託プロジェクト研究「先端技術を活用した農林水産研究高度化事業」の募集が始まり、幸運にも採択され、大きな研究資金を得て進めることができました。本研究では2種オオメカメムシ類の大量増殖法を開発し、生理生態を様々な面から解明したほか、アザミウマ等の害虫が発生した農作物にオオメカメムシを放した場合、高い防除効果が得られることなどを明らかにして、3年間で実用化への道筋をつけることができました。その後、共同研究相手の一つである生物農薬メーカーの主導により農薬登録のための防除効果試験が行われ、現在はイチゴのアザミウマ類に対する登録の準備が進められています。

私はオオメカメムシの仕事を通じて多くの方と出会い、これをきっかけに新たな研究に携わることもできました。また、このオリジナリティーの高い仕事に取り組むうちに、自分の研究に自信が持てるようにもなりました。もちろん、上司やチャンスに恵まれたことは大きいと感じますが、オオメカメムシとの出会いなくして今の自分ではなかったと考えています。この出会いに感謝しながら日々の研究に取り組み、今後も生産現場のために頑張りたいと思います。



【オオメカメムシ】体長約5mmの捕食性カメムシです。国内の広い範囲に生息し、アザミウマやハダニなど、微小な農作物害虫を食べる有力な天敵として知られています。両脇に突出した大きな複眼がその名の由来です。

ソムリエと農業にける情熱

平川 敦雄 (生産H11)

私は18歳の時に飲んだワインに興味を持ったことが始まりで、味覚の世界や料理との調和に魅了され、現在、2008年北海道洞爺湖サミット会場地のホテルにて、600種類、12000本のワインの管理、サービスをソムリエとして任されています。

私の学生時代は、大学の授業が終わると都心へ通勤し、夜は毎日のようにレストランで働いていました。初めてホテルのソムリエの制服を着させてもらったのが19歳、そして大学4年時に休学、都心の有名ホテルのメインダイニングで1年間必死にお金を貯めてから、リュックひとつで船と鉄道を乗り継ぎユーラシア大陸を横断、フランス東部の小さな街で生活を始めたのが22歳の時でした。当時、全くフランス語ができない自分に現実は厳しく、ヨーロッパ各国のブドウ園を寝袋担いで歩いていたのが1年目、「働きたい。雇って下さい。」と100通以上手紙を書いて断られたのが2年目。住むところもお金もなく、ブドウ畑の真ん中でテントを張り、3ヶ月近く野宿生活をしていました。その後はブルゴーニュ、アルザス、ボルドーを代表するワイナリーで働き、学部8年目の1998年に帰国、復学しました。

ほとんどの学生が体験することのない学部生8年目。同級生は皆卒業し、この時ほど人生を考え直すことはなかったと思います。「大学時代にやり残したことは、勉強」と答える社会人が多い中、「悔いが残らぬように、とことん授業に出て勉強したい。」と、思えたのがこの最後の1年でした。この時の猛勉強は2年後、フランスの大学院進学へと繋がります。卒業後、国内のホテルでソムリエとして勤務していた27歳の頃、8年生の流れで受験した文部科学省「技術士」農業部門第一次試験に合格。フランスでお世話になった主人の「頑張ればフランスで醸造士になれる力がある」という言葉を信じ、再渡仏を決意。南フランスとコート・デュ・ローヌの有名ワイナリーで醸造の経験を積み、冬はブドウ樹の選定してお金を貯め、フランスの農学部門最難関のグランゼコール、ENSAの最終学年に入学。そして32歳でフランス農水省認定エノローグ(ワイン醸造士)、技術士(ブドウ栽培)に合格。ボルドー大学醸造研究所でワイン芳香性分子特定についての研究生活に没頭してから、プロヴァンス、南アフリカ、ブルゴーニュ、ボルドー、ロワール、ニュージーランドの有名ワイナリーで技術コンサルタントとして、14回の醸造を経験しました。同時に念願であったフランスのソムリエ呼称認定試験を受験者最高点で合格し、更にボルドー大学のワイン鑑定技能試験もフランス人専門家達を押さえ、2007年度の第1位で取得。アルザスや南フランスの3星レストランでソムリエとして修行後、帰国を決めました。

現在36歳。ソムリエとして更に上を目指して勉強中ですが、レストランサービスをしている今でも、私がこれまで



触れてきたワインが生まれた畑の風景や空気や土を思い、常に農業への情熱があります。寒さの厳しい冬の畑でひたすら選定作業をしていた時のつらさ、発酵が終わった醸造タンクの中でブドウかすをシャベルでかき出す度に滴る人間の汗が、できあがるワインの一部になってゆく想い、ボトルの中には、ブドウ栽培者とワイン醸造家の愛情や情熱が込められています。そして、ブドウ樹が植物として生長し、果実を生み、ブドウ酒として姿を変えてゆく中で、醸造技術以上に、どれだけ「生きた土」と共に働き、その土地のローカルな味わいを表現できることが重要なのかを実感してきました。ワインの農産物的価値は、産地が確立され、産地の味覚が重視されるに従い、その「土地らしさ」に帰着します。原産地が持つ意味は、その地域における歴史や本質的な風土特性と深く結ばれ、人間の営みとして精神面に依存するかたちで、「土地概念」の存在の豊かさに関連しています。そして持続可能な農業という礎の上に農業と食が結びついた姿が伝統料理や地方料理であり、「食の文化」の原点でもあります。レストランは自然や農業の素晴らしさを実感できる場所でもあるのです。

言葉も喋れずにフランスで生活し始めた14年前の自分、そして異文化の中で実力を養い、国境を超えた多くの人達の信頼に支えられている今の自分。ワインを通じて出会う人、大地、農業の魅力。世界レベルの視野で専門性を磨くことの喜びに包まれ、今の私の「ソムリエと農業にける情熱」があります。



シュヴァリエ・モンラッシュの畑にて(ブルゴーニュ)



ブドウを潰す作業(ロワール)

フィリピンの一断面

谷井 宏邦 (織化S38)

08年12月、縁あってフィリピン、ネグロス島、バコロド市を訪問し、旧日本軍人が建立した比日戦没者慰霊碑の礼拝式に参列した。フィリピン各地には多くの戦没者慰霊碑が建てられているが、旧軍人も年老いて管理維持することが困難になっている。私が参列した慰霊碑も同様で、隣接地に日本庭園を造園し公園として市に寄贈し、あわせて慰霊碑の管理を市のお世話になることを期待する状況である。約1週間同市の日本NGOの施設に寄食し、造園の最終工程、両国関係者による慰霊碑礼拝式および日本庭園贈呈式に参加し、同島の1面を見ることができた。

まず、同島には戦後間もなくから日本の篤志家による農園開発指導や、NGOによる島民への農業技術教育の歴史があり、対日感情が非常によい環境にあると思われた。従って、先の戦争による反日感情はまず感じられなかった。むしろ、より積極的な日本の支援を期待するようである。また、報道による民族間騒乱も同島では全く感じられず、町のレストランや高級店では小銃を持ったガードマンが立っただけで緊迫感はなく、兵士や警察官すらほとんど目にするのがなかった。多分島により情勢は大きく異なるのだらうと思われる。

以下、ネグロス島に限ったフィリピンの1面を紹介する。

同島は四国よりやや少ない面積を持ち、火山を有し、山地のほか、広大な砂糖キビ畑と三毛作可能な水田を有している。従って、少なくとも米は自給可能ではないかと思うが、比国の現状は米の輸入国である。現地島民は温和な性質とともに経済力もないことから、農業に対しても資本投入はできず、低効率の状態と思われる。一般論的にいえば、支配層は白人系、経済の中心は中国系が握っていて、現地人は労働力提供に止まっている。次の主要産物である砂糖キビは砂糖の原料だけでなく、バイオエタノール原料として注目され始めたために期待は大きいものの、現実にはバイオエタノール工場が大規模に操業しているとは聞かなかった。興味あることに砂糖キビからのエタノール生産は、旧日本海軍が航空機燃料のガソリン代替用に、戦時中から同島で実施していたとのことで、歴史の因縁を感じた。

次に意外な一面として、市当局も養蚕事業を拡大しようとしていることである。これは上記したNGOの活動などの貢献もあり、高温地でありながら蚕卵の孵化から製糸までを可能とし、島民への技術指導の最中であり、桑畑の開発も積極的である。正確か否か不明であるが、米の生産サイクルより養蚕のまゆ生産のサイクルの方が短いので、生産性が優れるとの判断だそうである。

これらの農業産業の状況を見ると、偶然にも当学の範囲と一致する部分が多いのに驚いた。日本は経済状況が悪いとか、雇用の機会がないとか、負の問題が多いが、比国では労働を厭わず、高給を期待しなければ、社会への貢献や自己の存在認識などについては、はるかに恵まれた環境であると思われる。広大な自然には心が広がる思いがした。特に若年層には、別世界的な社会があり、そこにも評価すべき人たちがいることを認識すれば、自己形成に大きな影響があると信ずる。比国を観光地や退職者の居住地と見ずに、現地の産業向上と両国の補完的関係の緊密化こそ、21世紀において構築すべき関係と思った。比国

でのボランティア活動に関心を持たれる当学の先輩がおられれば、さらに情報を提供致します。

同窓生の皆さんへ

山本 明 (農工院S50)

共に勉強した同級生の皆さん、そして一緒にテントを背負って山歩きをしたワングルの仲間たち、皆さんお元気ですか？ 特にワングルには7年間も在籍したので、たくさん仲間に出会いましたね。僕は今、タイのチェンマイにきています。と言っても今回は一週間ほどの仕事で来ているのですが、今月中にこの原稿を、ということで出張先で書いています（相変わらず締め切り間際にならないと仕事に手つきません）。

昨年3月で、群馬県庁を定年退職し、今は海外の設計コンサル業務を行っている、NTCインターナショナル、という会社で第二の人生を歩き始めたところです。今回の業務は、地球温暖化による気候変動が、アジアモンスーン地域のかんがい施設にどう影響するか、ということ、スーパーコンピューターを使ったシミュレーションモデルによって予測・解析を行う調査検討業務のお手伝いです。もちろん僕が解析を行うのではなく、今年はそのための気象・水文データをメコン河流域の国々で集める仕事をしてきました。今回の出張は、今年度の解析・検討結果を話し合う国際セミナー開催のための設営係としてチェンマイにきています。

昭和45年、卒業式直後の3月31日、あのよど号ハイジャック事件のあった羽田から、青年海外協力隊の農業土木隊員としてフィリピンに赴任し、2年間ルソン島の南部の小さな町でボランティアをしてきました。帰国後大学院を経て、大好きな山歩きが続けたくて、山に近い群馬県庁に入りました。県の技術職員として33年間働いてきたわけですが、最近ほど国民の関心が農業に向けられた時期はなかったように思います。食の安全・安心と食料の安定供給、気候変動による国際的な農作物の減収、農業の楽しさと大切さ、等等。

県庁退職前は県立農林大学校の校長をしていましたが、社会人コースを設置したところ、予想を上回る多数の入学希望の応募がありました（しばらく定員割れで悩んでおりました）。

県在職中は、様々な職場を経験し、現場を担当しましたが、農工大出身という看板は、年を経るに従って重くなっていったように思います。もちろん農業土木の分野に限らず、農工大の卒業生たちの活躍を見ると、いつも誇らしく思い、そのたびに身が引き締まる思いをしました。世間での農工大出身者に対する評価は、想像以上に高いものがありますが、実際に、それぞれの道で活躍する“その道のプロ”に多く出会いました。社会に出てから、学生時代に教授たちが強調されていた「実学の府」ということを実感してきました。大学は、工学なら東工大、農学なら農工大、という言葉が群馬にきてよく耳にしました（工学部の方すみません）。定年退職後の人生でも、農工大出身で活躍している方によく出会います。同窓生のみなさん、そして在学中の学生諸君、これからも、もっともっと農工大の真骨頂を発揮してってほしいと願っています。

チェンマイでのセミナーは、順調に、とても成功裏に終わろう

としています。今年度はもうすぐ終わりますが、この業務はまだまだ続けられる計画ですので、少しでもアジアモンスーンの農業が、気候変動の影響に打ち勝って発展していけるよう、なお一層頑張っていきたいと考えています。

同窓会雑感

山本 陽次 (農工H2)

同窓会静岡県支部の事務局に入り数年が経過し、今は連絡員として庶務を担当している。お陰で会員の名前と顔を少しずつ覚えてきた。

初めて静岡県の同窓会に出席したのは二十三歳の時だ。とてもこの会には出席できないなあ、と思いつつ十年以上の間、二度か三度出席しただけだった。最初の会に対する印象は「老人会」といったものだった。とても若者が参加して楽しめる会とは思えなかった。その時の参加者の平均年齢は優に四十歳を超えていたのではないだろうか。自分の親よりも年輩の人数が半数以上で、中には祖父母と同世代の方々もいらっしやう。何でこんな会を開催するのか正直不思議だったし、どうしても開催する必要があるなら、年配者のみで催せばよいのではないかとさえ思った。

しかし、三十路も半ばを過ぎ、少し社会のことや大人の世界のことも分るようになってくると、この集いが妙に刺激的に感じられるようになってきた。諸先輩方の語ることを聞くことが、私に何かを考えさせる材料にあふれ、常に前向きな努力を要求してくるのだ。

五十六と年齢を重ねていったとき、先輩方と同様に、後輩に対し刺激的と感じられるような話ができるだろうか、そんな思いが、また私には刺激となり、動機となり、努力を促してくるのだ。

このような感覚を得るようになってから同窓会への出席が「苦」から「楽」に変わった。楽に変わってからは殆ど皆出席だ。そうこうする内、事務局に名を連ね、とうとう連絡員として庶務を扱うようになった。

去る三月一日には、連絡員として初めての支部総会の準備運営を行ったが、予想に反し大変な思いをした。仕事もちょうど問題がいくつか発生し、受験生の子供を抱え、公私共に忙しく、このままではまともに総会を開けないのではないかと心配になるほどであった。

それでも、他の事務局員の助力により何とか開催することができた。

上演にかかる時間の幾層倍も準備には時間がかかるという当たり前のことを改めて思い知らされ、過去、この作業を担ってきた先輩方にも頭の下がる思いがした。

古希を超えられた先輩方にお会いすると、この一年一度の支部総会や懇親会が待ち遠しい楽しい催しなのだと良く分る。そういう意味でもこの会を続けていく価値があると思えるようになった。私自身の年齢によるものか、別の理由によるものかわからないが、そんな風に思えるようになった自分が好きであり、少々大人になったと思える。こんな書き振りは大先輩方の目には子供の背伸びと映るかも知れないが。

私の感じ方が良いというつもりは無いが、今二十代三十代の

会員もいずれは私と同世代になる。少しでも早く同窓会の常連になり、他の会員と懇親を深め、先輩方から刺激を受け、成長を促されてみてはいいかと思う。

私はなかなか努力を継続することができない。年一度の同窓会と懇親会が先にも書いたとおり動機となり努力の原動力となっている。努力の継続が苦手な諸兄は是非同窓会に出席してみることである。

自分の知らないところで同窓の繋がりがあり、助けられているということに気付いたりもする。若いうちは自分ひとりで生きていくつもりになり、過去も未来も東も西もお構いなく、人との繋がりを大切とも思わず生きてきた。

少なくとも高等な生き物は社会を形成するものだ。人は当然社会を形成する。社会を否定するなら世捨人となるしかないが、社会の恩恵を受けながら世捨人として生きるのにはある意味寄生だ。最近ようやく寄生という生き方から共生という生き方に移行できてきたように思える。こんなことを思うのも同窓会のお陰である。この三月で大学を卒業し満二十年になる。この程度のことを気付くのに二十年も要し、しかも独力でなく同窓会会員の助力を受けたことを考えると悲しい限りだが、これが私の成長の仕方だとあきらめるしかない。

何も知らず、考えることもなく入学し、卒業した大学に、長い歴史と伝統文化があり、多くの優れた先輩がいることに感謝している。その謝意を形にするためにも、もう暫く静岡県支部の事務局として同窓会の運営に協力していこうと思う。また、若い世代に同様の思いで事務局に参加してくれることを願い筆を擱きたい。

同窓会で旅行の計画は如何なものか

鹿熊 俊明 (登志) (獣医S34)

1月末にマチュピチュやナスカに旅行した。世界中が不景気で騒いでいるときにペルー旅行なんて何だ。私は私にそうやってやりたい。一夜の宿もなく、暖かい食事にもありつけないそんな人達がいるというのに気になるな…旅費はそのような人たちに寄付をしてはどうか。それも一策であるが、体力を考えると今、行かねばと思って行って来た。しかも、オバマ大統領就任前日に羽田を発ち、アトランタ経由でリマ入りと相成り、テロ集団が余計なことをするのではないかと。ペルーの観光バスが転落して30人が死亡したとか、ハドソン河に不時着した飛行機もあったことなど心配はいくつかあった。

07年7月から9月末まで国立博物館でインカ・マヤ・アステカ展が博物館やNHKの主催で開催され、私も参観した。かねてから四大文明と異質な文明であると思っていたが、脳外科をやり、鉄器時代にまで至たらずに、巨石を細工して神殿や砦(?)を構築していた。しかも、象、馬、牛のような使役動物がいなかったのにどうしてあれほどのことが出来たのか深く疑問に思っていた。博物館の学芸員に石組みと脳外科のことについて質問したが、その場での回答がなく、後日NHKから丁寧な回答があった。機会をみて現地で確かめたいと思って今回の旅行ツアーに参加した。最近、南米で5千年前に建造されたピラミットの遺品には武器が見当たらないという平和な社会のあったことが話題

になっている。砦に?をつけたのはスペインに犯される前には戦争がなかったと現地の通事が出ていたからである。

アマゾン河の上流のウルバンバ川に沿ってインカ帝国の中樞をなした遺跡や村々が残されている。巨石を思うところに剃刀の刃1枚も通らないようによくぞ収めたものだと感心させられる。それにしても素晴らしい仕事師がいたものである。マチュピチュの頂上には太陽の神殿やインティワタナ（太陽をつなぎ止める石）が置かれていて、夏至と冬至が正確に判る窓があり、太陽の位置を利用して暦を作成し、作物の栽培や収穫を占っていたと言われている。太陽により近い山頂は神聖な霊場として最適だったようだ。農作物は神殿の畑など耕作地で研究され、神への供物として栽培され、貯蔵されていたそうだ。高い場所には高い階級の人達があり、貴族、聖職者、技術者、庶民の居住区などに分けられ、ココ茶（ココインを採るココの葉の茶）や食料の安定供給などで階級社会が確立されていたようだ。

石組みの石に^{ほぞ}臍あり兜虫

インカ道いまも泉の湧きみたり

夏草やインカの叙事詩ケーナ聴く

高原の奥の奥なる雲の嶺

未曾有なり雷雨に崩るナスカの絵

雨量が年間数ミリというナスカの地に自分達がセスナに乗り込んだ2日前に大雨が降って展望台のおみやげ売店のところで30糎の水溜りが出来たと言っていた。砂漠に雨の流紋が残っており、地球の異変を目の当たりにして来た（写真）。

地球環境などをテーマにした旅を同窓会で計画しては如何なものだろうか。ペルーではドルと現地通貨をみて旅行がもっと格安に出来たと思う。旅行は目的をゴルフだの慰問だの観光だの多目的にしないで絞り込めば、ゴルフのしない人は安価に出来るはずである。



豪雨によるナスカ地上絵の流紋

ノーベル賞とポリアセチレンのこと

京谷 陸征（織工S38）

2008年の秋は、ノーベル賞受賞という夢と希望のある楽しいニュースで、不況下の日本を明るくした。ノーベル賞といえば、

工学部有機材料化学科のホームページにある同学科の概要紹介の中に以下のような文章がある。「私たちの回りには、プラスチック、フィルム、ゴム、繊維そして液晶、発光素子など様々な有機材料が使われています。白川先生がノーベル賞を受けた導電性ポリマーや超高性能エンジニアリングプラスチックなどちょっと目につきにくいところに使われている有機材料も少なくないのですが、有機材料の特徴の一つとして人間と直接接するところに使われることが多いということが挙げられます。これが他の二大材料～金属材料と無機材料～と異なる点でもあります」。それに続く説明文をよく読むと、在学中を「武蔵野の林と農地の中で一面に広がった桑畑に囲まれた長閑な西ヶ原寮」時代を過ごしたのにとって、同学科の内容の変わりようには隔世の感がある。これも時の流れなのかもしれない。

それはさておき、前記の学科の紹介文に記されているように、2000年のノーベル化学賞は白川英樹先生、A.G.MacDiarmid, A.J.Heegerの3人が受賞された。導電性高分子の発見と開発研究に対してである。白川先生の合成されたポリアセチレン（以下PAと記す）膜が電子受容体或は供与体等のドーパントを化学的ドーピングすることにより高い導電性を示すという発見が1977年J.C.S.Chem.Comm.誌に最初の論文が発表された。これを機に、国際的に多くの π 共役系導電性有機高分子の合成と物性の研究開発が急速に進展し、「Synthetic Metals」（合成金属）（Elsevier出版）という国際学術雑誌の発刊や国際学会（ICSM）が開催されるようになった。導電機構についても、固体物性論的な説明の試み（ソリトン或はポーラロン理論等）もなされるようになった。まさに分子エレクトロニクスの新しい時代の始まりと言った感じであった。

国内的に大きな出来事のひとつとして、1981～91年の10年間、「導電性高分子材料」研究開発プロジェクトが、次世代産業基盤技術研究開発制度・高機能性高分子材料研究開発の中の一つの大型国プロとして、当時の通産省の管轄で関係する企業・国研・大学（産官学）が参加して行われた。研究開発目標は「高い導電性を有し、加工容易で、金属とは異なる新機能を有する導電性高分子材料の開発」である。白川先生も推進委員の一人としてプロジェクトを指導された。余談だが、プロジェクトの成果次第では「電線が、銅から軽くて丈夫な有機高分子に変る、という画期的な事が起こるかもしれない」という「夢」が関係者の中で語られた。主要な結果としては、多くの新規共役系導電性高分子の合成法や 10^5 S/cm程度の銅に近い導電率を示すPA膜の開発等、ほぼ目標に近い成果が得られた。また、その後の進展で電池電極材料やデバイスの一部等としてポリピロール、ポリアニリン等が実用化されている。しかし、残念ながら前記の「夢」はまだ夢のままである。

ノーベル賞受賞のきっかけになり、導電性有機高分子の元祖とも言えるPAは、前記のプロジェクトの成果等もあり、合成と物性の両面で研究は大きく進展しているが、残念ながら、いまだに実用化していない。実用化の試みがあつた、と言うのが正確かも。殆どの共役系導電性高分子は、 π 電子の関係で、分子内に環状構造（5員環又は6員環）を含んでおり、比較的大気中で安定である。一方、PAは単純な線状のポリエーテル鎖であるため、大気中で化学的に非常に不安定で、PA膜は数日で劣化し、脆くなる。その点が実用化を困難にしている。

しかしながら、この大気中で化学的に安定にするという課題に関しては、ごく最近、PA膜のまま脱水素化反応を行い、炭素化することにより、大気中で安定な膜の形成が可能になった。この炭素化膜は、元々PAに含まれる炭素元素（92.3wt%）の9割以上から成り、非常に効率的な炭素化である。しかも、この炭素化単体は、高温での熱処理により、グラファイト化も可能である。これにより、以下に述べるようなPA膜に存在するナノサイズを含めた種々の高次構造をそのまま保持した機能性炭素化膜が得られる。この結果はNature Materials誌（2008.9月）のResearch Highlights欄でも紹介された。この炭素化膜は、各種デバイス、電池電極材料、ガス吸着剤、フィルター、触媒担体等への応用が可能である。

研究対象としては、PAは大変面白く、謎の多いブラックボックスのような不思議な高分子である。有機高分子半導体のなかでは、PAは比較的容易に、分子配向した膜を形成しやすい。配向膜の主鎖方向の引張弾性率及び強度（窒素雰囲気での測定）はケブラー繊維に匹敵する値を示し、非常に丈夫である。当然の事ながら、配向膜は異方的導電性を示し、配向方向の電導度が非常に高い。合成は比較的簡単で、アセチレンガスから触媒を用いて短時間で、白川タイプのPA膜が得られる。常圧では熔融も溶解もしない。従って、分子量の測定が困難であり、成形加工も出来ない。PA膜の高次構造は合成段階で決まる。PA膜は、高度に配向結晶化した太さがナノメートルサイズのフィブリル（ナノフィブリル）から成り、触媒溶媒に依存して、ナノフィブリルの凝集状態の制御が可能である。ネマチック液晶を触媒溶媒とした場合、全てのナノフィブリルが特定方向に水平配向した配向PA膜や垂直に配向した垂直配向PA膜が得られる。さらに最近では、キラルネマチック（コレステリック）液晶を触媒溶媒として、ラセン状に捻じれたナノフィブリルの束が、直径が数十 μm 程度の同心円的渦巻（巨視的なイメージとしては、紡績糸がなるとまきのように渦巻状になったもの）を形成した階層的高次構造から成るヘリカルPA膜の合成も可能となった。ヘリカルPA膜のユニークな構造を示す電顕写真は多くの人の注目を引いており、いくつかの学術雑誌の表紙を飾った。この特徴的なヘリカル構造は、ナノフィブリル1本の電子物性も含めて、新規な電磁気的性質等を示す可能性があり、ナノテクノロジー時代の興味ある機能性高分子のひとつかもしれない。

ということで、導電性高分子のモデル物質としてのPAはMaterials Scienceの研究対象にも成り得る非常に興味のある高分子であるが、残念ながら、現在、実用化されていない、又は出来ない。そのこともあり、研究する人も極めて少ない。それでも、いつかは誰かが何かの機会に、PA膜のままで、目に見えるところに使われるようにする夢を実現するかもしれない。

木材のJAS格付検査業務に携わって

白井 久 (林学S44)

今、食の安心・安全が叫ばれている中、食品表示に係る漬け物、削り節、たけのこ水煮などJAS（日本農林規格）に関係する不適正表示事件が最近、報道されています。

JAS規格制度は、個々の規格で定められた品質と表示に基

づいた格付け（検査）に合格した製品にJASマークをつけることができます。

加工食品や木質建材等の品質と表示について定められたJAS法は正式には「農林物資の規格化及び品質表示の適正化に関する法律（昭和25年法律第175号）」といい、この法律の目的は第1条に、「この法律は適正かつ合理的な農林物資の規格を制定し、これを普及させることによって、農林物資の品質の改善を図るとともに、農林物資の品質に関する適正な表示を行わせることによって、一般消費者の選択に資し、もって公共の福祉の増進に寄与することを目的とする」とあります。

商品表示に関しては別に不正競争防止法（平成5年法律第47号）があり、この法律は、事業者間の公正な競争及びこれに関する国際約束の的確な実施を確保するため、不正競争の防止及び不正競争に係る損害賠償に関する措置等を講じ、もって国民経済の健全な発展に寄与することを目的として制定されました。

一方、食ばかりでなく住の方でも、JAS法関係ではありませんが、2005年11月に姉齒元一級建築士による全国のマンション・ホテルなど99棟が関係する耐震強度構造計算書偽装事件が発覚し、行政、民間検査機関、建築業界等の信頼性を損ねました。

そのため、2007年6月に「改正建築基準法」、2008年11月に「改正建築士法」がそれぞれ施行され、2009年10月には建設業者が倒産しても住宅を購入した消費者を保険で保護するための「特定住宅瑕疵担保責任の履行の確保等に関する法律」が施行されます。この事件は、木材業界や建築業界に木材消費量と新築住宅着工戸数の大幅減という大変大きな影響を与えました。

建築基準法で4号建築物という通常の木造2階建以下の住宅は、特例措置で現在、構造計算は省略されていますが、その見直し時期は現在のところ未定ですが、いずれ国交省で検討されるかもしれません。

一般消費者は安心で安全な製品や品質を求め、食品はもちろん建築資材に対しても品質の確保を強く求めるようになりました。これから強度や品質が明確な木材の製品に対するニーズがさらに高まることは必至です。

木材の強度や品質が明確なJAS製材品は、平成17年6月22日に改正されたJAS法により平成21年2月末までは（社）全国木材組合連合会が認定したJAS認定工場の製材品について、県木連など登録格付機関がJAS格付検査を行い、JASマークを貼付していました。平成20年3月末現在、全国にJAS認定工場がAタイプ48工場、Bタイプ457工場あり、そのうち埼玉県には、Aタイプという工場内にJAS関係の資格者が3名以上いて会社独自でJAS格付ができるところが2工場、Bタイプという県木連などが2か月ごとに定期的に格付検査するところが3工場あります。また、JAS検査員は、全国に100人ほどいます。

JAS法の経過措置期間が平成21年2月末で切れ、3月1日からは登録認定機関：有限責任中間法人全国木材検査・研究協会が認定した工場だけが、JASマークを付して出荷することができます。

私は、昭和44年3月に農学部林学科を卒業し、埼玉県庁に入りました。38年間勤めて、退職後の平成19年4月から県下の木材関係団体に再就職しました。それまでは、最後の3年間で森林・緑化研究所におりましたので、木材のJASのことを多少は知っていました。

JAS検査員になるには全国木材組合連合会、木材検査協会

が実施する講習会を受ける必要があります。私も、平成19年6月に講習会に出席しました。わずか2日間の日程でしたが、中身の濃い講習会でJAS検査の際に必要な、農林物資の規格化及び品質表示の適正化に関する法律、製材の品質管理、針葉樹の構造用製材規格、造作・下地・広葉樹製材の規格、木材保存、枠組壁工法構造用製材規格、乾燥・強度、格付方法及び認定制度、その他検査業務に必要な事項、具体的な節の測定方法など多岐にわたって受けました。最終日には筆記試験もあり、無事終了して後日修了証が送られてきました。

格付検査の内容ですが、工場ごとに少し違って、A工場ではスギの柱材(10.5×10.5×3,000cm)が主で、抽出で10本選び、1本ごとに長さ、幅、高さをメジャーやノギスで測定します。この柱材は、すでにグレーディングマシーンという高価な機械で含水率と強度(曲げヤング係数)が測定されており、強度の強さによってE70、E90、E110(数字が大きいほど強度がある)などの表示が印字され、機械から流れ作業で出てきます。なお、強度については再度、現地で検査します。印字された材のうち5本を抽出して、1本ずつ20kgと100kgの重量をかけて、たわみ量を測定し、その測定値によって強度を計算します。含水率については、柱の端から30cmのところ幅2cmくらいにカットした試験片10枚を事務所に持ち帰り、始めに重量を測定します。そのあと冷蔵庫くらいの大きさの電気乾燥器で6時間以上乾燥させ、乾燥後、乾燥器から取り出して再度重量を測定し、最初に測った重量との差で含水率を計算します。検査結果については、速やかに工場側に報告します。

また、B工場は、外材(マツ類など)が専門の2×4(ツーバイフォー)の工場です。板材ですから強度は測定しませんが、抽出した80枚の節の大きさ、割れ、ねじれ、丸みなどを見て基準にあっているかどうか判断します。次に10本を取り出して長さ、幅、厚さを測定し、簡易含水率計で1枚ずつ材の表裏の含水率を測定します。そのあと試験片10枚を持ち帰り、先ほどと同じように電気乾燥器で乾燥させ、含水率を計算します。

また、C工場は外材(米ツガ、米ヒバ、ロシア材)で加工されたマンションなどの下地材、造作材をつくる工場です。部材は小さく強度は測定しません。目視による材料の検査や測定内容は2×4の工場と同じです。

以上、JAS製材品は厳しい検査を合格した品質が保証された木材製品ですが、認定工場が全国的にも少ないことなどから、その流通量は木製品全体の20パーセント未満です。

私としてはJAS製材品の良さをPRして、より多く皆様に安心して使っていただくよう今後も努力してまいりたいと考えております。

松本での100年の蚕糸研究を終えて

高林 千幸 (製糸S48)

はじめに

独立行政法人農業生物資源研究所は、つくばにその本所があり、蚕糸部門の支所として北杜地区(小淵沢)に蚕の原蚕種を保存・研究する基礎研究領域ジーンバンク、松本地区及び岡谷地区に生活資材開発ユニットがありましたが、平成21年

3月31日をもって、松本地区が閉所となりつくばの本所に統合となりました。

本報では、100年の長きに亘り蚕の研究を行ってきた同研究所生活資材開発ユニット松本地区の開設経緯と、そこで行ってきた研究内容について紹介します。

1. 開設経緯

日本の近代化は、明治初期から、大正、昭和にかけて蚕糸業によって発展しました。そのきっかけとなったのは安政6年(1859)の横浜開港で、第二次世界大戦の復興期まで生糸は輸出の太宗を占め、外貨の稼ぎ頭として大正12年(1923)の関東大震災や戦災で打撃を受けた経済や国民の生活を支えてきました。

この蚕糸業の技術的向上を図るために、明治17年(1884)に蚕業教育の最高学府として東京農工大学の前身である東京蚕業講習所が設立されました。そのころの養蚕は春繭が中心で年1回の飼育でしたが、農家の現金収入の向上、施設の有効利用、生糸の生産量の増加により夏秋蚕飼育が年々盛んになりました。しかし、蚕種の保護、栽桑、飼育法の試験研究が少なく不作が続き、繭糸質の劣る状態が続いていました。

このような情勢の中で、長野県内4郡の蚕種同業組合長が集まり、「国立夏秋蚕専門講習所」の設立を求め、地元の代議士等を通じた政府への強い働きかけにより、明治41年(1908)東京蚕業講習所夏秋蚕部が、松本市からの用地の寄付等地元の強い支援によって設置されました。その後、原蚕種製造所松本支所、蚕業試験場松本支所、・・・、蚕糸試験場松本支場、同中部支場、蚕糸・昆虫農業技術研究所松本支所、農業生物資源研究所へと名称を変えましたが、一貫して蚕糸研究を続けてきました。農林水産省が管轄する研究機関において同一場所で100年間続いたところは少なく、蚕糸部門では松本が長く続いた唯一の機関となります。

2. 研究成果

設立当初はその名称が講習所と呼ばれていたように、養蚕現場に直結した研究や指導が行われていました。その当時(1906)、外山亀太郎博士によって、メンデルの法則を蚕でも実証し、一代交雑種の優秀性が提唱されました。これを片倉組の今井五介らの努力により養蚕農家に普及され、当時その要請に応えるため、蚕種保護、催青、雄雌鑑別の試験が行われてきました。

昭和に入ってから、X線照射による突然変異の研究、病理学、遺伝学、生理学、発生学など基礎研究も幅広く行われるようになり、優良蚕品種の育成、効率良く雌雄鑑別のできる限性品種の育成や人工飼料による周年飼育システム、超省力養蚕システムの開発などが行われてきました。平成に入り、桑以外の飼料を食べる広食性品種、細織度品種、セリシン繭など特徴ある蚕品種の育成が行われ、実用に供されてきました。おわりに

今年は横浜開港150周年に当たります。その間、わが国の蚕糸研究は常に世界をリードしてきました。松本における試験研究活動はその内の2/3に当たります。最近では科学技術の進歩は目覚ましく、蚕において遺伝子組換えによる形質転換が可能になり遺伝子の集合体であるゲノム配列が完全に解読されました。松本での基礎、応用、実用化研究は、新しい技術と融合し、さらに進化・発展していくことが期待されています。

環境科学と私

上本 道久 (環保院 S57)

私は1980年に、当時の農学部環境保護学科を4期生として卒業しました。卒業後約30年経った現在に至るまでの私の歩みを少し書き綴ってみたいと思います。京都の生まれ育ちで関東地方にはまるで縁のなかった私が、真新しい農学部五号館（環保の研究棟）を目にしたのは1976年の春のことでした。

1973年に新設された環境保護学科は当時斬新であり、全国から関心を持った仲間が集まっていて、農工大では異色の存在だったように思います。例えば農学部ですがアウトドアの実習と言えば農場や演習林ではなく森林や河川敷でした。現在は温暖化対策や循環型社会構築など地球規模での環境問題は万人の知るところですが、当時は公害としての比較的ローカルな問題の解決が主流で、環境保護学科の構想はもしかしたら時代の先を進んでいたのかもしれない。

卒業生がまだ居ない新しい学科に入った我々は、学科のプレゼンスと自分達の将来像の手がかりを求めて、歳の近い先輩・後輩達と共に、日々悩み議論を続けておりました。発言を録音・起稿して学科新聞にくださる先輩もいました。その際に「我々は興味と適性に応じて、研究・行政・教育の3分野に進んで行こう。それぞれの道で地道に専門性を高め、ある程度の年齢になって somebody になれたら、環境科学の素養を生かして皆で花を開かせようではないか。」という意味のことを話し合ったように記憶しています。今思えば汗顔の至りですが、振り返ってみれば若い血気の為せる技としては忘れられないエピソードでありました。私は入学当初から自然科学の研究路線で行くことを意識していましたが、学部の数年間で元素の毒性や挙動に関心を持ち、研究者として生きるためにその基礎を深く極めたいとの思いもあって、無機化学、特に電解質水溶液の物性という基礎化学領域に足を踏み入れました。当時の一般教育部化学教室にお世話になり、指導教授にも恵まれて修士課程を修了し、当時は博士課程がなかったため他大学理学部で博士課程を修了しました。ポスドク時代は理研の物性物理系研究室に居て、磁気が生体に及ぼす影響という、化学と縁のない現実的なテーマに取り組みましたが、その経験が後日大いに役立ったことは言うまでもありません。現職場（都立産業技術研究センター）では無機分析化学の研究室で、原子スペクトル分析や原子質量分析を基本とした、工業材料の主成分～極微量成分元素の定量方法の開発と標準化の仕事に20余年取り組んできました。五十路を過ぎて少し来し方を振り返ってみて、やはり環境科学のトピックスは今までの仕事にちりばめられていたように感じ入ります。「缶から飲料への極微量アルミニウムの溶出」「リサイクル鋼の加工特性改善のための微量元素の添加」「溶液中での高活性チタン化合物の作成」「鉛フリー・カドミウムフリー接合材料の開発と評価」など、要請を受けて産業界と大学と連携して共同研究を進めてきましたが、環境科学をいつもバックグラウンドとして意識していたように感じています。これからは金属製品の循環利用に向けたプロジェクトにも関わりますが、そろそろ、若い頃議論したところの、それぞれの分野で活躍されている同窓生の方々に、環境科学（環境学？）への思いと展望をお聞きしてみたいと願っているところです。

非常勤講師を10年ほど前に辞してから府中に行くことも少なくなり、忙しさも相まって農工大から次第に足が遠のいておりましたが、拙稿の作成に当たり、頭の中に環境保護学科での日々がしっかりと刻まれていたことに改めて驚きました。2年次に9日間、全員で湯の丸荘での実習に明け暮れた（朝は3時半起床でした）ことや、3年次の平日は毎日夜間まで実習であったこと、土曜日午後の特論では授業後も講師の先生と遅くまで議論を重ねたこと、などが懐かしく思い出されます。勿論、上述の通り図書館のセミナー室で「我々は何者か」と議論し続けた日々は至宝でありましょう。そうは言っても脇目も振らずに学究に勤しんでいたわけではなく、寮生として痛飲の日々も少なからずありました。いろいろな方にお世話になった、無我夢中の学部生時代であったと思っています。

若い方々に、私の牛歩の如き歩みを通して、黎明期の学科の雰囲気など感じていただければと思います、恥ずかしながら筆をたたためました。大きく発展を続ける農工大を卒業生として誇らしく思います。益々の発展を祈念しております。

鳥取県における健康食品並びにバイオ産業への取り組み

野口 誠 (工化院 S54)

鳥取県の農工大同窓会は約40人で、西尾会長（元鳥取県知事）を中心に毎年10人前後の参加者で懇親を深めています。

私は、農工大を卒業後、鳥取県に帰り、今年で30年になります。そのほとんどが鳥取県産業技術センター勤務で発酵食品、健康食品などの技術開発を行ってきました。近年では、健康食品の機能評価に遺伝子組換え細胞系を使用して食品の研究を行っています。昨年からは、鳥取県庁内でバイオ産業を鳥取県に集積するための企画をしているところです。鳥取県では、バイオや健康食品の産業が育ちつつありますので、その研究開発の状況などを紹介します。

鳥取県の健康食品に関連する産業は、昭和55年ごろからクロレラやローヤルゼリーの健康食品販売から業績を伸ばしてきましたが、昭和60年代になり、境港漁港で水揚げされるカニの加工品で廃棄されていたカニ殻の研究開発が盛んになりました。カニ殻にはキチン・キトサンという成分があり、この素材の製造が本格化しました。最近になって、キトサンを分解して作られるグルコサミンが、動物の変形性関節症の改善に役立つことが確認され、犬などでの歩行改善にも使用されるようになってきています。実際にウサギなどの実験では、軟骨成分であるプロテオグリカンという成分がグルコサミンの摂取で作られることが示されています。現在、健康食品としてかなりの販売があり、カニ殻の原料確保が必要な状況になっています。

鳥取県でもう一つ伸びている素材としては、魚のウロコから取り出すコラーゲン（フィッシュコラーゲン）の生産があります。コラーゲン（分子量約30万のタンパク質）は、皮膚のはりを保つ成分として重要であることから、飲料や化粧品に配合されています。このコラーゲンは、平成10年ごろから製造、販売額が伸び、全国的にも鳥取県の知名度が確立した感があります。ウロコの中のコラーゲンは、簡単には抽出できなかったのですが、研究開発により、ほぼ完全に分解して

取り出すことが出来るようになりました。このコラーゲン分解物は低分子コラーゲンとして研究開発が進み、動物実験では分子量が3000以下であると経口摂取で血中アミノ酸がよく増えることが確認されています。コラーゲンのアミノ酸は、グリシンとかアラニンという成分が多いのですが、コラーゲンを食べることによる血中アミノ酸は、コラーゲン成分以外のアミノ酸もかなり増えるようです。全体的に、新陳代謝があがるのが想定されます。

また、コラーゲンは、生体内では、3次元構造をとっています。ウロコの中からこの構造を保ったコラーゲンを抽出することは非常に難しいのですが、鳥取県ではこの抽出技術の開発で特許出願を行っています。今後、化粧品や細胞培養などの素材として期待されています。

また、海藻のねばねば成分であるフコイダンの生産も平成10年以降に盛んになってきました。海藻に対する研究開発が産学官で行われ、抗菌性や抗腫瘍性の研究が行われています。

その他にも、魚の稚魚にはビタミンDに変換する成分が多く含まれていることやコーヒー中の成分で痴呆改善の研究が行われているトリゴネリンの保持についても県内企業と一緒に研究し、商品化を行っています。

産学官での研究開発は、鳥取県西部を中心とした経済産業省委託事業である都市エリア産学官連携促進事業で行われ、水産物素材の抽出技術や健康への関わりについての研究を行っています。

さらに、この事業では、遺伝子組換えによるマウス（ねずみ）の作成を行っています。鳥取大学が持っている技術を使って、人の肝臓の代謝がマウスで再現できる遺伝子組換えマウスを作っています。このマウスは、遺伝子を大量に運ぶことができるHACという染色体ベクターを使って人とマウスの肝臓遺伝子を置き換えています。このマウスは、医薬品の副作用や安全性評価に利用ができるため、その価値が高まっています。鳥取県には、今までバイオの産業がなかったため、この染色体技術を鳥取県の産業として発展させるために、鳥取県内外の企業と共同で研究開発ができるような拠点作りを進めています。

研究開発や産業支援をととして、鳥取県でバイオ、健康食品産業がさらに発展することを願っているところです。

落研から自立し優勝

横田 堯 (林産S44)

昭和40年4月入学した入部希望者は驚いた。キャンパスに体育館がない！しかもテニスコートの脇を、ローラーを引っ張ってから練習する上級生はなんと皆さん落語研究会所属だとか。その面々、昼はグラウンド、夜は薄暗い部室で、「ときにハツァンや」を競っていたらしい。高校で培った華やかな競技に燃えた新入生は悄然とし、筆者ら新宿高校OBはこうした地道な活動を強いられていたローラー部員からの勧誘に対し斜に構えてしまった。これには部員不足で、当時隆盛していた落語研究会に身を寄せ、お家再興への活動していた先輩たちがガックリ。生意気な奴が入部するのは許せん。

止むを得ず勝負より人の輪を訴求した浦本昌義氏がリードす

る東京農工大学バスケットボール部がそこにあった。木原教道氏ら先輩の矛先は筆者の盟友仁平信に集中したが、母校出身で活躍された戸塚育甫先輩の顔と、筆者がまず恭順を示したことで、偶然ライバルの戸山高校から入部した一蝶彬を加えた浪人トリオが入部を許された。

この年農工大は関東大学連盟とは別な関東学生連盟に属しており、私たち1年生は奮闘するも、予定の中から一人遅刻すれば不戦敗などの状況で、一番下の6部の最下位争いを演じた。後のキャプテン伊藤武男氏、落研の角辻靖彦氏が孤軍奮闘された。

しかし神は悪戯である。昭和41年からなぜここへ？というような選手が、弱い部に半信半疑で続々入部。その頃には都立西高校の体育館などを借りての活動が始まっていたので、彼らが大きくひねくれることなく定着してくれた。加えて落研の中村益次郎師匠の高座に聞き惚れたり、合宿では落語ネタを学ぶアカデミックな部活動が魅力であった。そうした高級な笑いにしばし浸った連中がついにお家再興に動く。

浪人トリオで一番無難な筆者が次期キャプテンを命ぜられ、トリオが実権を握ったのである。この時代なんと言っても練習後の安酒に預かれることが魅力だったと後輩が語る。つまりバイトの金で同期や後輩を釣ったのである。浦本氏がコーチを引き受けてくださり、新妻胤和君の才を買ってマネージャーを頼み運営体制ができた。ひ弱なキャプテンの弱さを豪傑仁平がカバーし、部員の苦情は話好き一蝶が癒してくれた。

前年から関東大学リーグは新旧一本化され、オリンピック選手を産む大学から、競技の知名度は名馬「幸早号」のいた馬術部だけの農工大までが自由競争に並んだ。その4部はオープンで4つのブロックに分かれたリーグ戦と、そこを勝ち抜いたチームの決勝リーグで、2年間だけ上位2チームは入れ替え戦なしで3部のBに昇格といった制度。「この機会を逃すな」の使命を帯びた我々の合宿は凄惨を極めた。

春の合宿は茨城県の北浦。チームに残りなければアルバイトを捨てて参加。禁酒、麻雀禁止。こういうキャプテンの指令で集まった初日の練習後、もうジャラジャラと牌が鳴る。

我れ先に風呂に先に入ろうとキャプテン自ら宿への近道を辿るも、沢ひとつ間違えてほぼ遭難、しかし誰も不在に気づかない。こうした体たらくに在京のコーチは笑う。いや嘆く。

夏の合宿は愛知県岡崎市。汚名返上！一年前とは様変わりの部員数を頼り、数名が離脱するような激しい練習をしてこい！こう浦本氏に見送られ筆者は狂った。所用で2日練習を抜けた部員が戻り、練習を見て「怖い」と去って行ったほど。

また健康を害しお粥に頼る者も出た。そこへもって宿舎の荒井山九品院さんで出るのは9品ではなく精進料理。さすがにディナーは自由にと東岡崎駅前に解放されたが、農工大学は貧困でも市民権を獲得したい者の大学？栄養を付ける金もない。合宿終了の記念撮影は全員ガリガリ。

その結果は農工大史上自ら“最強軍団”と言いのけるチームに仕上がった。

それは少し変わった1、2年生中心の攻撃的ゾーンディフェンスのチームだった。フォワードの身長なのに垂直跳びでリングに触れる田村年夫173cmと須崎文夫175cmにゴール下を託せたので、俊敏な180cm台の右近憲一と松岡陽一が大手を広げて前に立ちはだかることができた。これでフォワードの高さ

としては当時一流のチームになった。ガード役には沈着な河津邦雄、跳ね回る宇治原健二がいたが、高校時代シューターで鳴らした笹沼芳美を多用。いわば一人で一試合に得点力に頼った布陣。事実日替わりで誰かが30点をもぎ取ったものだ。浪人トリオや同期の柳原義信、小柳好弘、大学から始め一番頑張った西村博らは自動的に控えに回るが、要所所で曲者ぶりを発揮。精神面での繋ぎ役にも必要となった。勿論スタートメンバー全員が好調であるわけがなく、酒臭かったり金欠で参加できない日などはスタートから交代勤務。

これらメンバーを差し置いて有名だったのは長身ゆえ勧誘された192cmの永田健二。長身者対策を求め格上の埼玉大学が試合を申し込んで来たほど。この日は別の大学にも招待され、チームを2分して対応、一勝一敗だった。

さて注目の予選リーグ戦が始まる直前、エースゲッター右近を捻挫で欠く大ピンチ。しかしこれが結束をもたらす効果に切り替わる。また学業優先バイト最優先の部の悲哀、元々数少ない練習ボールを持った部員が試合開始まで間に合わない日は、ランニングジャンプショーを披露。次々にリングに飛びつく姿で敵の戦意を消失させたものだ。こうしてダークホースNOKOが予選を制した。

全員揃った決勝リーグでは、一試合ごとに凄みを増し、東洋大学、東海大学、当時強かった自由学園を撃破、ついに東京農工大学は24校の頂点に立った。日本ダービーでは伏兵アサデンコウが勝ち抜いた年であった。振り返ると不思議なくらいに体が動いた覚えがある。自分のすべてがチームに集中していたからかもしれない。

優勝の味、それは無言で歩いた神田の坂。仁平から「横。どうした、呑んで行かんか」の声が掛るまでは放心状態だった。高校でも先輩の戸塚育甫氏も喜んでくださった。

翌年の開会式に招かれた各部優勝校の中でお揃いのジャージを着ていなかったのは農工だけ。そして体育館もないという異例の星が輝いた歴史だった。

このチームは関東理工系リーグ戦を勝ち抜き、大学選手権で優勝を争っていた芝浦工大と決勝戦を戦い、また繊維系三大学対抗戦ではオリンピック会場を舞台に優勝、上田市遠征でも連覇を成し遂げる記録を残している。

この勢いが残したのも。それは女子マネージャーの志願があったこと。荒木恵美子さんだったが女子部の姿はまだまだ先。もうひとつは農学部内に燦然と輝く体育館である。

農工大に体育館の予算が付くといった情報に対し、体育館の管理運営権を主張した学生自治会が、「意見が通らなければ予算を返上したい」と言う。3年間体育館を借りて頭を下げて歩いたキャプテンとしては、待望の我が家。大衆団交を要求する集いに割って入り、体育系学生の悲願を訴え、民主的な学生にお引き取り願った。この体育館にOB会で始めて足を踏み入れたとき、入学のときローラーを引いていらした小松原洋司氏、飯塚克明氏、松本俊吾氏、岡山和男氏、永松晴之氏、高橋建尋氏らおひとりずつの表情を思い出した。

それから37年、最強軍団を核にしたチームがシニアバスケットの東京代表を務めたが、往年のパワーは時の流れに身を任せ、封印されたままだった。

バスケの現役はクラブを絶やさず頑張っているらしい。落研はいまどうなっているのだろうか？

和牛と巡り会っての大動物臨床20年

堀 俊明 (獣医S52)

私は卒業後乳業会社に勤務の後、郷里の新潟県に戻り、大動物臨床の開業獣医師として働いています。帰郷当初に臨床の仕事だけではと思い、牛の受精卵移植に取り組みました。まだこの地域では普及しておらず、自ら採卵牛(受精卵を取り出す牛)を導入し、畜産農家に実践してこの技術の有用性を見せることから始めなければならぬ状況でした。この努力は早期に報われ、公的機関と酪農家、肥育農家などで組織的に取り組む体制が整いました。その様な環境下で優良な形質の乳牛と和牛(黒毛和種)の生産が始まったのですが、当時は受精卵の性別別技術が利用できず、雌を求める乳用種ではリスクが高く、雌雄のリスクの少ない乳牛を借り腹とした和牛生産が主流となりました。

私の所有する採卵用和牛は優良形質でなく、もっと優れたものでやりたかったことと組織的管理も必要と考え、数名の酪農家と和牛農家の有志と共にはまなす会という小組織を別に結成し、岩手県と岐阜県から優良な採卵用和牛を導入しました。当時の私は和牛のことを全く知らず、同行した和牛農家の人に教えてもらいながら市場巡りをしました。その時に岩手県の子牛市場で出会ったのが「ふくのりひめ」(写真)という雌の和牛です。この牛は被毛皮質柔らかで、約500頭上場されていた中で素人の私でも引きつけられるようなひときわ目立つお姫様のような子牛でした。立ち会った全会員がこの牛しかないと出費の多さは覚悟で決断し、導入しました。当時この雌牛の系統牛が県内や全国レベルの枝肉共励会で数々入賞し、日本一も制することなど誰も想像してはいませんでした。導入後一時も早く子牛を生産しなければと思い、12ヶ月齢から採卵を開始し、受精卵移植を利用した系統増殖が始まりました。

はまなす会は肥育は行わず、繁殖牛管理、子牛育成、技術部門に分業し、受精卵移植により子牛を生産し、市場で販売する形態で運営されました。市場に上場した子牛は当初から管内の和牛農家が注目して購入されることが多く、雄(去勢)は肥育され、雌は殆どが採卵用繁殖牛として利用されました。良好な肥育の結果が出ると共に繁殖意欲が高まり、管外にも雌が流出し、広く県内でこの系統の増殖が盛んになり、ふくのりひめの名前も県内の和牛農家の中で有名となりました。

また、直系の舞福という種雄牛もはまなす会で生産し、県内で利用され、高い育種価を得ています。舞福と全兄弟(父母が同じ)の雄牛も4頭生産しましたが、いずれも病因遺伝子保有のため種雄としては利用できませんでした。他の系統牛では4頭が家畜改良事業団の種雄候補牛となりましたが、2頭は検定落ちし、優良な種雄牛生産の難しさを痛感しています。

ふくのりひめは平成16年に13歳で死亡しました。死亡原因は前肢の骨折治療中の熱射病でした。その年は猛暑の夏で、死亡当日は子供と映画館に入り、上映が始まった時に異変の連絡が入りました。急いで駆けつけると、すでに息絶えたふくのりひめが横たわっていました。茫然とする中で気を取り直し、最後の体外受精卵を作製するため卵巣を取り出しました。この暑い夏の一日は私の記憶の中に鮮明に残りました。

いつかは来る日と覚悟はしていたのですが、安らかな死に顔を見て、と畜場に送らずに最後を見届けられたことは幸いと思っています。ふくのりひめは分娩は1度しかせず、採卵にあけくれた生涯でしたが、この間に約60頭の子牛を残し、凍結受精卵としても保存されています。後半は慢性子宮疾患のため通常の採卵ができず、県の畜産試験場に依頼し、生体から卵子を取り出し、体外授精により受精卵を作製しました。

そして今年の5月、はまなす会所有の雌の第1子も16歳で死亡し、一つの節目を過ぎたとの思いです。ふくのりひめは私の仕事の中に数々の思い出を残してくれました。そしてこの出会いが私のこれまでの仕事の中で大きなインパクトになりました。これからは、残された忘れ形見と共に新たな気持ちで仕事を続けていきたいと思っています。



「大きな問題も毎日の一歩から」と子どもに話すわたしは

福澤 徳穂 (植防S55)

昨年、この欄に投稿させていただいて、はや1年が経とうとしています。この間、安部先生の退官記念パーティーに出席させていただいて、懐かしいやらちょっと寂しいやらの時間を過ごさせていただいたりしました。

私の勤務する横浜市立芹が谷中学校には「学校林」が在ります。約50年来放置され、若干の野外炊飯施設があって、細々と管理されています。そんな管理にも学校現場としては莫大な予算を必要としているようです。そして、相当昔に伐採されるべきであったはずの大木が、堂々と、立ち並んでいます。ここでの有益な活動のすべはないか。これが、私のやりたい環境教育のひとつです。それなりの規模のある緑地は、その持ち主の方のご理解とさまざまなボランティアの方々の努力などにより管理と活用の運営がなされていますが、学校用地や病院などの公共施設の端にある小さな緑地は放置され、ややもすると不法投棄の温床となってしまっています。都会の緑は危機に瀕しているのです。在るだけで、街の二酸化炭素と熱を吸収する緑地を維持するためにはどうしたらよいのでしょうか。

本年度、エネルギー環境教育情報センター主催の講習会に参加しました。横浜市中区根岸にある新日本石油株式会社の根岸製油所を見学した後、同社の環境教育を担当されているチーフスタッフの工学博士 杉浦出氏の講義をお聞きしました。

社会が依存する石油。二酸化炭素を出してやまない石油。その石油を生業とする会社の、しかし、その責任をどう果たしていくかという心意気的一端にふれる講義でした。

講義の後、今後の環境教育のあり方などを参加者で話し合いました。杉浦氏を中心とするチームがどのような形で環境教育を進めていけばよいか、アイデアを出し合っていて欲しいようでした。

講義の中で紹介された環境教育の形は、杉浦氏を中心としたグループが各学校を訪問し、学級(40名)や学年(100名程度)単位にプレゼンテーションや実験の演示をしながら進めていくもので、エネルギー供給の面から考える環境教育入門といった感じのものでした。小学生には理論的に難しいのではないかという意見もありましたが、エネルギーを使う側からの環境教育としてはそれなりに感心させられることが多かったのです。

私が夢見ているのは「都会に森を」

都会の土地は有効活用がなされなければならないという負荷がかかっています。二酸化炭素を吸収する光合成をする森を作ることが「有効活用」とならないか。それが今の私の夢なのです。

中学校で、今、職場体験が「キャリア教育」と称して導入されています。根岸製油所の見学では、プラントの見学は危険物を扱うということでバスに乗って行われました。当然よく管理されて、ほとんど働く人の姿は見えませんでした。このような見学の形では、職場体験にそぐわないのです。新日本石油では日本各地の山林を「エネオスの森」として管理する、ボランティア活動をしているという事でした。それなら、都会の緑地の保全活動を組み込んでもらえないか。工場の見学や、DVDによる企業活動の紹介と共に、研究室の一室で一緒に実験をしてもらったり、緑地の保全活動を一緒にしてもらったりするのは。1グループ4、5名単位で1日～3日の活動です。どうでしょう。

もし、都会の緑地が「土地の有効活用」であると認められ、その保全活動がカーボンオフセットとして具体的な価値を与えられれば、鬼に金棒。ではありませんか。

今勤める横浜市立芹が谷中学校の学校林は、木々が大きく、中学生ではなかなか手に負えないのです。「環境活動部」を立ち上げましたが、若干5名の生徒とあちこちの緑地に出かけ、ボランティアの方々の活動から学ぶことはないかと模索しています。

大きな問題もまず毎日の一歩から。なんて、生徒たちに言いながら。

恩田 秋夫

1924 - 2001

恩田 秋夫 (紡織 S22)

略歴 (おんだ あきお)

東京農工大学工学部紡織学科を卒業。

武蔵野美術大学本科西洋画科を修了後、油絵・木版画の制作に専念し、個展により作品を発表、また棟方志功の助手も務める。平成19年5月19日他界。

昨年に引き続き奥様のご好意により作品を掲載させて頂きました。



文政七年 秋夫

散芒 寒くなるのが目にみゆる 文政7年 (1824)



文政四年 秋夫

餅つきやせがむ子どもをはりあいに 文政4年 (1821)



そば所と人はいふ也赤蜻蛉 文化4年 (1807)

本学「広報大使」白石昌則さんからの寄稿

東京農工大学の
オリジナルクラッチバッグが欲しい

2004年9月頃このような学生さんの声が、生協にて品揃え等のご意見・ご要望を募る「ひとことカード」に投函されました。クラッチバッグとは、主に二つ折にして小脇に抱える使い方のビニール製バッグで、表側に大学名や校章が施されていることが多く、それぞれ異なる大学に通われる学生さん同士で交換し合うことが流行り始めていたのです。それを受け私ども生協は、ご意見を寄せていただいた学生さんグループ達と企画立案し、バッグのデザインを学生さんから募集。寄せられた60余りものバラエティ豊かな候補作を掲示し、人気投票にかけました。上位作品を表彰するとともに、入賞者には景品を贈呈、さらに最優秀作品（人気1位）のものは商品化するというプロジェクトでした。

生協入口付近に掲示された、学生さん考案の数々のデザインはなかなか個性的でした。洗練されたものから荒削りなもの、実現化に向けてのスケジュールまで綿密に記されたものや、おおよそ製品化不可能（何故金箔？）なものまで、多種多様で飽きさせないエネルギーがほとばしっていたと思ひ起こされます。群雄割拠の中、見事人気投票にて1位を獲得したのは、デザインの斬新さが殊更に目を惹いた「牛柄」でした。

1位、おめでとう。表彰され、そして製品化され、日の目を見るはずの牛柄。しかしながら企画・制作側の生協側が、ここで二の足を踏みます。

「農工大のオリジナルグッズ、本当にこれで良いのか・・・」

生協は、クラッチバッグの典型的なモデルを知っています。プレーンな素地に、ノーブルかつクラシックな雰囲気醸し出す大学名のロゴ。アイデアを広く募っていながら、最終的にはこのような無難なデザインに、学生さんが考案したややラジカルなマークが加わることによってオリジナル感が演出されるような商品が生まれる結末を、当方はイメージしていたのかもしれませんが。

そんな制作側の没個人的事無かれ主義をあざ笑うかのような、牛柄の輝かしい得票数は2位に大差。そもそもこの牛柄、デザインのどこを見ても大学名が記載されていませんでした。更には言えば、折り畳んで使うことが前提のクラッチバッグ、他の候補作は二つ折した際の表面にのみデザインが施されているのに対し、牛柄は表・裏区別なく一面デザイン。製

作費や価格設定にも影を落とす「問題児」なのでした。

“この得票自体、冷やかしてではないのか。それは十分に有り得る。”等々、諸々の牛柄排斥ムードが漂い、それを踏まえ2位のデザイン（前述でいうところの「当局イメージ通り」のもの）を商品化し、1位の牛柄はきちんと1位として表彰した上で、製品化できない理由を公表することによりご理解いただこう、との結論に達しそうになりました。そうになると、何だかこのデザインが不憫にも思えてきました。その思いは他のスタッフも同様だったようで、総意として、「コストはかかるし、売れないかもしれない。しかし、オリジナルグッズ作成自体、お祭りみたいなものだし、いいじゃないか」という、1位なのに問題児扱いされたり同情されたり期待薄だったり、残念極まりない扱いのもとプロジェクトは進みました。

農工大グッズと判るよう、牛柄の白い部分に大学名の焼印を押す追加デザインのアイデアが学生スタッフから出され、約1ヶ月後、めでたく商品化され店頭陳列されたのです。すると、200枚入荷した牛柄バッグは3日足らずで完売。2位のデザインも同時に8色のカラーバリエーションで商品化されたのですが、1色モノトーンの牛柄が、8色束になっても尚10倍以上の販売数を叩き出し、正に面目躍如。と同時に、制作側の猛省が強く促される結果となりました。

売れるモノは、売る側ではなく、買う側が決めるもの。この原則を実体験により垣間見させていただいたのと同時に、あらためて学生さんの生み出すみずみずしい感性に敬意を表する次第でした。私ども販売側の生協は現在、モノトーンのみであった牛柄にピンクや水色のカラーバリエーションを追加販売したり、姉妹品としてブックカバーをも販売したりすることで、その敬意を更に深め表している真っ只中です。農工大に来られる際は、是非生協にもお立ち寄りいただき、そのリスペクトの様を皆様の目に焼き付けていただければ幸いに存じます。

退職のご挨拶

生物生産学科

有馬 泰紘

私は、1984年10月に助教授（農学部）として東京農工大学に赴任し、農学科の肥料学講座に配置されました。本年3月末日を以て定年退職し、24年半の農工大における教員活動を終了いたしました。この間、農学科・農学専攻は生物生産学科・生物生産学専攻に改組されましたので、私は、主に農学科・農学専攻と生物生産学科・生物生産学専攻(後に生物生産科学専攻)の学生さんたちの教育に携わりました。

私にとって、駒場農学校・駒場寮以来の伝統である「雲と自由の棲むところ」の趣が残る農学の府で教育研究に携われたことは、大変嬉しいことでした。教育と研究の場である大学にとって、誰もが自由闊達に見解を述べ異なる意見を戦わせることができる伝統ほど貴重なものはないと思います。同窓生の方々と現任教職員学生の方々の協力によって、優れた伝統が今後も受け継がれさらに発展してゆくことを心より願う次第です。

農工大の 学生万歳！ 卒業生万歳！ 農学万歳！ 長い間ありがとうございました。

応用生物科学科

多田 全宏（農化S43）

東京農工大学に教員として赴任いたしましたのは1977年10月ですから、31年6ヶ月間お世話になったことになります。

自分が定年になる時はどんな状態になるかは、若い頃には想像もつきませんでした。自分になってみると、以外に元気で、ボロボロでも、ガタガタでもないと思えるのは有難いと思っております。退職にあたりまして、これまでお世話になりました多くの方々に厚くお礼申し上げます。

赴任した頃は、研究環境はお世辞にも良いとはいえない状態で苦労しましたが、日本の国力の充実と共に次第に揃ってきて、21世紀に入った頃からは、農工大学の研究環境は急速に充実されたように思います。しかし、この頃から大学はあらゆる面からの評価を受けるようになり、毎日の教育・研究が楽しくなくなったと感じる大学教員が多くなった事も事実です。

本来、大学の先生は、企業の研究者よりは自由な発想と研究をすることが許されており、その中で誰も考えなかった事を思いつくことが期待されているはず。乱暴な言い方ですが、もっと評価ずれをして、我が道を行く先生が多く出る事が、本当の意味で大学の存在価値を高めるのではないかと思います。勿論、これは大学教員としての義務

まで果たさなくてよいと言っているわけではありません。

素晴らしい研究環境が整ったのですから、多くの先生方が評価などあまり気にせず、自分の自由な発想を大事にした教育・研究に取り組まれることを期待いたします。

最後になりましたが、東京農工大学の益々の発展を祈念いたします。

地域生態システム学科

加藤 誠（農工院S46）

昭和40年に農業生産工学科に入学以来、平成21年3月まで、43年の間、農工大に過ごさせて頂きました。気楽な学生時代から引き続き、昭和46年に教務職員として採用され、助手、助教授、教授とだんだん責任が重くなるにつれて、学生とその分、距離が離れていった様に思います。駆け出しの頃は、研究費が全くない状態でしたが、学生と一緒にあって、楽しい時間を過ごすことができました。法人化以降では、特に会議や各種の書類の対応などで忙しくなっていました。その間、日本の景気の盛衰があり、特にオイルショックなどの就職難の時にも、同窓の皆様の支援を受けまして、難なく就職問題をこなすことができました。このようなことが、卒業生と同窓生の交流を生み、それが「生産工」の伝統を醸し出すことができました。学科の合併、法人化などの大学改革の嵐は、少人数教育や良き伝統までも吹き飛ばしてしまいました。どうか、次に続く皆様には、「新しい生産工」の伝統を築いて頂きたい。

地域生態システム学科

久保田 穣

私は1976年5月に、当時の一般教育部の法学担当教員として採用され、その後、一般教育部の廃止による農工両学部の改組にともない、農学部に移籍しまして新設の地域生態システム学科に所属し、32年間余り農工大学に在職いたしました。

最初に所属した一般教育部は、たいへん和やかで自由な雰囲気職場で、私たち当時の若年の教員は、伸び伸びと教育研究にいそむことができました。今は学生部が入っております正門近くの旧一般教育部の文科系研究棟の研究室で、締め切り原稿などを抱えてたびたび徹夜をしたものです。

農学部に移籍してからは、専門教育を担当するとともに、

学部卒業論文及び修士論文の指導をすることになり、学生と密に接するなかで教師としての喜びを深く味わせていただきました。とりわけ、定年までの7、8年間は中国の様々な地域からの院生を受け入れることが続き、彼らの日本語論文の完成の手助けに日夜苦勞する一方で、中国についての興味・関心をかき立てられるなどして、たいへん楽しくかつ充実した日々を得させていただきました。農工大学で教育研究の仕事に従事できたことを、深く感謝しております。

地域生態システム学科

生原 喜久雄 (林学院 S43)

学生時代を本学の学部・修士で過ごし、昭和43年3月から群馬県にある農学部付属の草木・大谷山演習林に勤務。その後、林学科、環境・資源学科および地域生態システム学科で、造林学、森林土壌学、森林生態学に関する教育・研究に携わってまいりました。研究室の学生とは、林木栄養、溪流の水質形成、森林土壌での物質移動特性、森林生態系での養分循環に関する研究を、また留学生との海外調査など楽しく過ごすことができました。これも偏に先輩、同僚教員および卒業生のお陰と思っております。

本学同窓会に関しては、理事、常務理事および理事長として、微力でしたが、お手伝いすることができました。

学生生活を入れますと約半世紀を過ごす機会をいただいた本学に心から感謝すると共に、本学および同窓会の更なる発展を心から祈念しております。

獣医学科

山根 義久

鳥取県倉吉市という地方の田舎町より、見たこともない行ったこともない東京農工大学に着任してから月日の経つのは早いものです。すでに15年が過ぎてしまいました。一臨床家として開業していた私にとりましては、大学における教育の現場が如何なものか全く理解できないままの赴任でした。ほとんど研究、教育に携わっていなかった私が、大学生活をなんとか全うできたことは、一重に先輩、同僚、後輩達の御指導と御支援の賜物であったと心より感謝している次第です。

大学生活での15年間は、終わってみますとあっという間の感じでしたが、赴任当初は何事も未経験な私にとりましては不安も多くありました。しかし、それらを払拭してくれましたのは、毎年新しく入れ替わる学生達との触れ合いでありました。また、人材の“るつぼ”ともいえる東京での素晴らしい方々との出会いであり、さらには岐阜大学大学院連合獣医学研究科での分野の異なる先生方との出会いでもありました。お陰様で多くの方々から吸収させて頂いたものは、筆舌に尽くし難い程でありました。当分は仕事の都合上、田舎と東京での半々の生活になると思いますが、皆様にも再びどこかでお会いする機会があると思

います。何卒、今後ともよろしくお願い致しますとともに、東京農工大学の益々の御隆盛を御祈念申し上げます。

電気電子工学科

黒岩 紘一

昭和59年に当時の日本電信電話公社の研究所から助教授として東京農工大学に着任し、雨漏りのする研究室で半導体関連の材料研究を開始しました。その後、所属する学科は改組により電子工学科、電子情報工学科、電気電子工学科と名称が変わり、更に建物や組織、大学を取り巻く環境がすっかり変わりました。その間、いろいろなことがありましたが、教職員、学生たちに支えられてここまでやってこられました。ここにお礼申し上げます。

多くの学生を指導する一方で、逆に学生から教えられたことも多々ありました。振り返ってみて、常に若い人たちに囲まれた生活は楽しくもあり、またこのことにより自分自身を若く保つことができたと思います。

昨今の少子化や経済情勢等の厳しい環境の中でも、東京農工大学がその特徴を生かしてますます発展することを祈念してやみません。

機械システム工学科

山本 隆司

この3月31日付けで35年9ヶ月にわたる教員生活を終えた。本学は、学生数、部局等の数が総合大学に比べて少ないとはいえ、今や産業界・学界等からの評価は高くなり、着任当時の昭和48年(1973年)頃と比べて隔世の感を覚える。

現在アメリカの主要自動車メーカーが苦境に陥っていることは周知の通りである。今から55年ほど前、我々が小学生時代、キャデラック(GM社)、リンカーン(Ford社)、ジープ(Chrysler社)などアメリカ製の自動車はあこがれの的であり、よく、それらの自動車を追いかけてまで眺めていたことを鮮明に覚えている。その頃の日本の自家用自動車(国産車)はまだ普及しておらず、もっぱら、3輪車を中心とする商用車が主流であり、4輪車のほとんどが海外諸国からのライセンス生産によるものであった。技術の分野では50年で事態が一変するようである。このような変化・進化は、産業分野だけでなく教育・研究分野にも同様に起こり得る。日々の努力の蓄積が長い年月には大きな成果となって顕在化することを忘れないで欲しいものである。

平成20年度 同窓会学生援助事業報告

1. 学会発表 (345件)

①農学部・農学府 (前期): 23件

	氏名	学科・専攻名	学年	発表題目	学会名
1	太田 惣介	生物生産	4年	ブラシカ属種間キメラにおける形態発生学的研究	日本育種学会
2	花岡 小百合	環境資源科	4年	福江・沖繩間東シナ海上空におけるエアロゾル・大気汚染物質の航空機を用いたラグランジュ的観測・速報	日本エアロゾル学会
3	吾郷 恭平	獣医	6年	抗甲状腺剤の Propylthiouracil (PTU) の発がんプロモーションにより誘発された甲状腺増殖性病変での細胞周期関連分子の経時的な発現変動解析	日本獣医学会
4	飯沼 雄司	獣医	6年	ラットにおける消炎ステロイド投与の肝 CYP 酵素活性に対する影響	日本獣医学会
5	鳥 智美	獣医	6年	抗甲状腺剤によるラット甲状腺発がんプロモーションに対する飼料中の銅の修飾作用	日本獣医学会
6	鳥田 圭悟	獣医	6年	犬におけるステロイドの CYP 活性に対する阻害作用	日本獣医学会
7	谷合 枝里子	獣医	6年	ラットの肝発がん過程想起からの PI3/Akt 経路関連分子の免疫組織学的局材	日本獣医学会
8	高橋 彩佳	生物生産科学	M1	ジベレリンやアブジジン酸およびそれらの生成阻害剤処理がキンギョソウの花弁老化に及ぼす影響	園芸学会
9	篠崎 良仁	生物生産科学	M2	アサガオ花弁における老化関連遺伝子の発現量の系統間差異	日本育種学会
10	田邊 淳	生物生産科学	M2	畑圃場における窒素の無機化と溶脱に及ぼす長期堆肥連用の影響	日本土壌肥科学会
11	池原 太一	応用生命化学	M2	馬鈴薯澱粉由来のアシル化分岐リン酸化オリゴ糖による澱粉の糊化・老化制御	日本応用糖質科学会
12	工藤 千香子	応用生命化学	M2	マウス皮膚における細胞外マトリックス遺伝子発現の成長に伴う変化	日本結合組織学・マトリックス研究会
13	萩原 健太	応用生命化学	M2	トウモロコシ澱粉由来の分岐オリゴ糖のリン酸化およびアシル化	日本応用糖質科学会
14	鈴木 佑	生物制御科学	M1	弱毒化現象を顕わすイネいもち病菌に混合感染するマイコウイルスの解析	日本植物病理学会
15	加藤 亮宏	生物制御科学	M2	蛍光タンパク質を用いたイネ植物体上での <i>talaramyces</i> sp.KNB-422 の動態解析	日本植物病理学会
16	加藤 幸栄	生物制御科学	M2	イネいもち病菌に生育阻害をもたらすマイコウイルスの探索とその性状解析	日本植物病理学会
17	吉岡 千津	生物制御科学	M2	土壌から抽出した eDNA を用いた、トマト萎凋病菌レースの識別法	日本土壌微生物学会
18	北山 響	物質循環環境科学	M2	PMF を用いた三宅島における噴火の降水にあたる影響評価	大気環境学会
19	三堀 純	物質循環環境科学	M2	微生物の脱窒による硝酸汚染水の浄化	日本環境学会
20	黒崎 浩之	自然環境保全学	M2	Intervals to determine extra yarding distance of small scale cable yarding systems	IUFRO ALL-D3-Conference
21	三木 香織	国際環境農学	M1	アブラナ科植物における種属間キメラの合成と解析	日本育種学会
22	A N Dara	国際環境農学	M2	Agricultural expansion and its effects on breeding habitat of Giant Ibis in Kulen Promtep Wildlife Sanctuary, northern Cambodia	日本熱帯生態学会
23	桑田 大	国際環境農学	M2	ジベレリン処理したイネ無胚半切種子のプロテオーム解析	日本育種学会

(後期): 65件

	氏名	学科・専攻名	学年	発表題目	学会名
1	鈴木 朝悦	生物生産	4年	イチゴ 'とちおとめ' における光合成速度、蒸散速度および気孔伝導度の季節変化と日変化	園芸学会
2	佐野 直人	生物生産	4年	イネ登熟粒に存在するタンパク質のプロテオーム的解析	日本育種学会第115回講演会
3	井上 和也	生物生産	4年	水稲飼料用品種リーフスターとその両親における稈のリグニン合成酵素シナミルアルコールデヒドロゲナーゼの特性	作物学会関東支部
4	早田 一也	生物生産	4年	水稲品種コシヒカリとタカナリの個体群吸光係数と葉身傾斜角度の比較	作物学会関東支部
5	秋月 直也	応用生物科	4年	Wolbachia の寄生がチャハマキの発育と生存に及ぼす影響	日本応用動物学会第53回大会
6	影山 溪	環境資源科	4年	土壌から分離した真菌による硫化カルボニルの分解	2009年日本農芸化学会大会
7	上田 成彬	地域生態システム	4年	ヒノキ細根密度が根および微生物の呼吸速度に及ぼす影響	日本森林学会
8	塚田 夢人	地域生態システム	4年	奥多摩の人工林における埋土種子と伐採放棄地の天然更新	日本森林学会
9	辻 千智	地域生態システム	4年	丹沢山地の砂防造林地におけるハンノキ属の窒素固定態の季節変化	日本森林学会
10	斎藤 崇	獣医	5年	悪性抹消神経鞘腫瘍の外科的切除を行った犬の1例	獣医麻酔外科学会
11	鶴野 暁史	獣医	6年	精巢実質内への色素あるいは造影剤注入による胸管の可視化の試み	日本獣医学会学術集会
12	平 悟志	獣医	6年	肺動脈狭窄モデル犬に対する右室・肺動脈間導管移植術および生体組織付付き導管の組織学的有効性の検討	動物臨床医学会年次大会
13	西村 大樹	獣医	6年	Tissue doppler imaging を用いた時相的評価による左右心室収縮運動評価	第29回動物臨床医学会年次大会
14	福田 淳志	獣医	6年	環境ホルモン曝露でウズラの血球中薬物代謝酵素が変動する	環境ホルモン学会
15	鈴木 良	獣医	6年	飼育下における雌シャチの発情周期中と妊娠期中の尿中プロゲステロンと黄体形成ホルモン (LH) 濃度の変化	野生動物医学会
16	池田 和規	獣医	6年	障害者乗馬活動に用いられるウマのストレス評価に関する研究	日本ウマ科学会
17	矢野 良佳	獣医	6年	左室流入・流出血流量比による犬の僧帽弁逆流症の重症度評価に関する検討	第29回動物臨床医学会年次大会
18	岡本 悠	獣医	6年	ミニチュア・ダックスフンドの心臓椎体総計の画像診断学的評価	第89回日本獣医循環器学会
19	宮石 由香	獣医	6年	温熱負荷による骨格筋肥大に関する検討	第29回動物臨床医学会年次大会
20	石川 泰輔	獣医	6年	ACE 阻害薬 (アラセプリル, エナラプリル, テモカプリル) 投与が MR 犬の左心房圧に与える影響	第89回日本獣医循環器学会
21	名木 稔	生物生産科学	M1	Candida albicans の血清添加によるアゾール剤非感受性化メカニズムの解明	BMB 2008
22	野村 祐介	生物生産科学	M1	ミョウガの花柄伸長や花らいの着色に及ぼす光量、光質および湿度の影響	園芸学会
23	井山 佳代子	生物生産科学	M1	多着果にしたブルーベリー樹に発生した黄色葉の光合成および栄養特性	園芸学会
24	鶴 裕貴子	生物生産科学	M1	コシヒカリ/ハバタキ戻し交雑後代を用いた水稲の光合成速度に関する QTL 解析—第8染色体に着目して—	日本育種学会関東支部第97回講演会
25	浅沼 俊輔	生物生産科学	M1	コシヒカリ/ハバタキ戻し交雑後代を用いた水稲の光合成速度に関する QTL 解析—第4染色体に着目して—	日本作物学会第226回講演会
26	末吉 知洋	生物生産科学	M2	コシヒカリ/ハバタキの染色体断片置換系統群を用いた水稲の光合成速度に関する QTL 解析—第11染色体に着目して—	日本作物学会関東支部第97回講演会
27	安川 毅	生物生産科学	M2	栽植密度が飼料用イネ系統関東農225号の乾物生産と子実収量に及ぼす影響	日本作物学会第226回講演会
28	渡邊 珠貴	生物生産科学	M2	塩ストレス条件下におけるオオムギ幼植物の根の水伝導度と光合成速度の品種間差	日本作物学会第226回講演会
29	岩崎 良美	生物生産科学	M2	乾物生産および光合成特性に着目した多収性イチゴ '紅ほっぺ' の解析	園芸学会
30	坂本 容子	生物生産科学	M2	ブルーベリー 10 品種の果実成熟過程における果実硬度とクチクラ形成との関係	園芸学会
31	吉川 美穂	生物生産科学	M2	黒ボク土堆肥連用圃場における土壌有機炭素量及び POM 画分炭素量の季節変化	日本土壌肥科学会
32	中村 嘉孝	生物生産科学	M2	神奈川県北西部傾斜草地における土壌養分および土壌酵素活性分布の季節変化	日本土壌肥科学会
33	小島 拓磨	生物生産科学	M2	水ストレス処理したマクワウリ葉中のタンパク質のプロテオーム的解析	日本育種学会第115回講演会
34	Tayloran Renante Decenella	生物生産科学	M2	Comparison of the rate of photosynthesis and root and shoot growth between cultivars Takanari and Koshihikari	日本作物学会関東支部第97回講演会

35	榎本 麻衣	応用生命化学	M1	Lactobacillus plantarum NRIC0380 による制御性 T 細胞の誘導	2009 年日本農芸化学会大会
36	水口 洋平	応用生命化学	M1	Role of ubiquitination promoted during restimulation in the induction of T cell anergy	動物細胞工学会
37	新井 智幸	応用生命化学	M1	タバコ N t ERF3 組換えウイルスによる抵抗性遺伝子をもたない植物での細胞死誘導とウイルス封じ込め	BMB2008
38	小賀田 拓也	応用生命化学	M2	タバコモザイクウイルス感染時のタバコ N t ERF3 遺伝子の発現解析と一過性過剰発現による過敏感細胞死の誘導	平成 20 年度日本植物病理学会大会
39	張替 秋	生物制御科学	M1	ハマキガ科昆虫におけるオス殺し因子の水平伝播	第 8 回昆虫病理研究会シボジウム
40	引原 翔平	生物制御科学	M1	チャノココカモンハマキ幼虫における核多角体病ウイルスつくば株と顆粒病ウイルス宮崎株との相互作用	第 8 回昆虫病理研究会シボジウム
41	車地 健太郎	生物制御科学	M1	シロモンヤガ顆粒病ウイルスによる宿主発育制御機構の解明	日本応用動物昆虫学会第 53 大会
42	小山 裕徳	生物制御科学	M2	埼玉県および茨城県のチャハマキ個体群における雄殺しウイルスの有病率の変動	日本応用動物昆虫学会第 53 大会
43	吉村 信吾	生物制御科学	M2	シロモンヤガ顆粒病ウイルスにコードされるカリヤコムバチ幼虫致死タンパク質ホモログの発現とその殺虫活性	日本応用動物昆虫学会第 53 大会
44	漆田 悠紀	生物制御科学	M2	ハスモンヨトウ幼虫における核多角体病ウイルス感染がハスモンサムライコムバチの発育と生存に及ぼす影響	第 8 回昆虫病理研究会シボジウム
45	浅野 希梨	生物制御科学	M2	スリランカで採集された Homona coffearia 病死中より分離された昆虫ボックスウイルスの性状解析	第 8 回昆虫病理研究会シボジウム
46	浦山 俊一	生物制御科学	M2	Oryza sativa Dicer-Like 2 (OsDCL2) 遺伝子ノックダウン株におけるイネ内在性 2 本鎖 RNA の解析	植物生理学会
47	大堀 智也	生物制御科学	M2	海草アマモの耐塩性に関与する遺伝子の探索	第 50 回植物生理学会年会
48	丸田 五月	生物制御科学	M2	シロイヌナズナにおけるタンパク質脱リン酸化酵素タイプ 2C (APC4) の形質転換植物を用いた機能解析	第 50 回植物生理学会年会
49	原 佑介	生物制御科学	M2	ショウジョウバエ視葉の除神経誘導細胞死におけるエクゾソームカスケードの機能解析	BMB2008
50	古賀 祐子	環境資源物質科学	M1	スギ材の二酸化窒素除去に及ぼす相対湿度の影響	日本木材学会
51	関田 真奈	物質循環環境科学	M1	アブラナ科植物植栽地の大气 CO ₂ 濃度の鉛直分布と土壌細菌の含硫配糖体の分解に伴う CO ₂ 生成	第 24 回日本微生物生態学会
52	小関 彩	物質循環環境科学	M1	純粋培養と微小生態系における 2,4-dichlorophenol 分解細菌の銅イオン耐性の比較	第 24 回日本微生物生態学会
53	久住 朝子	物質循環環境科学	M2	アンコール遺跡劣化石材の微生物群集構造解析	第 24 回日本微生物生態学会
54	永野 博彦	物質循環環境科学	M2	硝酸肉エキス培地で亜硝酸を蓄積し、亜酸化窒素を生成する脱窒細菌	第 24 回日本微生物生態学会
55	鹿島 裕之	農業環境工学	M2	Effect of bacterial stress on hydrogen fermentation microflora	ASABE 2008 AIM
56	岩崎 桃子	農業環境工学	M2	家畜尿を養液とする家畜飼料栽培	農業機械学会関東支部第 44 回学大会
57	山田 勇智	自然環境保全学	M1	丹沢堂平地区における斜面土壌侵食量と浮遊土砂流出量との関係	第 120 回日本森林学会大会
58	柴田 健幹	自然環境保全学	M1	土壌の養分条件がハンノキ属根粒の窒素固定態に及ぼす影響	第 120 回日本森林学会大会
59	三好 貴之	自然環境保全学	M1	北関東における森林流域の水質形成に及ぼす地形因子の影響評価	第 120 回日本森林学会大会
60	盧 曉強	国際環境農学	M2	カルスト地域の原生林における水の移動に伴う養分動態	第 120 回日本森林学会大会
61	Le Thi Thanh Thao	国際環境農学	M2	Characterization of a microsporidium isolated from Spodoptera litura collected in Vietnam and its relationship with a nucleopolyhedrovirus	日本応用動物昆虫学会第 53 大会
62	申英燮	国際環境農学	M2	Diversity of mitochondria functional genes transcription relative to cytoplasmic male sterility in chilipepper	日本育種学会第 114 回講演会
63	Vazir Zanzani Mehran	国際環境農学	M2	Characterization of Iran aromatic rice cultivars	日本育種学会第 114 回講演会
64	Chau Thi Anh Thy	国際環境農学	M2	DNA analysis in relation varieties to flavour of aromatic raice	日本育種学会第 115 回講演会
65	Khin Thuzar Win	国際環境農学	M2	Genetic diversity estimation on mungbean (V-radiata CL- Wilezek) and its wild relative from Myanmar based on SDS-PAGE and morphological traits	日本育種学会第 115 回講演会

②連合農学研究科 (前期) : 16件

	氏名	学科・専攻名	学年	発表題目	学会名
1	安部 華枝	生物生産学	D1	野生ゾウによる農作物被害の対策と住民活動：ワイカンバス国立公園周縁村落の事例	日本熱帯生態学会
2	福見 圭悟	生物生産学	D1	トマト属植物 (Lycopersicon spp) 組織および根圏土壌から分離される Fusarium oxysporum の分子系統解析 *最優秀ポスター受賞*	日本土壌微生物学会
3	于 蕾	生物生産学	D1	Characterization of 7S subunit variations in soybean protein ダイズ 7S 貯蔵蛋白成分の変異の特徴	日本育種学会
4	岡田 亮	生物生産学	D1	ピーマン内在性 dsRNA レプリコンの性状解析	日本植物学会
5	清田 依里	生物生産学	D1	シロイヌナズナの RNase III 様タンパク質の酵素活性と細胞内局在	日本植物学会
6	鈴木 克彰	生物生産学	D1	P 形フーリエ記述子によるイネの草型解析 III 関連遺伝子領域の探索	日本育種学会
7	戸金 悠	生物生産学	D1	Genetic analysis of Neuronal Cell Death mechanism in Drosophila Optic Lobe cells that failed to get retinal innervation *RICHARD LOCKSHIN POSTER PRIZE 受賞*	The 7th International cell death society
8	Madadi Abdul Khalid	生物生産学	D1	イネいもち病菌の親和性、非親和性イネ相互作用における植物内の挙動	日本植物病理学会
9	新城 亮	生物生産学	D2	イネいもち病菌感染イネにおけるマンノース結合型イネレクチン (MRL) の発現量とその局在性	日本植物病理学会
10	青木 菜々子	生物生産学	D3	Alternaria alternata の異常形態に関与する菌ウイルスの性状およびその遺伝子構造の解析	日本植物病理学会
11	薩日娜	生物生産学	D3	内モンゴルにおける集約酪農経営の現状と課題	日本国際地域開発学会
12	中澤 悠宏	生物生産学	D3	Characterization of the interaction between the dsRNA-binding protein DRB4 and the Dicer-like protein DCL4	19th International conference on arabidopsis
13	西村 佳道	農林共生社会科	D1	対日中国産輸入野菜供給における輸入商社の企業行動 - 中国産輸入しょうがによる BHC 残留農薬問題を事例に -	日本農業市場学会
14	堤 美智	農林共生社会科	D2	Experimental study on work life balance of women farmer in Japan -Focusing on the actual situation and the measures of the declining birthrate-	International Rural Sociology Association X II
15	Faoziah Dina	農林共生社会科	D2	Nokyo's contribution to rural development under the reform of Japan's agricultural policy	International Rural Sociology Association X II
16	金 海蘭	環境資源共生科学	D2	紙のサイズ性に及ぼす低密度調整剤の影響	繊維学会

(後期) : 13件

	氏名	学科・専攻名	学年	発表題目	学会名
1	加倉井 憲一	生物生産学	D1	珪酸質およびアルミナ質土壌中の細粘土画分の鉱物組成の特徴	土壌肥料学会・関東支部学会
2	高橋 真秀	生物生産学	D3	チャノココカモンハマキに感染性を有する数種核多角体病ウイルスの生物的防除資材としての利用可能性	日本応用動物昆虫学会第 53 大会
3	Gulyas Ger gely	生物生産学	D3	An altered transcript of sterility related gene, forming orf507, in chili pepper	日本育種学会 115 回講演会
4	日出間 り	生物生産学	D3	Tetrazine a new family of fluorescent crystals	Journées de Printemps GFP
5	那須 三恵	環境資源共生科学	D1	土壌細菌 Mycobacterium sp. strain TH1401 株の硫化カルボニル分解酵素の精製	2009 年日本農芸化学会大会
6	吉村 正俊	環境資源共生科学	D2	Volumetric properties of 2-Alkyl amines (2 - aminobutane and 2-aminoctane) at pressures up to 140 MPa and temperatures between (293.15 and 403.15) K	18th ECTP
7	小坂井 千夏	環境資源共生科学	D2	栃木県足尾地域におけるツキノワグマ Courtship 行動の観察事例	日本哺乳類学会 2008 年度大会
8	若原 妙子	環境資源共生科学	D2	Seasonal changes in the amount of litter layer and soil erosion in the forest floor -an impoverished understory by deer impact at Doudai r a, Tanzawa Mountains-	ICSE-4
9	稲田 征治	環境資源共生科学	D3	道路脇堆積粉塵の人工雨水抽出による微量元素成分の溶出に関する検討	第 17 回環境化学討論会 (日本環境学会)
10	加藤 広海	資源・環境学	D3	土壌の硫化カルボニル分解細菌の系統解析とその分解酵素	日本微生物生態学会
11	李 賢淑	資源・環境学	D3	Sulfur-oxidizing microorganisms in deteriorated stone from Angkor monuments, Cambodia	12th ISME
12	アラ坦沙	農林共生社会科	D1	「退耕還林条例」下の牧畜経営の現状と課題 - 内蒙古自治区牧畜地域を事例分析 -	日本農業経営学会
13	Vichanpol Bunyawat	農業環境工学	D2	Application of cool dry air for reducing grain moisture	農業施設学会

③工学部・工学府 (前期): 60件

	氏名	学科・専攻名	学年	発表題目	学会名
1	池水 万希子	生命工学	M1	シルクの構造特性と関連したアラニン連鎖の不均一構造に関する固体 NMR 研究	高分子学会
2	坂井 健太郎	生命工学	M1	組み換えヒトハプトグロビンにおけるアミノ置換による溶解性の向上	日本生物工学会 2008 年度大会
3	咲山 航	生命工学	M1	縫合糸として用いられるポリグリコール酸繊維の固体 NMR 構造解析	固体 NMR・材料フォーラム
4	原田 龍一	生命工学	M1	ヒト α -シスクレイン二次構造形成における繰り返し配列への変異導入の影響	日本蛋白質科学会
5	Huynh Thi Mai Linh	生命工学	M1	FAD グルコース脱水素酵素の遺伝的アルゴリズムによる基質特異性の改良	日本生物工学会 2008 年度大会
6	吉田 愛	生命工学	M1	家蚕絹ならび大腸菌で生産した高機能化絹の骨・歯用再生医療材料への応用	第 57 回高分子学会
7	内川 明日香	生命工学	M2	アクセサリータンパク質を用いる酵素の多機能化戦略～コレステロールエステラーゼ～	日本生物工学会 2008 年度大会
8	片山 怜	生命工学	M2	ゲノムデータベースを用いた原核生物由来新規フルクトシルアミン酸化酵素の探索	日本生物工学会 2008 年度大会
9	熊谷 丈範	生命工学	M2	Detection of PCR products from Legionella pneumophila using zinc finger protein and firefly luciferase fusion protein	電気化学日米合同大会
10	清水 仁美	生命工学	M2	Nano-material employing direct electron transfer type continuous glucose monitoring system	Biosensors 2008
11	高橋 壘	生命工学	M2	家蚕絹ならびにトランスジェニック蚕による高機能化絹を用いた小口径人工血管の開発	第 57 回高分子学会
12	竹嶋 奈緒美	生命工学	M2	トランスジェニック蚕の産生する新規絹フィブロインフィルムの角膜再生への利用	第 57 回高分子討論会
13	竹花 泉	生命工学	M2	細胞接着配列 RGD を含む絹様タンパク質の生体材料としての有用性に関する検討	第 57 回高分子学会
14	谷岡 由望	生命工学	M2	高機能化絹の設計と大腸菌・TG カイコによる生産ならびに骨・歯再生への応用 *若手優秀ポスター賞*	繊維学会
15	葉梨 拓哉	生命工学	M2	Bio capacitor ~ A novel category of biosensor ~	Biosensors 2008
16	真茅 久美子	生命工学	M2	高機能化絹スポンジの作製と骨再生材料への応用	第 57 回高分子討論会
17	山口 恵理香	生命工学	M2	絹様タンパク質とモデルペプチドの固体 NMR 構造解析とその応用	第 57 回高分子討論会
18	山下 有紀	生命工学	M2	Direct electron transfer type disposable sensor strip for glucose sensing employing FAD glucose dehydrogenase	PRIME2008
19	金 志勲	生命工学	D1	切断型 α シスクレインの凝集・線維化におけるピロロキノリンキノン (PQQ) の影響	日本蛋白質科学会
20	鈴木 悠	生命工学	D2	絹モデルペプチドの分子内・分子間水素結合に関する高磁場 1H 固体 NMR と経験的 1H 化学シフト計算を用いた研究	繊維学会
21	大澤 祐子	生命工学	D3	Zinc finger protein-based detection system of PCR products for pathogen diagnosis	第 35 回核酸化学国際シンポジウム合同シンポジウム
22	小林 夏季	生命工学	D3	α シスクレイン選択的アミロイド線維形成阻害戦略の開発	日本蛋白質科学会
23	有賀 裕一	応用化学	M1	固体酸を用いたセルロース系バイオマスの糖化	日本エネルギー学会
24	一色 直恵	応用化学	M1	シクロデキストリン-水素化ポリノルボルネン包接化合物の造核作用	第 57 回高分子学会
25	嘉村 勉	応用化学	M1	脂環式構造を有する芳香族ポリエーテルケトン合成	第 57 回高分子学会
26	金 勉希	応用化学	M1	核化現象に及ぼすマイクロ波の影響	分離技術会
27	齋藤 亨太	応用化学	M1	側鎖にアダマンチル基を有するスチレン系ポリマーの合成と物性	第 57 回高分子学会
28	長澤 慎之介	応用化学	M1	固体酸触媒を用いた高分子反応法によるポリスチレンの側鎖修飾	第 57 回高分子学会
29	平田 隼也	応用化学	M1	メカノケミカル法による有機結晶の多形発現と転移速度	分離技術会
30	湯ノ口 智恵	応用化学	M2	アシルヒドロゲン配位子を有する新規 10 族遷移金属錯体を用いた嵩高いシクロオレフィン重合	第 57 回高分子学会
31	山田 輝久	応用化学	M2	親水性クマリン単位を有する蛍光ポリアクリレート合成	第 57 回高分子学会
32	鈴木 ひかり	応用化学	D2	水素雰囲気下における GaN (0001) 表面の分解過程の理論解析	電子材料シンポジウム
33	何 磊	応用化学	D2	ポリシラン系ブロック共重合体を用いた光導波路の作成	化学工学会
34	藤井 望	応用化学	D2	シアロピフェニル基を側鎖に有するポリマラル酸ジエステルの液晶性に及ぼす置換基効果	第 57 回高分子学会
35	李 春	応用化学	D2	シクロデキストリン-ポリプロピレン包接化合物の造核作用	第 57 回高分子学会
36	秋山 和博	応用化学	D3	In situ gravimetric monitoring of surface reaction between sapphire and NH ₃	Int..symposium on growth of III-nitrides
37	薛 伯勇	応用化学	D3	ラジカル消去性能を有する ROMP ポリマーの合成とその性能	繊維学会
38	山本 健太	機械システム工学	M1	体外授精の高効率化を目指した、インクジェット技術による生体試料インクジェクションに関する研究	ロボティクスメカトロニクス講演会 2008
39	大橋 麻梨	機械システム工学	M2	ザリガニの嗅覚探索行動を模倣した自律走行型水中ロボット	日本機械学会
40	佐久間 唯	機械システム工学	M2	バイオアクチュエータの創成に向けた昆虫細胞の再構築に関する研究	ロボティクスメカトロニクス講演会 2008
41	櫃本 信	機械システム工学	M2	高分子アクチュエータを用いた多自由度細胞伸縮ツールの開発	ロボティクスメカトロニクス講演会 2008
42	堀口 裕史	機械システム工学	M2	心筋細胞を用いたマイクロバイオアクチュエータの駆動源の開発	ロボティクスメカトロニクス講演会 2008
43	森谷 知寛	機械システム工学	M2	微細品の超音波による精密測定	プラスチック成形加工学会
44	秋山 佳丈	機械システム工学	D3	昆虫背脈管組織を用いたバイオアクチュエータの温度依存性の評価	ロボティクスメカトロニクス講演会 2008
45	石井 林太郎	物理システム工学	M2	SNS 接合のための AIB2 薄膜の作製	第 69 回応用物理学会
46	金子 大輔	物理システム工学	M2	塗布熱分解法による Ni 酸化物薄膜の作製 (4)	第 69 回応用物理学会
47	武居 吾空	物理システム工学	M2	Ripple and undulation on vertically vibrated granular layers:dependence on material properties	Int.Congress of Theoretical and Applied Mechanics
48	久米 彌	電気電子工学	M1	電界放射電流誘起型エレクトロマイグレーションによる単電子トランジスタ作製条件の検討	秋季 応用物理学会
49	小玉 雄一郎	電気電子工学	M1	Fiber transmission characteristics of optical short pulses generated with optical pulse synthesizer	Int.Topical Meeting on Information Photonics 2008
50	館 恭平	電気電子工学	M1	Talbot effect and Lau effect caused by light emitter arrays with a finite number of point light sources	Int.Topical Meeting on Information Photonics 2008
51	田村 直之	電気電子工学	M1	Supercontinuum comb generation using optical pulse synthesizer and highly-nonlinear dispersion-shifted-fiber	Int.Topical Meeting on Information Photonics 2008
52	豊福 貴士	電気電子工学	M1	10Micrometer-scale SPM local oxidation lithography	Tip-Based Nanofabrication 2008
53	藤井 健一郎	電気電子工学	M1	Buffering of 2.5-Gbps optical packets by fiber loop with optical switch and EDFA	Int.Topical Meeting on Information Photonics 2008
54	松永 悠	電気電子工学	M1	DWDM transmission of 27-frequency channels with 50-GHz spacing using frequency comb light source	Int.Topical Meeting on Information Photonics 2008
55	宮下 和也	電気電子工学	M1	Nanoscale patterning of NiFe surface by SPM scratch nanolithography	ICN+T 2008
56	大岩 達矢	電気電子工学	M2	Phase locking conditions of VCSEL array with talbot cavity	Int.Topical Meeting on Information Photonics 2008
57	高橋 佳祐	電気電子工学	M2	Control of channel resistance on metal nanowires by electromigration patterning method	ICN+T 2008
58	西村 信也	電子情報工学	D2	Improvement of SPM Local Oxidation Lithography	ICN+T 2008
59	松本 理	電子情報工学	D2	ノンドープ銅酸化物 T'-RE ₂ CuO ₄ の超伝導 (3): 超伝導特性の c 軸格子定数依存性	第 69 回応用物理学会
60	友田 悠介	電子情報工学	D3	プレナー型強磁性ナノ構造におけるナノギャップの作製と磁気抵抗特性	秋季 応用物理学会

(後期) : 134件

	氏名	学科・専攻名	学年	発表題目	学会名
1	中川 あゆみ	生命工学	4年	超好熱性古細菌由来 II 型シャペロニンの低温適応化	BMB 2008
2	福谷 洋介	生命工学	4年	キメラ m OR226 発現酵母の構築と変異体の機能解析	BMB 2008
3	山中 保明	生命工学	4年	変異体結晶構造解析による鉄型 Nitrite Hydratase 触媒反応機構の研究	BMB 2008
4	大垣 周一郎	応用分子化学	4年	カチオン性ロジウム錯体触媒を用いた [2+2] 付加環化反応による軸不斉ビオリアルカルボン酸エステルの合成	日本化学会第 89 春季年会
5	岡崎 恵理	応用分子化学	4年	カチオン性ロジウム錯体触媒を用いた σ 及び π 結合の連続活性化を経由するアリルプロパルギルエーテルの異性化反応	日本化学会第 89 春季年会
6	斎藤 俊介	応用分子化学	4年	カチオン性ロジウム錯体触媒を用いた 1,6-ジインのカルボキシル化による高選択的環化反応	日本化学会第 89 春季年会
7	府川 直裕	応用分子化学	4年	カチオン性ロジウム錯体触媒を用いた連続 [2+2+2] 付加環化反応による光学活性 [9]ヘリセン誘導体の合成	日本化学会第 89 春季年会
8	田口 悠嘉	応用分子化学	4年	熱力学解析による AIN-HVPE 成長のための原料探索 Si 汚染の低減を目指して	第 56 回応用物理学関係連合講演会
9	宮崎 巧真	有機材料化学	4年	ATRP によるラクトン環を有するアクリル酸エステルの精密重合	第 57 回高分子討論会
10	阿部 友昭	化学システム工学	4年	メカノケミカル法によるアミノ酸の固相形成	化学工学会
11	山田 記央	化学システム工学	4年	メカノケミカル法による有機結晶多形の発現と制御	化学工学会
12	西垣 朝規	機械システム工学	4年	摩擦攪拌形パニシングによるシャフト材表面層の高硬度化・圧縮残留応力付与	精密工学会春季大会
13	崔竣 銘	機械システム工学	4年	シーケンシャル切削における熱的状態と残留応力状態の解析的予測	日本機械学会
14	山田 佳宏	機械システム工学	4年	複合加工機を用いたロータリ切削による難削材の高速高能率加工 *優秀ポスター賞*	IMEC ポスターセッション
15	黒田 啓史	機械システム工学	4年	マルチ光トラップによる筋細胞を用いたマイクロバイオアクチュエータの組立	S I 2008
16	小暮 典沙	機械システム工学	4年	骨格筋を用いたバイオマイクロポンプの作製	第 26 回日本ロボット学会学術講演会
17	本名 達郎	機械システム工学	4年	昆虫発電システムへの圧電ファイバーの応用	第 26 回日本ロボット学会学術講演会
18	渡辺 智	機械システム工学	4年	スリットノズルを使用した電解液ジェット加工によるディンプルソーワイヤーの製作	日本機械学会
19	渡村 昌治	機械システム工学	4年	マイクロ放電加工における放電エネルギーの不確かさに関する研究	電気加工学会全国大会 2008
20	松倉 悠	機械システム工学	4年	Interactive odor playback based on fluid dynamics simulation	IEEE VR2009
21	新原 佳結	物理システム工学	4年	分子線エビタキシー法による M g B ₂ /A 1 B ₂ 積層構造の作製	第 56 回応用物理学関係連合講演会
22	石津 裕之	電気電子工学	4年	光パルスシンセサイザにより合成した放物線パルスのファイバ伝搬特性	第 56 回応用物理学関係連合講演会
23	木下 昌洋	電気電子工学	4年	マイクロプロセス制御による光ファイバセンサ網の構成	第 56 回応用物理学関係連合講演会
24	内山 悠	電気電子工学	4年	スズを触媒体としたシリコンナノワイヤーの作製と評価	第 69 回応用物理学関係連合講演会
25	小川 圭祐	電気電子工学	4年	Dry etching using hydrogen radical for application of solar cells	The 18th Int. Photovoltaic Science & Engineering Conf.
26	古市 和也	電気電子工学	4年	Effect of SiNx:H passivation films deposited by RF-RPECVD method on crystalline silicon quality.	The 18th Int. Photovoltaic Science & Engineering Conf.
27	伴 直樹	電気電子工学	4年	多結晶シリコン太陽電池用基板におけるシート抵抗のスピンコート速度依存性	第 69 回応用物理学関係連合講演会
28	吉葉 修平	電気電子工学	4年	マイクロ波リモート PECVD 法による微結晶シリコン薄膜の低温形成	第 69 回応用物理学関係連合講演会
29	種本 侑美	電気電子工学	4年	ホログラムの共役像除去に用いるシングルサイドバンド法に関する考察	(社)映像情報メディア学会
30	朱 景華	情報コミュニケーション工学	4年	路面の違いが乗り心地に与える影響の検証	産業計測制御研究会
31	中村 士	情報コミュニケーション工学	4年	Tactile impression detection system using the EEG	NCSP ' 09
32	青木 駿介	情報コミュニケーション工学	4年	ファジィ推論に基づく対象物抽出	産業計測制御研究会
33	安孫子 恒樹	情報コミュニケーション工学	4年	AIBO を用いた人の追跡 Face image tracking on the AIBO	JASAG 全国大会 2008 年秋
34	藤 大樹	情報コミュニケーション工学	4年	Aligning the real space with the 2D model on see-through typed HMD using the GA with interactive handling *NCSP'09 Student Award*	NCSP ' 09
35	新井 啓己	生命工学	M1	Effect of salt addition on the phase separation behavior of ionic liquid/water mixture	PRiME 2008
36	加治屋 一樹	生命工学	M1	金ナノ粒子修飾電極-金属タンパク質間の直接電子移動反応における金ナノ粒子径の影響	第 3 回バイオ感測化学合同シンポジウム
37	増田 美幸	生命工学	M1	Electrocatalytic reaction of alcohol dehydrogenase using electropolymerized films of an iron complex	PRiME 2008
38	松田 啓佑	生命工学	M1	NADH による直接電子伝導系における耐熱性シトクロム P450 及びその変異体を用いたスチレンエポキシ化反応の速度論的解析	BMB 2008
39	三柴 晴香	生命工学	M1	Pyrococcus horikoshii OT3 由来鉄含有型アルコール脱水素酵素の鉄イオン結合サイト	錯体化学討論会
40	富成 司	生命工学	M1	新規 NF- κ B 阻害剤の破骨細胞分化に対する作用	BMB 2008
41	波部 直樹	生命工学	M1	定量的な痛覚検出システムを用いた痛みの解析	BMB 2008
42	芦田 祐希	生命工学	M1	癌抑制遺伝子 p53 関連タンパク質 MDMX の大量発現・精製及び機能解析	BMB 2008
43	猪狩 早雅	生命工学	M1	マウス由来 DNA methyltransferase Dnmt3B 及び Dnmt3L の発現・精製及び機能解析	BMB 2008
44	浪間 聡志	生命工学	M1	基質ポケット近傍アミノ酸残基のチオシアネート加水分解酵素基質特異性に対する影響	BMB 2008
45	斉藤 史彦	生命工学	M1	C-reactive protein に結合する DNA アプタマーの探索と改良	BMB 2008
46	新居 枝里子	生命工学	M1	脂肪細胞分化における遺伝子発現の検討	BMB 2008
47	横山 智史	生命工学	M1	乳癌の増殖と骨破壊におけるプロスタグランジン E2 の役割	BMB 2008
48	山田 真由美	生命工学	M1	フルクトサミンリン酸化酵素を用いた糖化蛋白質測定用チップ型バイオセンサーの開発 *若手研究者奨励賞*	日本マイクロ学会第 18 回学術集会
49	内海 現太	生命工学	M1	熱ストレス条件下における、分裂酵母由来 sHsp による低毒性 A β 凝集体の生成	日本蛋白質科学会年会
50	石田 眞理	生命工学	M1	分裂酵母由来グループ II 型シャペロニン CCT の発現・精製系の構築	日本生物工学会学生発表討論会
51	萬 麻衣子	生命工学	M2	キメラ体を用いたマウス由来 eugenol 受容体の酵母による発現	第 60 回日本生物工学会
52	牛頭 峰一	生命工学	M2	揮発性有機塩素化合物の嫌気性バイオレメディエーションに関わる微生物コンソーシア解析技術の開発	BMB 2008
53	増田 莉恵	生命工学	M2	II 型シャペロニン helical protrusion の ATP 依存的蛍光変化解析	日本蛋白質科学会年会
54	中込 篤	生命工学	M2	分裂酵母由来 Hsp104 の機能解析	日本蛋白質科学会年会
55	小林 愛	生命工学	M2	ヒアルロン酸による骨吸収抑制と組織分解酵素発現の解析	BMB 2008
56	上田 紗織	生命工学	M2	Thermally stable proton conductive liquids based on zwitterionic liquid/HTFSI mixtures	PRiME 2008
57	辻 優希	生命工学	M2	Preparation of imidazolate-based ionic liquid as a new proton conductive matrix	PRiME 2008
58	河野 雄樹	生命工学	M2	Protein extraction with water/ionic liquid mixture using temperature-driven phase change	PRiME 2008
59	林 賢作	生命工学	M2	含水イオン液体中でのセルロースの分解	第 57 回高分子学会年次大会
60	鍵本 純子	生命工学	D2	Physicochemical properties of amino acid ionic liquids composed of phosphonium cations	EUCHEM 2008 Conf.on Molten Salts and Ionic Liquids
61	岩本 理	生命工学	D2	新規五員環グアニジン部構築法に基づく (+)-デカルバモイルサキトキシンの全合成およびサキトキシ誘導体の Na チャネル阻害活性評価	日本化学会第 89 春季年会
62	金 承洙	生命工学	D2	Biomolecular engineering of eukaryotic tryptophan synthase for glycosylated protein analysis	The 10th Korea-China-Japan Joint Symposium on Enzyme Engineering
63	村田 賢一	生命工学	D2	A surface-enhanced Raman spectroscopic study of fructose dehydrogenase on silver nanoparticles	PRiME 2008
64	Muhamad Sahlan	生命工学	D2	Studies on the interaction mode between the octameric ring group II chaperonin and the hexameric prefoldin	日本蛋白質科学会年会
65	阿部 哲也	生命工学	D2	分裂酵母 Schizosaccharomyces pombe 由来 SpHsp16.0N 末端変異体の解析	日本蛋白質科学会年会

66	神前 太郎	生命工学	D2	Conjugated chaperonin を用いたグループII型シャペロニンのATP 依存的構造変化機構の解析 *ポスター賞*	日本蛋白質科学会年会
67	橋本 浩一	生命工学	D3	ニトリルヒドラーターゼの新規基質 t-butylisocyanide 触媒反応解析: 全反射吸収赤外分光法と X 線結晶構造解析法による反応機構解析 *ポスター賞*	日本蛋白質科学会年会
68	田中 竜太郎	応用化学	M1	光導波路用ポリシラン系ブロック共重合体の重合反応の解析	化学工学会
69	田中 理絵	応用化学	M1	カチオン性ロジウム錯体触媒を用いたヘテロ原子架橋 5- アルキナールの不斉 [4+2] 付加環化反応	日本化学会第 89 春季年会
70	小峯 秀幸	応用化学	M1	カチオン性ロジウム錯体触媒を用いた [2+2+2] 付加環化反応によるアザジベンゾフラン誘導体の合成	日本化学会第 89 春季年会
71	吉田 主税	応用化学	M1	Tissue-adhesive hydrogel as novel surgical hemostat and matrix for sustained release	The 14th Symposium of Young Asian Biochemical Engineers' community
72	金久保 ゆり恵	応用化学	M1	Block polymer-assisted preparation and characterization of surface-modified nanoparticle as novel carrier for drug delivery system	The 14th Symposium of Young Asian Biochemical Engineers' community
73	石井 泰寛	応用化学	M1	その場測定による水素雰囲気下 6H-SiC 表面反応メカニズムの検討	応用物理学会
74	大竹 陽介	応用化学	M2	ロジウム錯体触媒を用いたカルボニル化合物を 2 原子成分とする [2+2+2] 付加環化反応及びカルボニル基を配向性官能基とする C-H 結合官能基化反応	第 94 回有機合成シンポジウム
75	原 裕美	応用化学	M2	エノールエーテル及びエステルをアルキン等価体として用いた化学及び位置選択的 [2+2+2] 付加環化反応	第 94 回有機合成シンポジウム
76	北條 大樹	応用化学	M2	2-アルキニル及びビニルベンズアルデヒドとアルケン及びカルボニル化合物との不斉 [4+2] 付加環化反応	第 93 回有機合成シンポジウム
77	柴田 祐	応用化学	M2	カチオン性ロジウム錯体触媒を用いた 1,6-ポリロジニカルボニル基を配向性官能基とする sp ² C-H 結合のアルケニル化反応	日本化学会第 89 春季年会
78	久我 寿典	応用化学	M2	Acid promoted hydrogen migration in 2-allylphenoxoruthenium(II) to form an η ³ -allyl complex *23rd ICOMC POSTER PRIZE*	ICOMC 2008
79	熊澤 宏枝	応用化学	M2	フェロセンを含む酸化還元活性な共役高分子の合成	第 57 回高分子討論会
80	尾崎 春香	応用化学	M2	1,8- 位連結カルバゾールを主鎖に含む共役高分子の合成と物性	第 57 回高分子討論会
81	西内 和希	応用化学	M2	生分解性材料を用いたマイクロカプセルの作製	化学工学会
82	長谷川 真澄	応用化学	M2	水素化ニトリルゴムの変形・回復過程における構造変化の光散乱法による評価 *優秀発表賞*	日本ゴム協会第 20 回エラストマー討論会
83	吉澤 省吾	応用化学	M2	反応晶析による水酸化ニッケル結晶の生成条件と結晶子サイズ、粒径の関係	化学工学会 第 40 回秋季大会
84	赤松 俊介	応用化学	M2	結晶多形転移に及ぼすマイクロ波の影響	化学工学会 第 40 回秋季大会
85	舩舩 拓哉	応用化学	M2	反応晶析による DL-メチオニン結晶の形態、結晶多形、嵩密度	化学工学会 第 40 回秋季大会
86	天池 岳大	応用化学	M2	複合結晶の界面構造と生成条件	化学工学会 第 40 回秋季大会
87	下田 公陽	応用化学	M2	間接加熱処理法によるダイオキシン類汚染底質の浄化	第 19 回廃棄物化学研究会発表会
88	須賀 陽介	応用化学	D2	Plasma emission spectrometry for material synthesis process in supercritical fluids	The IUMRS International Conf. in Asia
89	岸 祥史	応用化学	D2	結晶多形の転移速度に及ぼす添加物の影響	化学工学会 第 40 回秋季大会
90	今川 健太郎	機械システム工学	M1	バブル型マイクロポンプの開発と性能評価	第 26 回日本ロボット学会学術講演会
91	上杉 薫	機械システム工学	M1	細胞シート接着力測定システムの開発	第 26 回日本ロボット学会学術講演会
92	白田 敬介	機械システム工学	M1	厚膜レジストへのレーザー溝加工によるマイクロミキサの作製	第 26 回日本ロボット学会学術講演会
93	平井 駿介	機械システム工学	M1	ワイヤ放電加工におけるワイヤ電極の自動振動に関する研究	精密工学会春季大会
94	竹内 淳也	機械システム工学	M1	テニスのストリングとボールの衝突中における反発および摩擦特性	日本トライボロジー学会
95	大島 直樹	機械システム工学	M2	長繊維強化 PVA ゲルにおけるしゅう動による表面損傷の繊維体積率・繊維角度依存性	日本トライボロジー学会
96	甲野藤 淳	機械システム工学	M2	犬の鼻を模倣した能動ステレオ嗅覚センシングシステム * 機務潤滑設計部門 一般表彰(激励)受賞*	日本機械学会
97	皆川 勇一	機械システム工学	M2	Compact SPR sensor for underwater chemical sensing robot	12th International Meeting on Chemical Sensors
98	佐藤 圭一	機械システム工学	M2	コンクリートアンカーボルトの引き抜き耐力に関する研究 * 若手優秀講演賞*	日本機械学会徳関東支部ブロック合同講演会 2008 およま
99	亀山 敦史	機械システム工学	M2	電極間の相対滑りを利用した極低消費放電加工	電気加工学会全国大会 2008
100	森本 賢治	機械システム工学	D3	放電遅れ時間の定量化に基づく形彫り放電加工シミュレーション	精密工学会秋季大会
101	笹本 賢	物理システム工学	M1	ニオブ酸リチウムにおける超高速キャリアダイナミクス(II)	第 69 回応用物理学会学術講演会
102	高橋 晶子	電気電子工学	M1	光給電による遠隔センサノードの駆動技術	電子情報通信学会
103	高橋 領	電気電子工学	M1	統計モデルに基づく 3 次元腹部 CT 像からの腹腔領域抽出法の改善	日本医用画像工学会
104	今関 瑠美	電気電子工学	M1	PET 像と CT 像を対象とした病変検出支援システムの高度化~代謝の個人差吸収可能な指標の提案~	日本医用画像工学会
105	成平 拓也	電気電子工学	M1	An extraction process of metastatic liver tumors in contrast enhanced CT images learned by a boosting algorithm *IFMIA 2009 Second Poster Award*	Int.Forum Medical Imaging in Asia 2009
106	舞嶋 和也	電気電子工学	M1	AI を触媒体とした Si ナノワイヤーの形成と評価	第 56 回応用物理学関係連合講演会
107	冨塚 吉博	電気電子工学	M1	水素ラジカルを利用した Si ナノワイヤーのドーピングと評価	第 56 回応用物理学関係連合講演会
108	前田 修平	電気電子工学	M1	SiNx:H Passivation effect on n-Type multicrystalline silicon using RPECVD Method	23th European Photovoltaic Solar Energy Conf.
109	甲斐 友紀	電気電子工学	M1	カメラパラメータ推定による立体撮影用平行移動カメラの高速化	立体映像技術・情報ディスプレイ合同研究
110	高本 英典	電気電子工学	M1	モバイル用 HDD ディスプレイへの赤外線ステレオカメラを用いた指先ポインティングの導入	立体映像技術・情報ディスプレイ合同研究
111	麻場 直喜	電気電子工学	M1	超多眼表示と高密度指向性表示による自然な立体表示の比較	3 次元画像コンファレンス 2008
112	岡田 直也	電気電子工学	M1	水平走査型ホログラフィーによる大画面化と水平視域角拡大	3 次元画像コンファレンス 2008
113	金箱 翼	電気電子工学	M2	時間多重高密度指向性ディスプレイ * 優秀論文賞*	3 次元画像コンファレンス 2008
114	林 勇樹	電気電子工学	M2	解像度変換光学系を用いた広視域角ホログラムの共役像除去と像強度増大	3 次元画像コンファレンス 2008
115	小熊 信	電気電子工学	M2	Appearance reproduction by high-density directional display: influence of ray sampling and comparisons to high-resolution 2D display	Int. Display Workshops
116	Supajariyawichai Piyasak	電気電子工学	M2	Effect of phosphorus gettering on electrical properties of N-type multicrystalline ingots grown by different thermal profiles	23th European Photovoltaic Solar Energy Conf.
117	木本 達也	電気電子工学	M2	Pancreas segmentation from three dimensional contrast enhanced CT images based on a patient specific atlas *IFMIA 2009 Second Poster Award*	Int.Forum Medical Imaging in Asia 2009
118	原 伸考	電気電子工学	M2	波長 980nm レーザを電力源とした光ファイバ給電センサ網	2008 ソサイエティ大会
119	曹 慶雲	情報工学	M1	後退機能を持つ無拘束足踏み型移動インタフェースの開発 * 学術奨励賞*	日本ヴァーチャルリアリティ学会
120	大丘 達也	情報工学	M1	ファントムセンセーションの位置制御により接続力代替提示を行う小型振動デバイスの開発	日本ヴァーチャルリアリティ学会
121	佐藤 知充	情報工学	M1	親指の連続なぞり動作を用いた目立たない走査式文字入力デバイスの開発 * 優秀プレゼンテーション賞*	ヒューマンインタフェースシンポジウム 2008
122	松村 京平	情報工学	M1	情報提示タイミング制御のための PC 作業履歴に基づくユーザ状態推定可能性の検討	ヒューマンインタフェースシンポジウム 2008
123	平家 雅之	情報工学	M2	親近感につながるデフォルメ個人化アバター作成ツールの検討	ヒューマンインタフェースシンポジウム 2008
124	松田 稜	情報工学	M2	多指仮想物体操作のための把持のモデルに基づくカメラトラッキング	日本ヴァーチャルリアリティ学会
125	中島 和哉	情報工学	M2	繁殖シミュレーションに基づく草原生成	情報処理学会
126	橋本 剛幸	情報工学	M2	三次元ウェディング制御のための PC 作業履歴に基づくグレーディングシステムに関する研究	情報処理学会
127	我妻 伸哉	物理システム工学	M1	FeSe の分子線エピタキシー成長	応用物理学会
128	猪野 智也	物理システム工学	M1	原子泉法による低速ルビジウム原子ビームの開発	日本物理学会 2009 年次春季大会
129	小林 佑輔	物理システム工学	M1	磁気格子を横切る原子の磁気共鳴遷移	日本物理学会 2008 年次秋季大会
130	横地 界斗	電子情報工学	D1	系外惑星直接観測のための高精度波面補正法を用いた高ダイナミックレンジ光学システム	第 56 回応用物理学関係連合講演会

131	Mentek Romain	電子情報工学	D2	Non-contact Silicon Ingot Cut by Electrochemical Anodization	第69回応用物理学会学術講演会
132	太田 敢行	電子情報工学	D3	ナノシリコン弾道電子エミッタの水溶液中動作と水素発生 *講演奨励賞*	第69回応用物理学会学術講演会
133	田島 孝治	電子情報工学	D2	位置情報応用システムのための塗り分け画像を用いた高速ジオコーディング手法の提案 *ヤングリサーチ賞*	情報処理学会 DICO2008
134	全 昶星	電子情報工学	D3	Synthesis of Tin-Catalyzed Silicon Nanowires using the Hydrogen radical-assisted Deposition Method and Its Application for Solar Cells	Renewable Energy 2008

④生物システム応用科学府 (BASE) (前期) : 3件

	氏名	学科・専攻名	学年	発表題目	学会名
1	當山 優太	生物システム応用科学	M1	遺伝子操作技術を用いたバイオアクチュエータの発生力向上と力学性能評価に関する研究	ロボティクス・メカトロニクス講演会2008
2	山本 博国	生物システム応用科学	M1	気-液界面を晶析場とした有機微結晶粒子群の創製*奨励賞 東洋エンジニアリング賞受賞*	分離技術会
3	田中 敬三	生物システム応用科学	D2	溶融金属積層による三次元造形	型技術者会議

(後期) : 27件

	氏名	学科・専攻名	学年	発表題目	学会名
1	重力坤 重夏爾	生物システム応用科学	M1	微小水圧駆動による多自由度バイオマニピュレーションの検討	計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会
2	青井 良文	生物システム応用科学	M1	超音響自励振動を用いた液体窒素液面位置の測定	低温工学・超電導学会
3	永田 翔平	生物システム応用科学	M1	進行波型超音響エンジンの発振温度比に関する数値計算	第13回動力・エネルギー技術シンポジウム
4	木内 智	生物システム応用科学	M1	炭素鋼 S45C における摩擦攪拌形パニングによる表面硬化層の生成 *優秀論文賞*	第9回製造技術と経営についての国際会議
5	丁 侃	生物システム応用科学	M1	4気筒エンジンブロックのフィンポーリングにおける加工精度に関する研究	日本機械学会第7回生産加工・工作機械部門講演会
6	吉丸 玲欧	生物システム応用科学	M1	アーク放電を用いた溶融金属積層におけるビート形成と造形物強度	日本機械学会第7回生産加工・工作機械部門講演会
7	遠藤 司	生物システム応用科学	M1	The music analysis method based on melody analysis	ICCAS2008
8	富田 洋平	生物システム応用科学	M1	The EEG analysis method for obtaining the feeling	ICCAS2008
9	鈴木 聡	生物システム応用科学	M1	A human tracking system on the robot with face detection	NCSP' 09
10	阪本 紘嗣	生物システム応用科学	M2	Automatic keyword additional system by using the GA and the fuzzy analysis	NCSP' 09
11	土肥 賢大郎	生物システム応用科学	M2	Face detection using near- infrared camera and evolutionary algorithms	NCSP' 09
12	村上 純子	生物システム応用科学	M2	Classification of the vision correction by the EEG	NCSP' 09
13	深田 陽介	生物システム応用科学	M2	The extraction of the personal coloration pattern for color design system	SCIS & ISIS 2008
14	岩下 龍司	生物システム応用科学	M2	樹脂切削時の工具切れ刃近傍の力学的状態と工具摩耗への影響	精密工学会 春季大会
15	松丸 哲史	生物システム応用科学	M2	溶融金属積層におけるテーブル傾斜が溶接ビードに及ぼす影響	精密工学会 秋季大会
16	福田 理明	生物システム応用科学	M2	バッチ分割切削法における規則的表面模様形成(バッチ内模様制御と加工経路生成)	日本機械学会第7回生産加工・工作機械部門講演会
17	下川 哲	生物システム応用科学	M2	大気圧空気をを用いた進行波型超音響冷凍機の装置形状最適化	低温工学・超電導学会
18	斎藤 陽	生物システム応用科学	M2	HPA ゼオライトを用いた吸着冷凍サイクルの研究 *優秀講演賞*	日本冷凍空調学会
19	永木 文子	生物システム応用科学	M2	種晶無添加系回冷却晶析での変調操作が結晶粒子群の品質に与える影響	化学工学会 第74年会
20	大沼 雅隆	生物システム応用科学	M2	添加物存在下でのアセトアミノフェン結晶の多形転移現象の解析	化学工学会 第74年会
21	小谷 拓也	生物システム応用科学	M2	BT 菌 Cry 毒素の進化分子工学・受容体に高親和性を有したファージディスプレイ Cry 毒素の選抜	BMB 2008
22	丹羽 将之	生物システム応用科学	M2	カイコガ幼虫で発現する味覚受容体の探索および機能解析	BMB 2008
23	吉澤 靖貴	生物システム応用科学	M2	カイコガ幼虫の味覚受容体およびOBP様タンパク質の発現部位同定のための免疫組織化学的手法の検討	BMB 2008
24	小幡 史明	生物システム応用科学	M2	Analysis of receptor-binding region for effective improvement of Cry1 Aa insecticidal activity	41st annual meeting of the SIP
25	山本 博雅	生物システム応用科学	D1	複合加工機を用いた難削材のロータリ切削における刃先温度特性と切りくず生成に関する研究	日本機械学会第7回生産加工・工作機械部門講演会
26	井倉 将人	生物システム応用科学	D2	サゴヤシ澱粉抽出残渣から製造した重金属吸着材のカドミウム吸着特性 *優秀発表賞*	第17回サゴヤシ学会
27	深井 寛修	生物システム応用科学	D2	年齢推定のための年齢特徴抽出	電気学会電子・情報・システム部門大会

⑤技術経営研究科 (MOT) (前期) : 1件

	氏名	学科・専攻名	学年	発表題目	学会名
1	花田 道庸	技術リスクマネジメント	M1	電界放射電流誘起型 EM を用いたナノギャップ電極の特性制御における電極形状の検討	秋季 応用物理学会

(後期) : 3件

	氏名	学科・専攻名	学年	発表題目	学会名
1	木森 将仁	技術リスクマネジメント	M2	静電誘導給電を用いた微細放電加工における放電痕径分布	精密工学会 秋季大会
2	山田 貴久	技術リスクマネジメント	M2	ガス漏洩のリスクコミュニケーション	日本学術会議
3	山中 直機	技術リスクマネジメント	M2	トウガラシに含まれるジヒドロカプサイシンの骨への作用	日本臨床栄養学会

2. コンテスト・コンクール等出場、入賞（7件）

	氏名	学科・専攻名	学年	コンクール・コンテスト名	入賞等
1	田中 宏幸(他1名)	化学システム	4年	化学工学会 学生ソフトウェアコンテスト 「エチルベンゼンの脱水素によるスチレンモノマーの製造」	
2	川口 牧男(他2名)	地域生態システム	4年	物理探査学会学生アイデア・コンペティション 「家庭単位でのバイオガス有効利用サイクルの提案」	優秀賞
3	田中 宏幸 TAN KHEE SEAN	化学システム	4年	化学工学会 SIS 部会 ソフトウェア・ツール学生コンテストプロセス設計部門 「エチルベンゼンによるスチレンモノマーの製造プロセスの設計」	トクヤマ賞
4	田中 美優(他1名)	農業環境工学	M1	物理探査学会学生アイデア・コンペティション 「道路熱は地球を救う」	シュルンベルジェ賞
5	槇島 量(他1名)	情報工学	M1	日経テクノネサンスジャパン 「スケジュール推薦サービス ふらっとナビ」	ナビタイムジャパン最優秀賞
6	成平 拓也(他5名)	電気電子工学	M1	3D Segmentation in the clinic :A grand challenge II 「3次元CT像からの肝臓腫瘍のセグメンテーション性能コンテスト」	First Prize
7	木本 達也(他1名)	電気電子工学	M2	第2回臓腑CAD コンテスト 「3次元腹部CT像からのすい臓領域の抽出」	CADM学会大会 大会賞

3. 優秀卒業論文（2件）

	氏名	学科・専攻名	学年	卒論題目
1	白石 梓	地域生態システム	4年	認証取得者の意識から明らかにする森林認証制度の普及と特徴
2	谷合 枝里子	獣医学科	6年	ラット肝発がんプロモーションにより生じる GST-P 陽性の変異肝細胞巣と腫瘍で特異的に発現変化を示す PTEN/Akt2 経路分子と TGF β 受容体

4. 課外活動

- (1) 学園祭 2件 農学部/工学部(学園祭実行委員会)
- (2) サークル活動 20件 美術部/植物研究会/作曲・DTMサークル/陸上競技部/昆虫研究会/アカペラサークル ANIT/ツーリングカヌー部/スキー部 FELOZE/ギター部/軽音楽部/ヨット部/山岳部/囲碁部/洋弓部/モダンジャズ研究会/将棋部/フォークダンス部/ソフトボール部/ISサークル/ゴルフ部
- (3) サークルリーダーズトレーニング 1件
サークルリーダーズトレーニング研修会、学生OBによる講演

5. キャリアアドバイザー支援（2名）

学生の皆さんが、進路や就職について個別に指導・助言を受けられるように、豊富な経験と知識を有する相談員（キャリアアドバイザー）2名を同窓会として支援しております。
櫻井 邦雄（農化 S37）/ 薨 秀磨（工化 S39）

同窓会役員等 体制

会 長 藤森 明彦（工化 S42）（平成21・22年度）

副会長（平成21・22年度）

藤巻 宏（農 S36） 草野 洋一（養蚕 S47）
安藤 哲（植防 S47） 竹内 道雄（農化院 S50）
佐渡 篤（林産 S38） 星野 義延（環保 S53）
松井 英輔（林 S38） 田内 堯（農工 S35）
本間 秀和（地生 H12） 田谷 一善（獣医 S46）
西出 照雄（製糸 S41） 壁矢 久良（織工 S35）
町山 紀郎（工化 S39） 遠藤 幸一（工化 S46）
尾崎 幸信（機械 S52） 宇野 亨（電気 S55）
大野 直次（応物 S47） 大島 浩太（数情 H13）
渡邊 俊夫（獣医 S49） 齋藤 隆（生シ院 H11）

副部長 大谷 幸利（機シ S62） 会務担当

経 理 部 長 多羅尾光徳（環保 H3）

副 部 長 斎藤美佳子（工化 H1）

事 業 部 長 淵野雄二郎（農 S43）

副 部 長 岡山 隆之（林産 S49） 企画担当

募 金 担 当 部 長 松岡 正邦（化工 S43）

名 簿 担 当 部 長 並木美太郎（数情 S59）

副 部 長 大里 耕司（農工 S52）

広 報 部 長 佐藤 敬一（林産 S56）

副 部 長 滝山 博志（化工 S62） HP担当

副 部 長 及川 洋征（林 H2） HP担当

副 部 長 大川泰一郎（農 S62） 会報担当

副 部 長 夏 恒（機シス工博 H7） 会報担当

常 務 理 事（平成20・21年度）

理 事 長 亀山 秀雄（化工 S48）

副 理 事 長 高橋 幸資（農化 S45）

総 務 部 長 堀 三計（機械 S52）

副 部 長 渡辺 元（獣医 S54） 支部担当

副 部 長 渡邊 敏行（材シス S61） 総会担当

監 事（平成20・21年度）

壁矢 久良（織工 S35）

深水 智明（織工 S38）

坂野 好幸（農化 S40）

事 務 局 長 山田 昭一

部会・支部 だより

新潟県支部



日時 平成20年6月6日
 開催場所 新潟市「クオリスビル」
 参加者数 23名
 議事内容 新役員の承認他、本部50周年記念事業の概要の報告
 講演・討論等 新たな役員体制での支部同窓会活動の活性化について。駒場寮歌の合唱等

神奈川県支部



日時 平成20年8月23日
 開催場所 「和み亭」海老名中央店
 派遣理事名 高橋幸資副理事長
 参加者数 31名
 議事内容 平成19年度決算・監査報告、平成20年度予算の承認
 講演・討論等 同窓会創立50周年記念事業の説明

秋田県支部



日時 平成20年10月25日
 開催場所 秋田市「武志」
 派遣理事名 高橋幸資副理事長
 参加者数 26名
 議事内容 秋田県立大と農工大が連携協力基本協定を締結等
 講演・討論等 母校の近況報告、講演、参加者の交流

徳島県支部



日時 平成20年10月25日
 開催場所 徳島市「伊月笹乃庄」
 参加者数 6名
 議事内容 収支報告、情報交換
 講演・討論等 懇親会・参加者の交流

製糸部会女子部



日時 平成20年10月22日～24日
 開催場所 ホテル湯沢・湯沢でんき屋
 参加者数 10名
 議事内容 今後の女子部の活動について、会計決算報告他
 講演・討論等 明治後期から続く製糸教婦科の伝統技術を今後とも社会に普及して欲しいと言った強い要望が出た。それに対し現在も伝統技術を普及していることを具体的に説明した。

福島県支部



日時 平成20年7月12日
 開催場所 福島グリーンパレス
 派遣理事名 高橋幸資副理事長
 参加者数 約40名
 講演・討論等 同窓会創立50周年記念事業の説明

島根県支部



日時 平成20年8月31日
 開催場所 松江市「ホテル穴道湖」
 参加者数 9名
 議事内容 第45回通常総会の概要報告
 講演・討論等 講演「インドネシアでの農業技術指導について」多田正哉氏(獣医S36)

兵庫県支部



日時 平成20年11月16日
 開催場所 兵庫県民会館
 派遣理事名 堀三計総務部長
 参加者数 18名
 議事内容 平成19年度会計報告、来年度総会について
 講演・討論等 農工大の近況
 講演「光」と「半導体」の関係について」竹本菊郎氏(H18応用化学専攻博士課程)

岐阜県支部



日時 平成20年3月23日
 開催場所 長良川会館
 参加者数 8名
 議事内容 平成18,19年度決算報告、岐阜県支部会則について

宮崎県支部



日時 平成20年7月12日
 開催場所 花ふく
 参加者数 19名
 議事内容 平成19年度決算、平成20年度事業報告
 講演・討論等 同窓会創立50周年記念事業への寄附の承認

三重県支部



日時 平成20年9月14日
 開催場所 津市「新玉亭」
 派遣理事名 多羅尾光徳経理部長
 参加者数 14名
 議事内容 本部総会報告、役員改選、同窓会創立50周年記念事業の募金について
 講演・討論等 母校の近況報告

長崎県支部



日時 平成20年11月22日
 開催場所 セントヒル長崎
 参加者数 17名
 議事内容 平成19年度事業報告・決算報告、平成20年度事業計画

大分県支部



日時 平成20年11月22日
 開催場所 大分市「割烹さとう」
 派遣理事名 蛭木理教授
 参加者数 17名

横浜会



日時 平成20年5月30日
 開催場所 横浜市「華正楼本店」
 参加者数 10名
 議事内容 第45回通常総会報告、会計・監査報告
 講演・討論等 蚕糸・絹業支援緊急対策の概要について説明、懇親会

山口県支部



日時 平成20年7月21日
 開催場所 防府市「玉泉湖温泉」
 参加者数 10名
 議事内容 第45回通常総会の報告、平成19年度事業・決算報告、平成20年度事業・予算計画、役員改選、平成21年度支部総会の持ち方について
 講演・討論等 防府市名所巡り

岡山県支部

日時 平成20年9月28日
 開催場所 ビュアリティまきび
 派遣理事名 高橋幸資副理事長
 参加者数 12名
 議事内容 平成19年度事業・会計報告、その他
 講演・討論等 同窓会創立50周年記念事業の説明・母校の近況、懇親会

青森県支部



日時 平成20年11月29日
 開催場所 青森市「ラ・プラス青い森」
 参加者数 14名
 議事内容 支部役員、同窓会創立50周年記念事業、記念事業に係る募金、会員名簿について
 講演・討論等 会員の近況報告、懇親会

埼玉県支部



日 時 平成20年11月29日
 開催場所 バイオランドホテル
 派遣理事名 大里耕司名簿担当副部长
 参加者数 31名
 議事内容 平成19年度事業報告・決算報告、平成20年度事業計画・予算案
 講演・討論等 同窓会創立50周年記念事業の支援要請

愛知県支部



日 時 平成20年11月29日
 開催場所 ホテルアソシア20階「頤和園」
 派遣理事名 渡辺元総務副部长
 参加者数 14名
 議事内容 平成19年度収支決算報告、支部会則の一部改正
 講演・討論等 母校の近況報告、同窓会創立50周年記念事業の支援要請

愛媛県支部



日 時 平成21年2月14日
 開催場所 松山市「えひめ共済会館」
 派遣理事名 洲野雄二郎事業部長
 参加者数 22名
 議事内容 運営報告、本部同窓会参加報告、会計報告・監査報告、支部会則改定、役員改選
 講演・討論等 講演「母校の近況等について」、同窓会創立50周年記念事業の支援要請、懇親会

岐阜県支部



日 時 平成21年4月5日
 開催場所 ホテルグランヴェール岐山
 派遣理事名 大谷幸利総務副部长
 参加者数 11名
 議事内容 平成20年度事業報告、会計報告、同窓会創立50周年記念事業について

千葉県支部



日 時 平成20年11月29日
 開催場所 千葉市内
 派遣理事名 佐藤敬一広報部長
 参加者数 60余名
 議事内容 議事を可決承認
 講演・討論等 叙勲祝賀会、母校・本部の近況報告、講演「森林環境教育について」、懇親会

佐賀県支部



日 時 平成20年11月29日
 開催場所 佐賀市「おおしま」
 参加者数 8名
 議事内容 母校・本部同窓会・佐賀県支部のうごきについて、会計報告
 講演・討論等 会員の近況報告、意見交換等、懇親会

福井県支部



日 時 平成21年3月14日
 開催場所 福井市「割烹おお田」
 参加者数 21名
 議事内容 役員改正、同窓会創立50周年記念事業について
 講演・討論等 懇親会・参加者の交流

新潟県支部



日 時 平成21年6月5日
 開催場所 新潟市「クオリスビル」
 参加者数 28名
 議事内容 本部総会の議事報告
 講演・討論等 現役学生の農業研修受け入れの概要報告（上越市・今井氏）、懇親会

日 時 平成20年12月6日
 開催場所 KKR札幌ホテル
 派遣理事名 堀三計総務部長
 参加者数 16名
 議事内容 事業報告、会計監査報告
 講演・討論等 母校の近況報告、講演「酪農の今日のあり方を考える」(酪農学園大学・荒木和秋教授)、懇親会

広島県支部

日 時 平成21年2月1日
 開催場所 鯉城会館
 参加者数 14名
 議事内容 会計報告、役員承認
 講演・討論等 同窓会総会の報告、参加会員の近況報告

山梨県支部



日 時 平成21年3月14日
 開催場所 甲府市「ヘルクラシック甲府」
 派遣理事名 佐藤敬一広報部長
 参加者数 35名
 議事内容 会計報告、役員改選
 講演・討論等 母校の近況報告、同窓会創立50周年記念事業の支援要請、森林環境教育について、懇親会

富山県支部



日 時 平成21年3月14日
 開催場所 庄川温泉ゆめつづり
 派遣理事名 大川泰一郎広報副部长
 参加者数 14名
 議事内容 平成20年度会計報告、役員改選、同窓会本部からの報告等

横浜会



日 時 平成21年6月12日
 開催場所 横浜市「華正楼本店」
 参加者数 10名
 議事内容 第46回通常総会報告、横浜会会計報告・会計監査報告、横浜会会長選任
 講演・討論等 同窓会創立50周年記念事業の協力要請、50年史発行の執筆の件、懇親会

山口県支部



日 時 平成21年7月11日～12日
 開催場所 下関市「一の保温泉」
 参加者数 9名
 議事内容 第46回通常総会報告、平成20年度事業・決算報告、平成21年度事業・予算計画、支部会則の一部改正、平成22年度支部総会の持ち方について
 講演・討論等 視察研修(豊田町農林公園「みよりの丘」、山口県農林総合技術センター畜産技術部)

クラス会 だより

S37年度農芸化学科同窓会



日 時 平成20年9月27日
 開催場所 同窓会館 武蔵野荘、50周年ホール
 クラス S37農芸化学科卒
 参加者数 20名
 実地事項 卒後50周年記念の集い

武蔵野38人会



日 時 平成20年10月22日～23日
 開催場所 戸倉上山田温泉
 クラス S26製糸学科卒
 参加者数 15名
 実地事項 親睦

第20回拓二同期会



日 時 平成21年10月9日
 開催場所 学士会館
 クラス S17拓殖卒
 参加者数 5名
 実地事項 親睦

フサク会



日 時 平成20年4月14日～19日
 開催場所 台湾
 クラス S39工業化学科卒
 参加者数 15名
 実地事項 親睦、観光（台湾高分子工業股份有限公司表敬訪問）

余燦会



日 時 平成20年5月17日～18日
 開催場所 農工大農学部、馬術部及び大國魂神社、奥多摩、澤の井酒造
 クラス S43農芸化学科卒
 参加者数 17名
 実地事項 卒後40周年記念の集い

ポプラ会



日 時 平成20年9月29日～30日
 開催場所 新潟県佐渡、両津温泉吉田屋
 クラス S30獣医学科卒
 参加者数 20名
 実地事項 情報交換、懇親

ラグビー部シニアOB会2008



日 時 平成20年10月9日～10日
 開催場所 茨城県袋田温泉
 クラス ラグビー部シニアOB会
 参加者数 15名
 実地事項 連続10回目の集い、矍鑠たる83歳の大先輩も参加、親睦、活力・健康へのスクラムトライ

S30年度養蚕学科卒業生の会



日 時 平成20年10月23日～24日
 開催場所 伊香保温泉「ホテル天坊」
 クラス S30養蚕学科卒
 参加者数 17名
 実地事項 親睦、見学（群馬県「日本絹の里」等）

S32セリカクラス会



日 時 平成20年10月24日
 開催場所 群馬県尻焼温泉
 クラス S32養蚕学科卒
 参加者数 15名
 実地事項 河川の川底より湧出の温泉確認

S31農学科・農芸化学科合同クラス会

日時 平成20年10月31日
 開催場所 「響」(有楽町イトシア店)
 クラス S31農学科・農芸化学科卒
 参加者数 10名
 実地事項 情報・近況交換・親睦

31E会 2008

日時 平成20年11月5日
 開催場所 甲斐の国下部温泉
 クラス S31農業工学卒
 参加者数 5名
 実地事項 親睦、観光

多摩留会

日時 平成20年11月11日～12日
 開催場所 鴨川温泉「ホテル中村」
 クラス S31獣医学科
 参加者数 8名
 実地事項 情報交換、懇親

機械81会

日時 平成20年11月15日
 開催場所 伊香保温泉「ホテル轟」
 クラス S56機械工学科卒
 参加者数 13名
 実地事項 近況交換・親睦

S23蚕業実科

日時 平成20年11月18日～19日
 開催場所 箱根湯本「吉池」
 クラス S23蚕業実科卒
 参加者数 12名
 実地事項 情報交換・親睦

S33養蚕学科クラス会

日時 平成20年11月20日～21日
 開催場所 横浜市ロイヤルウイング
 クラス S33養蚕学科卒
 参加者数 10名
 実地事項 卒業50年の集い・小金井キャンパスの見学・島田俊弘氏の叙勲祝賀会

織工38会

日時 平成21年3月27日～28日
 開催場所 東京上野 水月ホテル鷗外荘
 クラス S38繊維工学科卒
 参加者数 18名
 実地事項 古希の祝い、親睦

S41機械工学科同期会

日時 平成21年4月25日～26日
 開催場所 箱根
 クラス S41機械工学科卒
 参加者数 14名
 実地事項 情報交換、親睦

ポプラ会

日時 平成21年5月19日～20日
 開催場所 大平台温泉「大平荘」
 クラス S30獣医学科
 参加者数 22名
 実地事項 情報交換、懇親

掲 示 板

小畑秀文学長再任

4月1日（水曜日）、50周年記念ホールにおいて多数の教職員が出席するなか、小畑秀文学長の再任に伴う就任式が行われ、小畑学長から就任にあたっての挨拶がありました。

平成21年度役員を以下のとおり、紹介いたします。



		任 期
学長	小畑 秀文	平成21年4月1日～平成23年3月31日
理事 教育担当副学長	笹尾 彰	平成21年4月1日～平成23年3月31日
理事 学術・研究担当副学長	松永 是	平成21年4月1日～平成23年3月31日
理事 広報・国際担当副学長	小野 隆彦	平成21年4月1日～平成23年3月31日
理事 総務担当副学長	竹本 廣文	平成21年4月1日～平成23年3月31日
監事	柚木 俊二	平成20年4月1日～平成22年3月31日
監事（非常勤）	藤原 輝夫	平成20年4月1日～平成22年3月31日

あの「生協の白石さん」を「東京農工大学広報大使第1号」に任命



【広報大使認証書授与式の様子】

東京農工大学は、東京農工大学生協から東京インターカレッジコープ(*1)へ2008年11月16日付けで異動し店長とされた、あの「生協の白石さん」こと白石昌則氏を東京農工大学広報大使第1号に任命し、2009年1月7日に広報大使認証書授与式を挙行了しました。広報大使としての任期は2009年1月1日から2010年12月31日までです。

白石昌則氏プロフィール

1969年6月生まれ。信州大学卒。1994年早稲田大学生協入協。2004年12月東京農工大学生協へ異動。2008年11月東京インターカレッジコープへ店長として異動。趣味はバイク、音楽、スノーボード、ダーツなど。

(*1) キャンパス内に生協がない学生・教職員が個人で加入できる大学生協として、1993年7月創立。渋谷(本部)と市ヶ谷に店舗がある。

慶
弔

慶事 お祝い申し上げます
 平成19年春の叙勲
 岡崎 義雄(農土S24) 瑞宝双光章
 平成19年秋の叙勲
 町田 暢(農学S17) 瑞宝双光章
 平成20年春の叙勲
 廻谷 義治(農学S38) 瑞宝双光章
 平成20年秋の叙勲
 庄司 健男(製糸S28) 旭日双光章

山本 敏夫(林S16) 瑞宝小綬章
 鈴木 正治(名誉教授) 瑞宝中綬章
 村上 毅(養蚕S35) 瑞宝中綬章
 貝塚 一郎(獣医S34) 瑞宝小綬章
 田内 堯(農工S35) 瑞宝小綬章
 平成21年春の叙勲
 杉山 俊宏(林S36) 瑞宝小綬章
 藤巻 宏(農S36) 瑞宝中綬章

弔事 ご冥福をお祈り申し上げます
 有賀 満一(養蚕S16) 山梨県支部長
 久米 清治(獣医S10) 名誉教授
 橋谷 卓成 名誉教授
 北村 愛夫(糸専S23) 名誉教授
 廣田 好和 獣医学科教授
 神崎 伸夫(環保院S63) 地域生態システム学科准教授

農工大ブランド焼酎「賞典禄」の原酒 新発売!! ネット販売も可能に!!

ご好評いただいている「賞典禄(しょうてんろく)」の米焼酎と麦焼酎について、それぞれ原酒を発売いたしました。原酒は焼酎の個性そのものが凝縮されていてレギュラー焼酎とはまた一味違う魅力がありますのでお試しください。(芋の原酒も今後発売予定)

多くの卒業生の皆様に味わって頂けるようインターネットによる販売ができるようになりました。また、レギュラー焼酎については今回300円の値下げをしました。さらに配送先1ヶ所につき5,000円以上のご注文の場合に送料を無料にさせていただきます。

代金の支払方法は、代金引換かクレジットカードになります。詳しくは下記URLをご覧ください。

ネット販売対応商品

商品種類	度数	容量	販売価格
原酒 米焼酎(つぼ入り)	43度	720ml	2,700円
原酒 麦焼酎(つぼ入り)	43度	720ml	2,700円
米焼酎	25度	720ml	1,700円
芋焼酎	25度	720ml	1,700円
麦焼酎	25度	720ml	1,700円
米・芋・麦 3種セット (セット用化粧箱入り)	25度	720ml×3	5,100円

ネットショップサイト：<http://www2.enekoshop.jp/shop/noukoudai/>
 同窓会のホームページからも本サイトに入れます。(トップページにリンクをはっておりますのでご利用ください。)
 ※電話、FAXでのご注文はできませんので、予めご了承願います。



左から、原酒(米)、原酒(麦)



左から、米焼酎、芋焼酎、麦焼酎

問い合わせ先：農学部附属フィールドサイエンスセンター事務局
 TEL 042-367-5812

皆さん 楽しく 集まりましょう

東京農工大学
 同窓会東京支部

「けやきクラブ」

「けやきクラブ」は支部に関係なく、どなたも参加できます(予約なし フリー)
 大正・昭和・平成それぞれ オークー 一人でも、友達連れでも

おしゃべり自由

毎月第3火曜日 6:00p.m~8:00p.m. (時間きっちり)

新宿「中村屋 本店」4階

電話 03-3352-6164

レストランバー(ラコンテ) けやきクラブ席

住所 新宿区新宿3-26-13

飲み物・食べ物 ワリカン制(大体3000円~4000円)

2009年4月例会
 神谷秀博先生をはじめ、
 本学大学院共生科学技
 術研究院の教授陣を囲
 んでの、意見交換会
 参加者数：19名



アクセス

地下鉄 丸の内線「新宿駅」
 または「新宿三丁目駅」
 3分 A6出口
 JR 新宿駅 東口 三越の並び
 フルーツ高野の隣り

お問い合わせ

けやきクラブ会長 渡辺 彰 090-8051-1798 | 東京支部長 馬場 信行 03-3641-3882
 事務局 磯野 司 090-3878-5418 | 東京事務局長 山本 賢 090-4729-2114

女性未来育成機構は、これからも農工大卒業生の ブラッシュアップ・キャリアアップを応援します！

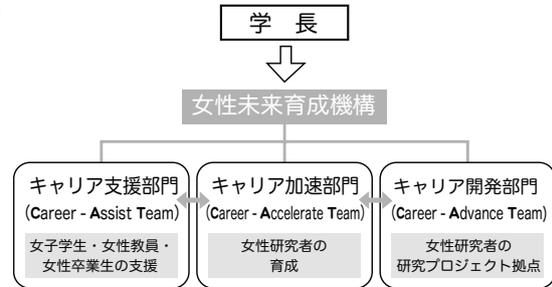
女性未来育成機構が新設されました！

女性未来育成機構は今年2月、本学の女性研究者の育成と活躍推進のために、女性キャリア支援・開発センターの発展した組織として設立されました。本機構は、女性研究者の支援と環境整備を実施する「キャリア支援部門」、女性研究者養成のための教育プログラムを行う「キャリア加速部門」、女性研究者のプロジェクト研究拠点を担う「キャリア開発部門」の3部門からなり、女性研究者の教育力および研究力向上に向けた取り組みを行っています。女性キャリア支援・開発センターがこれまで担ってきた女子学生対象のキャリアパス支援、女性教員・研究者対象の出産・育児・介護支援、女性卒業生対象の卒業生支援、全学的なエンパワーメント環境整備の4つの事業は「キャリア支援部門」に移行し、今後も本学に関わる全世代の女子学生・女性研究者・女性卒業生をサポートします。

今年6月には、文部科学省科学技術振興調整費委託事業「女性研究者養成システム改革加速」に本学の「理系女性のキャリア加速プログラム」が採択されました。本振興調整費は、多様な人材の育成・確保及び男女共同参画推進の観点から、特に女性研究者の採用割合等が低い理学系、工学系、農学系の分野において、優れた女性研究者の養成を加速するプログラムです。

本学では女性未来育成機構が中心となり、女性研究者の活躍を支援します。

東京農工大学 女性未来育成機構図



卒業生のためのブラッシュアップ情報

◆研究生・科目等履修生の入学料・授業料優遇制度（男性も女性も利用できます）

区分	研究生	科目等履修生
検定料	9,800円 (9,800円)	9,800円 (9,800円)
入学料	0円 (84,600円)	0円 (28,200円)
授業料	(月額) 14,800円 (29,700円)	(1単位) 7,400円 (14,800円)

※()内は本学卒業生等以外の金額

例) 研究生として2年間在籍する場合

計 807,200 円	
授業料 2年目 356,400 円	授業料 1年目 356,400 円
計 365,000 円	入学料 84,600 円
授業料 2年目 177,600 円	検定料 9,800 円
授業料 1年目 177,600 円	検定料 9,800 円
検定料 9,800 円	
本学卒業生	他大学卒業生

◆女性卒業生ネットワークシステム（農工大SNS）

「農工大SNS」には、ブラッシュアップ教材、求人情報等の他、出産・育児・介護相談室(本学出身の相談員)、再就職・キャリアアップ情報等のコミュニティを用意しており、卒業生の交流スペースとして活用できます。ブラッシュアップ・キャリアアップにご興味をお持ちの方は、女性未来育成機構(旧女性キャリア支援・開発センター)から郵送されたID・パスワードを使ってアクセスして下さい(パスワードを忘れた場合は、下記アドレスまでご連絡下さい)。

お問合せ先：東京農工大学 女性未来育成機構

e-mail : joseispt@cc.tuat.ac.jp HP アドレス : <http://www.tuat.ac.jp/~dan-jo/center/index.html>
府中機構オフィス 042-367-5945(Tel)/5643(Fax) 小金井機構オフィス 042-388-7362(Tel)/7643(Fax)

JIMUKYOKU-DAYORI

事務局だより

「住所・勤務先等の変更届のお願い」

住所、勤務先等の変更があった場合には、すみやかに変更連絡票はがき、電話、メールなどで事務局までご連絡いただきたくお願い申し上げます。事務局では転居され、郵便物が返送された会員の方に現住所等のお問い合わせをしております。

また、同窓会会員名簿等に「住所・勤務先・電話番号」について非掲載をご希望される方は、メール・はがき等でご連絡いただきますようお願いいたします

同窓会ホームページのご案内 <http://tuat-dousoukai.jp/>

リニューアルしました同窓会HPでは内容を随時更新し、農工通信に先駆けて最新情報を掲載していますので是非ご利用下さい。また、部会・支部、クラス会便りも電子媒体でお送りいただければ、随時掲載いたしますので、当日参加できなかった方もHPでご覧いただくことが出来ます。

どうぞ下記アドレスまでお送り下さい。お待ちしております。

E-mail: info@tuat-dousoukai.jp

会費納入のお願い

★ 会費は同窓会活動の原動力です。正会員は同封の払込票にて次のいずれかの方法で会費を納入してください。

- 終身会費は30,000円
- 年会費は1,500円

- ★ 払込票が同封されていない方は納入済です。
- ★ 過去にさかのぼって納入の必要はありません。

お詫びと訂正

本誌79号34頁同窓生からの寄稿「過去のモノは不要か？」において筆者のお名前に誤りがありました。関係各位および読者の皆様にお詫び申し上げます。以下のとおり訂正してください。

門屋 一臣（農S33）を
藤本 雅之（機シスH7）に訂正

【慶弔についてのご連絡】

同窓会正会員の慶事および弔事の際には、会員の方々からのご連絡に基づき、同窓会から祝電あるいは弔電をお送りしてきております。

このような慶弔事のご連絡の際に、次のような事項についてあわせてご連絡ください。

1. 慶事（褒賞、叙勲等）の場合
 - ・受章者、受賞者の氏名、年齢、卒業年次、学科、住所、電話等
 - ・受章、受賞の種類（褒賞、叙勲その他の賞の種類）
 - ・受章、受賞の日時
2. 慶事（選挙の当選等）
 - ・当選者氏名
 - ・選挙の種類
 - ・就任年月日
3. 弔事の場合
 - ・逝去者の氏名、年齢、卒業年次、学科、住所、電話等
 - ・ご遺族（喪主）の氏名（逝去者との続柄）
 - ・通夜の日時、場所
 - ・告別式の日時、場所

【お願い】

各期のクラス会や地区別の集まり、同好の集まりにも創立50周年記念事業の募金に関して呼びかけをしたいため幹事、代表者の方は下記内容の情報提供をお願いいたします。

- ・クラス会名
- ・開催日時
- ・開催場所
- ・連絡先

農工大産官学連携支援OBの会

会員募集中!



特許活用・共同研究

産官学連携の共同研究などの特許・技術の有効活用や支援をおこなっています。

起業家育成

ビジネスプラン作成などのメンタリングや、ベンチャー企業の経営支援をおこないます。

インターンシップ・就活支援

学生のインターンシップ先の斡旋やキャリアパス就職活動のメンタリングをおこないます。

セミナー・講演会

セミナーや講演などの企画、開演などの支援をおこなっています。

入会お申込はこちら 年会費は 6,000 円です!

<http://www.at-netz.jp>

TEL/FAX 0463-94-6744 (深水)



一般社団法人エー・ティー・ネッツ

東京農工大学の産官学連携活動を支援するために設立された組織です。

AT-Netz

地元 小金井市の商社

株式会社 高岡機工

〒184-0001 東京都小金井市関野町1-4-6

TEL : 042-383-6100 FAX : 042-384-4993

E-Mail : takaoka@basil.ocn.ne.jp

☆お気軽にお問合せ下さい。

《営業内容》

- * 研究諸機材の製作及び販売
- * 金属材料・樹脂材料・木材・試験片・ネジ類・配管部材
- * 装置部材・装置部品 (ベアリング、シャフト、ギヤ類、モーター、機械周辺機器 etc)
- * 各種工具 (切削工具・測定工具・作業工具・補用工具 etc)
- * 受託加工・部品加工 (NC・MC加工・旋盤加工・ワイヤー加工・溶接加工)
- * 工作機械・研究装置・測定器・理化学機器・作業台・実験台
- * 修理、オーバーホール、アフターフォロー、加工相談、各メーカー情報の提供



牧場産直 価値ある本物

- * 新鮮！美味！安心！「ゴールデンポーク」「スーパーゴールデンポーク」
- * ドイツ DLG 国際食品品質競技会 9年連続金メダル受賞！
「世界が認めたハム・ソーセージ、デリカ調理食品」
- * 本物の食と健康の理想郷！「ミートショップ・レストラン・地元農産物直売所・天然温泉まきばの湯・パークゴルフ場他」P1000 台完備

株式会社 **埼玉種畜牧場・サイポクム**
代表取締役会長 **笹崎龍雄**（昭和15年・獣医学科卒）

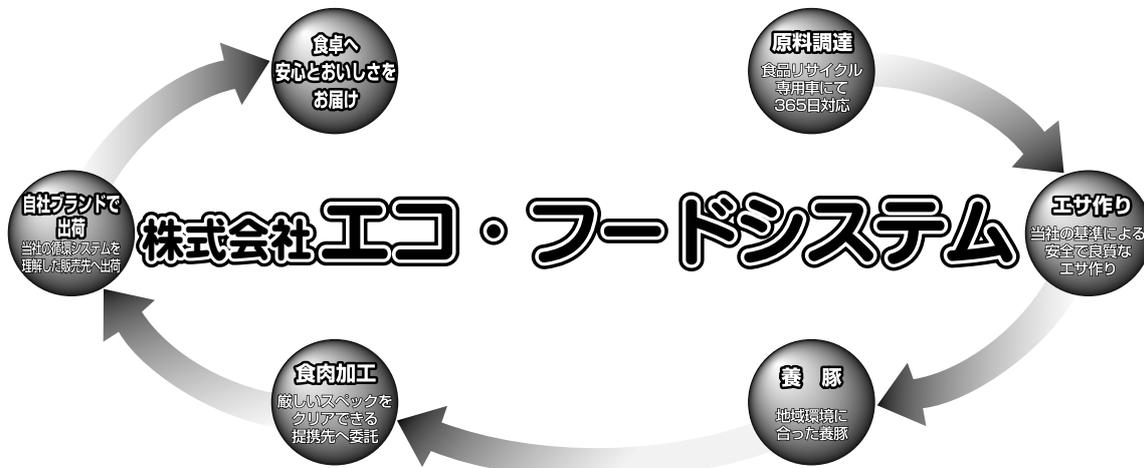
TEL. 042-989-2221（代） FAX. 042-989-7933

<http://www.saiboku.co.jp/> 〒350-1221 埼玉県日高市下大谷沢546

安全でおいしい肉を召しあがって、クリーンな地球環境づくりのお手伝いを...

食品副産物を利用した飼料原料から作ったエサで豚を飼育し、養豚から食肉加工、出荷まですべて自社一貫生産する、クリーンで安全なリサイクル工程が、エコ・フードシステムです。

飼料の製造から食肉の出荷まで、クローズドサークルの中で進行するので、クリーンな環境づくりと、畜産業の改良発展を両立させた画期的なシステムです。



会長 熱田正行 (S44農学科卒)

〒289-3186 千葉県匝瑳市川辺208-1 TEL 0479-67-1025 FAX 0479-67-1026

E-mail cmrhq375@ybb.ne.jp

試薬 理化学機器

株式会社 三友商会

代表取締役 金 森 信 次

〒183-0041

東京都府中市北山町2-33-58

PHONE 042(502)1200

FAX 042(502)1300

E-MAIL sanyuu@jcom.home.ne.jp

財団法人 日本食品分析センターは
分析試験を通じて社会の進歩、
発展に貢献します。



食料・飼料の栄養分析

食料・飼料の衛生試験

環境の分析

医薬品・化粧品分析

家庭用品の分析

その他事業

財団法人
日本食品分析センター

ホームページ <http://www.jfrl.or.jp>

東京本部	〒151-0062 東京都渋谷区元代々木町52番1号 TEL 03-3469-7131(代) FAX 03-3469-7009
大阪支所	〒564-0051 大阪府吹田市豊津町3番1号 TEL 06-6386-1851(代) FAX 06-6380-2411
名古屋支所	〒460-0011 名古屋市中区大須4丁目5番13号 TEL 052-261-8651(代) FAX 052-261-8650
九州支所	〒812-0034 福岡市博多区下呉服町1番12号 TEL 092-291-1256(代) FAX 092-291-1135
多摩研究所	〒206-0025 東京都多摩市永山6丁目11番10号 TEL 042-372-6711(代) FAX 042-372-6700
千歳研究所	〒066-0052 北海道千歳市文京2丁目3番 TEL 0123-28-5911(代) FAX 0123-28-5921
彩都研究所	〒567-0085 大阪府茨木市彩都あさぎ7丁目4番41号 TEL 072-641-8721(代) FAX 072-641-8700
仙台事務所	〒980-0011 仙台市青葉区上杉2丁目4番4号 TEL 022-221-9461 FAX 022-221-9460

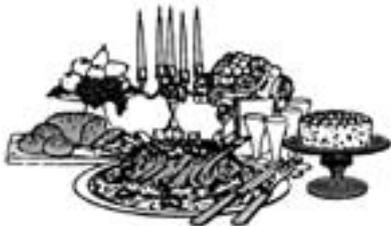
忘年会・新年会・歓送迎会・クラス会・謝恩会
PTA会合・周年行事・結婚披露宴・御法事

CATERING Service

出張料理

10-パーティ・御宴会は
サンフリアで!!

お集まりにふさわしい雰囲気演出致します。
お客様のご予算に応じたお料理お飲物を調整致します。



グラス～テーブルクロス等
あらゆる備品を用意し、
セッティングからサーバー
後片付けまですべて
おまかせ下さい。

府中グリーンプラザ内
府中駅北口駅前

サンフリア

TEL&FAX (042) 368-6368

府中グリーンプラザ 会議室・和室等を御利用下さい。10名様～250名様
府中市府中町1-1-1グリーンプラザ3F

東京農工大学生協の オリジナルグッズの一部をご案内します

白石さんと生協職員が
生協組合員さんと一緒に作った
クラッチバック



525円(税込)

牛柄クラッチバック姉妹品
牛柄模様を使ったブックカバー



文庫カバー 380円(税込)
新書カバー 430円(税込)

MOTの院生が
マネジメント研究の一環として
商品を企画したストラップ



500円(税込)

その他、生協の店舗では色々なオリジナルグッズを取り扱っています。
キャンパスにお越しになったときは、生協の店舗にもお寄りください

東京農工大学消費生活協同組合

農学部本部 TEL 042-366-0762
工学部本部 TEL 042-381-7213

編集 後記

Editor's note

「農工通信80号」をお届けします。表紙は、毎回好評を得ています佐藤勝昭先生の水彩画で、農学部附属広域都市圏フィールド・サイエンス教育研究センターのFM（フィールド・ミュージアム）唐沢山の管理棟・宿泊棟です。「生協の白石さん」で農工大の名前を広めるのに貢献した生協工学部店舗職員の白石昌則氏が昨年11月にインターカレッジコープ渋谷店に転勤しましたので、今号で寄稿をお願いしました。農工大では引き続き広報大使に就任しています。農工通信の内容等にご意見やご提案などがありましたら、お気軽に同窓会事務局までお願いいたします。投稿原稿（題目欄を除く文字数は、0.5ページで850字、1ページで1800字）、「部会・支部・クラス会だより」や「掲示板」の内容も募集しています。なお、同窓会創立50周年記念事業の募金を行っております。皆様方のご支援を賜りますよう心よりお願いいたします。

（広報部長 佐藤敬一、林産S56記）

農工通信 第80号

発行日 平成21年（2009年）11月1日

発行所 東京農工大学同窓会

連絡先 〒183-8538 東京都府中市晴見町3-8-1 東京農工大学同窓会事務局

TEL 042 (364) 3328 FAX 042 (335) 3500

e-mail info@tuat-dousoukai.jp <http://tuat-dousoukai.jp>

振替口座 00120-9-93147番（加入者負担）

加入者名 東京農工大学同窓会

印刷所 小野高速印刷株式会社

〒870-0913 大分県大分市松原町2-1-6

キャリアパス支援センター

Career Path Support Center



同窓会会員の皆様方へ

博士号取得者が、大学等の研究機関ばかりでなく
企業を含む多様な方面へ進み、その能力を発揮して活躍できるよう、
ご協力をお願い致します。

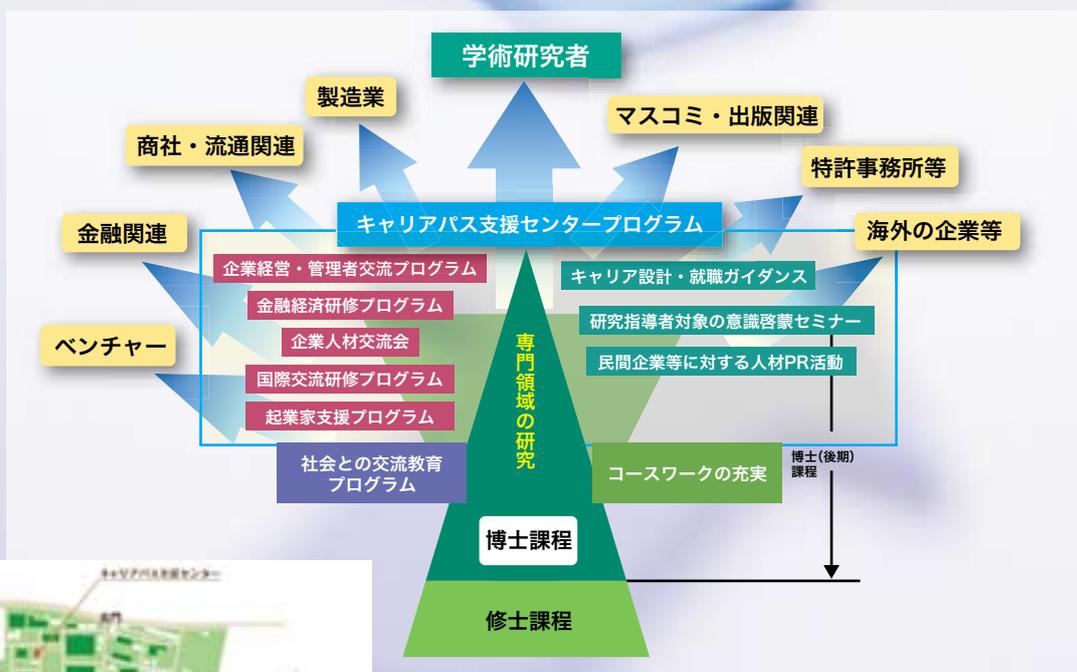
東京農工大学キャリアパス支援センターは、博士号取得者が企業等の幅広い分野における社会活動を先導できるよう、下図のとおり支援プログラムを実施し、広い視野を持たせ、企業、法人、研究機関等、多様な方面への就職支援を使命としています。支援対象は、東京農工大学大学院工学府、生物システム応用科学府、連合農学研究科のみならず、全国6地区の連合農学

研究科を構成する18大学の博士課程学生、ポストドクター（PD）等です。

当センターでは、キャリアパス支援システム「キャリアパス支援サイト（求人求職マッチングサイト）」を運用して、学生・PD並びに企業、研究機関等にサイトに登録願ひ、各種支援プログラム情報の発信、学生・PDと企業等との求人求職のマッチングを行っています。

皆様方にご協力賜りたい支援事業

- ・キャリアパス支援サイト（求人求職マッチングサイト）（<http://www.career-pass.jp/>）へ登録し、活用いただける企業、研究機関等の紹介。サイトは無料でご利用いただけます。
- ・インターンシップとして学生を受入れていただける企業、研究機関等の紹介。



【ご連絡先】 キャリアパス支援センター 〒183-8505 府中市幸町 3-5-8
TEL 042-367-5921・5922 船山・赤井
E-mail cpsc@cc.tuat.ac.jp